IGS

国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所

2022年度
事業報告書

Institute for Gender Studies Ochanomizu University

IGS Institute for Gender Studies Ochanomizu University

ジェンダー研究所
2022年度事業報告書によせて

ジェンダー研究所長　　**戸谷　陽子**

お茶の水女子大学ジェンダー研究所2022年度の事業内容および活動の報告をお届けします。過去2年間余の新型コロナ感染症パンデミックが収束とはいかないまでも、2022年度は、年度のはじめから大学内外において活動制限が緩和されて始まりました。感染症に注意しつつ、パンデミック後の活動の在り方を手探りで模索しながら活動し、新たな手ごたえを得られた年でもあったと思います。中でも事業や企画推進の形態は、それまでのオンライン中心から、原則として対面／オンライン併用とし、両形態の特徴を把握しそれらを活かせるように企画を進めました。海外との実際の交流も一部ではありますが復活し、その他IGSセミナー／研究会9件（うち研究協力員研究報告2件)、グローバルリーダーシップ研究所との共催も含め、国際シンポジウムは3件開催するなど、所長以下、専任教員、研究員、研究系および事務系のスタッフが協力して、精力的に研究・教育活動および研究交流を進めることができました。高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム・IGS セミナー等の開催、学術雑誌の刊行、教育プログラムの実施、国際的学術ネットワークの構築、研究成果の発信と社会還元といった事業において、今年度もいっそうの成果を上げることができましたことをここにご報告申し上げます。

当研究所の目的は「ジェンダーに関する総合的、国際的な研究および調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資する。」と規則に定めており、ジェンダー研究発展のための使命と責任を実感する次第です。これを基本理念として、今後も、確固とした学術的研究成果に支えられた、研究・教育その他の実践活動を推し進め、よりよき社会への還元と啓発を続けてゆきたいと考える次第です。日頃ジェンダー研究所の活動をご理解くださり、ご支援・ご協力をいただいておりますみなさまに心より御礼を申し上げますとともに、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

国立大学法人お茶の水女子大学

ジェンダー研究所
2022年度事業報告書

Institute for Gender Studies
Ochanomizu University

【目　次】

1．ジェンダー研究所 2022（令和 4）年度事業概要 7

ジェンダー研究所概要

2022 年度事業概要

2．研究プロジェクト 15

2022 年度研究プロジェクト成果報告

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

（Ⅲ）海外の助成金による研究プロジェクト

3．国際シンポジウム・セミナー 25

主催国際シンポジウム詳細

リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く

主催 IGS セミナー詳細

The Marcos Return: What Does it Mean for the Philippines?／フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか／19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』（1851）を例に／日本（と世界）における性的マイノリティの政治／クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）／「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』（1973）再考／家電と暮らしのポリティクス／クィアする現代日本文学―ケア・動物・語りとジェンダー

主催研究会詳細

IGS 研究協力員研究報告会

共催国際シンポジウム詳細

東アジアにおけるジェンダーと政治代表

「ガラスの崖」をよじ登る：「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁

後援イベント

日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会：フェミニスト経済学からみた政治・権力――家父長的世帯主義批判

4. 国際研究ネットワーク……51
1）国際的な共同研究・研究交流
2）INTPART プロジェクト
3）国内外招聘研究者一覧

5. 若手研究者の育成……61
1）AIT ワークショップ
2）大学院における次世代研究者育成
3）専任・特任教員担当講義

6. 学術成果の発信……67
1）学術雑誌『ジェンダー研究』
2）プロジェクト報告書 IGS Project Series

7. 文献収集と公開·史料電子化·ウェブ発信……73
1）文献・資料の収集と公開
2）IGS 史料電子化プロジェクト
3）ウェブサイト等での情報発信

8. 社会貢献……79

【資料】

① 構成メンバー……84
② 研究プロジェクト一覧……95
③ 協力研究者一覧……96
④ 国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧……99
⑤ 新規収蔵図書・資料……102
⑥ 電子化イベント一覧……105
⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則……110
⑧ 『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定……112
⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト　プライバシー・ポリシー……114

1. ジェンダー研究所 2022(令和 4)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2022 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要

学際的・先駆的なジェンダー研究と教育を推進する国際的な学術拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、学際的かつ先駆的なジェンダー研究と若手研究者育成を推進する国際的な学術拠点である。その起源は、1975 年にお茶の水女子大学に創設された「女性文化資料館」という研究機関である。ジェンダーやフェミニズムという言葉が一般的には全く知られていなかった時代から、歴代の所属研究者たちはジェンダー研究に取り組み、学内外・国内外の研究者らと積極的に研究交流を続けてきた。これら先人の研究者たちが培ってきたジェンダー研究の成果と国際的な学術ネットワークを礎に、現在、ジェンダー研究所では、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、若手研究者の育成、学術雑誌『ジェンダー研究』の編集・刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

［参照:本報告書 110 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」］

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies（IGS））の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	**女性文化資料館設立**
1986	**女性文化研究センター設立**
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	**ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）**
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	**21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択**
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	**グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立**

▶ジェンダー研究所 2022 年度事業概要

1. 研究プロジェクト

2022 年度は、IGS 研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が 5 件、研究代表者または分担者として科研費を獲得しての研究プロジェクトが 7 件、そして海外の助成金によるプロジェクト 2 件の、計 14 件のプロジェクトが進行している。IGS 所属研究者らは、研究会やセミナー、国際シンポジウムを企画開催したほか、学会発表や論文投稿、書籍刊行、学術誌『ジェンダー研究』の編集刊行により成果発信にも努めた。

1）IGS 研究プロジェクト

	プロジェクト名	担当
1	「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
2	東アジアの越境的女性運動	大橋
3	資本と身体のジェンダー分析	大橋・足立・板井
4	性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
5	グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山

2）外部資金による研究プロジェクト

	財源	テーマなど	担当
1	科研費基盤 C	ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗 2019（H31）～2022（R4）	申
2	科研費基盤 B	女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査 ［研究代表者：三浦まり（上智大学）］2018（H30）～2022（R4）	申
3	科研費基盤 C	香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析　2019（H31）～2023（R5）	大橋
4	科研費基盤 B	再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯［研究代表者：定松文（恵泉女学園大学）］ 2019（H31）～2022（R4）	大橋 平野
5	科研費基盤 B	新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー ［研究代表者：堀芳枝（早稲田大学）］ 2020（R2）～2022（R4）	大橋 足立
6	科研費 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）	人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー ［研究代表者：堀口正（大阪公立大学）］ 2021（R3）～2024（R6）	大橋
7	科研費若手（B）	「からゆきさん」にみる移動・性・権力の諸相 2017（H29）～2022（R4）	嶽本

3）海外の助成金によるプロジェクト

①ノルウェーリサーチカウンシル INTPART（戸谷・小玉・仙波・佐野）2019（H31）～2022（R4）

②ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK（戸谷）2021 年 8 月～2025 年 7 月

［参照：本報告書 15～23 頁「研究プロジェクト」、67～71 頁「学術成果の発信」］

2. 国際シンポジウム等の開催

IGS 主催のシンポジウムやセミナーは、ジェンダー研究所所属研究者が、自身の研究成果と国際的な人脈を生かして企画しており、研究所の研究・教育事業と有機的に連携している。3 年ぶりに対面でのイベント開催がかなった 2022 年度は、国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」をオンラインと対面のハイブリッドで開催した。「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」の概念を切り口として、基本的人権である妊娠・中絶・再生産の自己決定権を損なうのは何か、法・政治・社会運動はどのように関わってきたのか、米国と日本の専門家らが対面で議論した。その内容は、『ジェンダー研究』第 26 号（2023 年 7 月刊行予定）に特集企画として掲載する。また、ジェンダー研究所所属教員が指導する大学院生たちが主体となって企画した IGS セミナー（学内限定）「フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか」を開催した。フェミニズム誌の編集者を招き、フェミニズム誌を編集することの意義と、アカデミアの内から外へジェンダー研究の成果を広く一般に還元することについて、院生・学部生らも参加して熱心な議論が交わされた。このほか、IGS セミナー8 件、研究会 1 件を主催したほか、共催国際シンポジウムを 2 件開催した。［参照：本報告書 25〜49 頁「国際シンポジウム・セミナー」］

IGS 主催国際シンポジウム
リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く［本報告書 27 頁］







IGS セミナー
フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか［本報告書 31 頁］（ポスター画像は次頁）

IGS 主催セミナー・研究会



The Marcos Return: What Does it Mean for the Philippines?[本報告書 30 頁]



フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか[本報告書 31 頁]



19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』(1851)を例に[本報告書 33 頁]



日本(と世界)における性的マイノリティの政治[本報告書 35 頁]



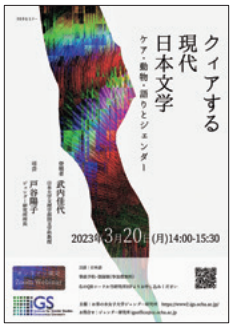
クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性(モビリティ)[本報告書 37 頁]



「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973)再考[本報告書 39 頁]



家電と暮らしのポリティクス[本報告書 41 頁]



クィアする現代日本文学―ケア・動物・語りとジェンダー[本報告書 43 頁]



IGS 研究協力員研究報告会[本報告書 45 頁]

共催・後援　シンポジウム



東アジアにおけるジェンダーと政治代表[本報告書 47 頁]



「ガラスの崖」をよじ登る：「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁[本報告書 48 頁]



日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会[本報告書 49 頁]

3. 国際研究ネットワーク

2022 年 10 月から 2023 年 1 月にかけ、香港浸會大学ルセッタ・カム准教授が IGS 研究協力員として来日し、主に中国文化圏（台湾、香港、中国、および海外在住中国系女性）における宝塚歌劇団のファンコミュニティーについての研究に従事した。また 12 月 9 日には大橋史恵 IGS 教員とともに IGS セミナー「クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性」を企画し、中国文化圏に出自をもつクィア女性たちの国際移動をめぐって氏が 2015 年から継続的に取り組んできた研究プロジェクトの成果報告を行った。

2023 年 1 月 13 日には、申琪榮 IGS 教員が 2015 年から取り組んできた IGS の国際共同研究プロジェクト「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究を総括する国際シンポジウム「東アジアにおけるジェンダーと政治代表 Gender and Political Representation in East Asia」が WONDER Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation 主催、ジェンダー研究所共催によって実施された。

このほか 2021 年度から大阪市立大学堀口正教授による国際共同研究プロジェクト「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」に大橋史恵 IGS 教員が参加し、中国社会科学院や華東師範大学の研究協力者とともに共同研究に取り組んでいる。

［参照：本報告書 25〜49 頁「国際シンポジウム・セミナー」、51〜59 頁「国際研究ネットワーク」］



IGS 研究協力員として来日した香港浸會大学ルセッタ・カム准教授が企画・登壇した IGS セミナー「A Queer Exit or a New Queer/Homo-normativity?: Transnational Mobility of Queer Chinese Women from China and Hong Kong」（本報告書 37 頁）

4. 若手研究者の育成：AIT ワークショップ、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の指導

2022 年度は 4 月から原則対面での授業となった。IGS 所属の特任講師が担当する大学院科目「国際社会ジェンダー論」は IGS の国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」の一環であるが、これはタイにあるアジア工科大学院大学（Asia Institute of Technology）との短期交換研修プログラムである。AIT からも博士前期課程の院生が来日し、お茶大院生と研究交流を行い、お茶大からも博士前期課程の院生たちがタイに派遣され、フィールドワークや、研究交流、帰国してからの AIT ワークショップ・プログラムの報告会、報告書作成などが組み込まれている。

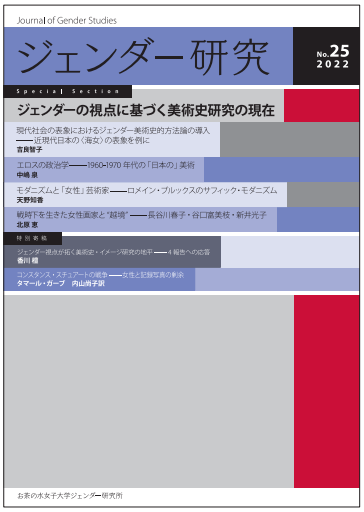
また所属教員指導のもと、5 人の院生が博士前期課程ジェンダー社会科学専攻を修了した。

［参照：本報告書 61〜66 頁「若手研究者の育成」］



AIT ワークショップ・プログラムでタイのアジア工科大学院大学（AIT）にて研究発表をするお茶大院生と AIT 院生たち

5. 学術雑誌『ジェンダー研究』刊行と学術成果発信



国際的学術雑誌『ジェンダー研究』第 25 号（2022 年 7 月刊行）は「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」を特集した。本特集は、日本でジェンダーの視点から美術史研究を牽引している 4 名の研究者による充実した研究論文 4 本に加え、特別寄稿としてこの特集の元となった同名の IGS シンポジウムのコメンテーターであった香川檀氏のコメント原稿と、この分野で美術史学研究をリードするロンドン大学のタマール・ガーブ教授の論考の 2 本で構成されており、ジェンダー視点に基づいた美術史研究の現在地が示されている。投稿論文は厳正な審査の結果、5 本の掲載が認められた。書評は、前年度までのジェンダー・フェミニズムの関連分野で注目された 17 冊の著書を、ジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものとなっている。

報告書シリーズ（IGS Project Series）は、『「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1（IGS Project Series 20）台湾におけるジェンダークオータ』の増刷をした。［参照：本報告書 67〜71 頁「学術成果の発信」］

6. 文献収集・史料電子化、ウェブ発信、社会還元

文献収集・資料整理分野では、寄贈図書・資料の受入のほか、所属研究者らの著書や、主催シンポジウムやセミナーの関連書籍の購入を進めた。

ウェブサイトによる情報発信は、例年と同じくイベント案内や開催報告の発信に取り組むほか、ウェブサイト掲載情報を精査し、研究所事業全般についての情報公開が日本語および英語でわかりやすくなされるよう、情報整理作業を進めている。



またウェブサイトの運営と並行して、研究所の活動をより周知するために、ホームページへの QR コードを載せた栞を新たに製作した。栞は二種類あって、それぞれが研究所内で募集したキャッチフレーズをもとにデザインされている。

社会貢献の面では、一般公開のセミナー・シンポジウム等開催による事業成果社会還元のほか、所属研究者は、報道機関の取材に応じるなど、ジェンダー課題に関する知見の頒布にも努めている。［参照：本報告書 73 〜77 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、79〜82 頁「社会貢献」］

7. 構成メンバー

前年度末に研究所事業の中核を担った計 3 名のメンバーが一度に退職したことにより、スタッフ体制に大きな変動があった。本年度から新たに特任講師 1 名（5 月から）、特任リサーチフェロー1 名（8 月から）、特任アソシエイト・フェロー1 名（5 月から）が着任した。また前年度末に退職した 3 名のうち、平野恵子横浜国立大学准教授と仙波由加里氏の 2 名が研究協力員として研究所事業に参与したほか、10 月から 1 月の間、ルセッタ・カム香港浸會大学文学院准教授も同協力員として迎え入れられた。その他の研究員・客員研究員等については、前年度から変化はなかった。

［参照：本報告書 110 頁資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」、84〜94 頁資料①「構成メンバー」］

2. 研究プロジェクト

2022 年度研究プロジェクト成果報告

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

（Ⅲ）海外の助成金による研究プロジェクト

▶ 2022 年度研究プロジェクト成果報告

学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

ジェンダー研究所は 2015 年以来、グローバル女性リーダー育成研究機構の中核的な研究機関として先端的ジェンダー研究に取り組んできた。その前身であるジェンダー研究センターは、国際的なジェンダー研究のネットワークにおける東アジアにおける重要なハブとして活動し、21 世紀 COE プログラム『ジェンダー研究のフロンティア』（2003〜2007 年度）をはじめとした研究プロジェクトを通じて広く注目を集めてきた。ジェンダー研究所はこの研究成果を引き継ぎつつ、伝統的な学問分野に縛られない学際的で先駆的なジェンダー研究を志している。ジェンダー研究所は、アジアにおけるジェンダー研究の拠点を目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果を広く社会へ還元していく。

先端的な研究を推進し、広い学術ネットワークを構築

ジェンダー研究所は、（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト、（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト、（Ⅲ）海外の助成金によるプロジェクトにおいて、先端的な研究を推進している。とりわけ IGS 研究プロジェクトでは学内研究員、客員研究員、研究協力員の協力を得ながら広い学術ネットワークを構築し、その成果を意欲的に発信している。2022 年度もそれぞれの研究分野において研究会や公開セミナー、国際シンポジウムを実施したほか、成果出版物の刊行、国際共同研究や国際ネットワークの構築に取り組んだ。

今年度は 3 年ぶりに、アジア工科大学院大学（AIT）における院生交流（本報告書 62〜63 頁参照）を対面で実施することができた。また、研究所メンバーらは論文執筆のほか、学会発表、外部講演などを活発に行った。個々のプロジェクトの研究概要については、本報告書 18〜23 頁を参照していただきたい。

国際シンポジウム、IGS セミナー、研究会の開催と学術雑誌『ジェンダー研究』の刊行

各研究分野におけるシンポジウムやセミナーの開催と、『ジェンダー研究』の刊行により、成果発信に力を入れた。

今年も新型コロナウイルス感染症の影響により Zoom を利用したオンラインでのイベント実施が継続されたが、国際シンポジウムやセミナーのうち半数ほどはハイブリッドないし対面のみで実施した。オンラインでの企画には、普段お茶の水女子大学に足を運ぶことができないような幅広い層に参加してもらうことができるという利点があり、対面実施であればイベント終了後に非公式なディスカッションを継続できるという良さがある。今後も企画内容に応じて柔軟な開催方法をとりたいと考えている。

ジェンダー研究所の学術誌『ジェンダー研究』は第 25 号が 2022 年 7 月に刊行された。今号は、論文 4 本と特別寄稿 2 本から成る特集「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」のほか、投稿論文 5 本、書評 17 本という構成において発行された。今号の特集は、ジェンダー・フェミニズムの視座における美術史研究の領域で先駆的な研究を行ってきた天野知香本学教授・本誌編集委員の協力を得たものである。天野先生は前年度、同テーマでのシンポジウムを企画してくださり、次いで本号の特集の責任編集者になってくださった。ジェンダー研究所が長年、学内外で培ってきた学術ネットワークの一つの成果といえるだろう（本報告書 68〜70 頁参照）。

2022 年度研究プロジェクト　分野別一覧

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究
「東アジアの越境的女性運動」研究
資本と身体のジェンダー分析
性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析
グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト
科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817） 女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査
科学研究費基盤研究 B（課題番号：20H01468） 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー
科学研究費基盤研究 B（課題番号：19H01578） 再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12604） ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603） 香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析
科学研究費若手研究 B（課題番号：17K13298） 「からゆきさん」にみる移動・性・権力の諸相
科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）　（課題番号：21KK0033） 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

（Ⅲ）海外の助成金によるプロジェクト
ノルウェーリサーチカウンシル（287699） INTPART 「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」
ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku（UTF-2020/10135） UTFORSK「ノルウェーと日本におけるジェンダー平等およびダイバーシティ教育」

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究者】三浦まり（上智大学教授）、スティール若希（元名古屋大学特任准教授）、濵田真理（Stand by Women 代表）、Soo-hyun Kwon（Sogang University）ほか

【概要】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本と韓国、台湾の議員を対象としたアンケート調査による国際比較分析を行ない、東アジア地域において、女性の政治代表性を向上または妨げる要素は何か、政治制度におけるジェンダー多様性を実現させるにはどのようにしたらよいかを検討する。

IGS 研究プロジェクト

東アジアの越境的女性運動

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【概要】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には（1）ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」（第 189 号条約）に関連する労働運動、（2）反軍事化をめぐる女性たちの運動、（3）中国の女権主義者たちのトランスローカル/トランスナショナルな運動に目を向ける。

IGS 研究プロジェクト

資本と身体のジェンダー分析

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究者】足立眞理子（IGS 客員研究員）、板井広明（IGS 研究協力員/専修大学准教授）

【概要】

本プロジェクト「資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中枢機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体の断片化や排除／包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダーの視点から分析する。

（Ⅰ）IGS 研究プロジェクト

IGS 研究プロジェクト

性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析

【研究担当】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【概要】

本研究プロジェクトは、開国以降に海外へ渡航し、渡航先で性売買をしていた女性たち（「からゆきさん」）の状況を再生産領域の観点から明らかにすることを目的としている。「からゆきさん」については性売買の問題のみに注目されがちだが、女性たちの再生産領域の問題と連関する「経験」として捉える必要があり、女性たちの人生を視野に入れて考察していきたい。

IGS 研究プロジェクト

グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー

【研究担当】本山央子（IGS 特任 RF）

【概要】

本研究プロジェクトは、グローバル政治経済構造が変容する中で、日本がいかに国際ジェンダー平等規範と交渉しつつ、内的ジェンダー秩序との矛盾を統制しながら「先進国」としての特権的地位や国内における権力の正統性を主張しようとしているかを、主に安全保障や外交政策へのジェンダー／フェミニズムの導入について検討しようとするものである。

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817）

女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査

【研究担当】申琪榮（IGS 教授）［研究分担者］

【研究代表者】三浦まり（上智大学教授）

【期間】2018～2022 年度（延長）

【概要】

本研究は「女性の政治参画に対する障壁」を国会議員および主要政党の都道府県支部への調査を通じて明らかにする。女性議員が少ない原因に関してはすでに国内外で研究の蓄積があり、複合的な要素によって女性候補者の数が抑制されていることが分かっている。中でも大きな障壁となっているのが、「政党の候補者リクルートメントと公認決定過程」である。本研究はそこに焦点をあて、郵送調査とインタビュー調査を組み合わせることで、なぜ女性候補が擁立されることが少ないのか、どこに障壁があるのかを特定する。これまで海外の研究で指摘されているジェンダー・ステレオタイプ、男性のホモ・ソーシャル・ネットワーク、成功体験の過大評価、潜在候補者への説得方法の男女差などについて、それらはどの程度の影響力を日本では持っているのか、政党差、地方差はどのように見られるのかを明らかにする。

科学研究費基盤研究 B（課題番号：20H01468）

新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）［研究分担者］、足立眞理子（IGS 客員研究員）［研究分担者］

【研究代表者】堀芳枝（早稲田大学教授）

【期間】2020～2022 年度

【概要】

本共同研究は、IT-BPO の実証研究と国際比較によって、アジアについての新しい国際政治経済学を構築するものである。具体的には IT-BPO 産業の新国際分業の成立にともなう女性の労働力の再配置と、成長の果実としての中間層の成長と消費、都市化の進展、さらにはこうした経済社会の変容が、各国の民主主義に与える影響を国際比較から検討する。

科学研究費基盤研究 B（課題番号：19H01578）

再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）［研究分担者］、平野恵子（IGS 研究協力員/横浜国立大学准教授）［研究分担者］

【研究代表者】定松文（恵泉女学園大学教授）

【期間】2019～2022 年度（延長）

【概要】

本研究は、再生産労働の国際分業が進展する日本において、次の二点に焦点を当て実証的に検討する。第一に歴史的視点からの雇用主―派遣企業―労働者の非対称的な関係、第二に家事・ケア労働者が有する限定的社会関係資本から選択する行為や集合行為によって、労働者を取り巻く制度の変容。

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12604）

ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗

【研究代表者】申琪榮（IGS 教授）

【期間】2019～2022 年度（延長）

【概要】

議会のジェンダー公平な代表性を確保するために導入されたジェンダー・クオータ（女性候補者割当制）の効果とその制度が女性の政治的代表性に及ぼす影響を分析する。事例として取り上げる韓国は、2000 年代前半から政党の候補者の一定割合を女性に当てるクオータ制度を導入した。しかし、クオータが実施されて 15 年が経た現在も女性議員は 20%に至らず、現行クオータ制度に疑問が呈されている。先行研究では、クオータ制度が効果を出せない理由の一つに、議会の男性優位性が脅かされることへの抵抗、すなわち、クオータ・バックラッシュが指摘されている。本研究は、過去 15 年間の政党別選挙データ及び政党関係者や女性議員への聞き取り調査を通じて、クオータ制度の実施状況、クオータで当選した女性議員の政治的キャリアパス及び政党の公認過程を分析し、クオータ導入後に現れたクオータ・バッシングの諸相を明らかにすることで、韓国でクオータ制度が十分な効果を発揮できない原因を解明するとともに国際比較のための理論構築を目指す。

科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603）

香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析

【研究代表者】大橋史恵（IGS 准教授）

【期間】2019～2023 年度（延長）

【概要】

本研究は、香港社会において異なる移住女性による再生産労働力がどのように配置されてきたかを、中国人家事労働者と外国籍家事労働者およびその雇用主を対象としたオーラル・ヒストリーの聞き取りから明らかにするものである。香港が輸出志向工業化路線から東アジアの金融・貿易サービスの中枢を成す「グローバル・シティ」へと転換した時期は、外国籍の家事労働者の受け入れが拡大していくとともに、主に広東省に出自をもつ中国人女性の労働力配置に変化が生じた時期と重なる。1980 年代末から今日までの香港の社会経済構造の変動において、トランスナショナルにあるいはトランスローカルに移動して家事労働者になった女性たちはどのように受け入れられたのか。異なるケアの担い手たち（移住女性）と受け手たち（雇用主）の「ケアの記憶」を通じて香港の再生産領域の変化をとらえたい。

（Ⅱ）外部資金研究プロジェクト

科学研究費若手研究（B）（課題番号：17K13298）

「からゆきさん」にみる移動・性・権力の諸相

【研究代表者】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【期間】2017〜2022 年度

【概要】

本研究は、開国以降に海外へ渡航し、渡航先で性売買をしていた女性たち（「からゆきさん」）の状況を歴史的に明らかにするために 2 つのネットワークの解明を目的とする。ネットワークの 1 つは渡航幇助者組織のネットワークであり、もう 1 つは女性たちの関係性のネットワークである。女性の移動には様々な役割を担った人々が関わっていたが、その実態は未だ不明な部分が多い。また移動によって女性たちが元々属していた関係性と移動先で構築しなければならなかったネットワークについても検討していきたい。

科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033）

人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）［研究分担者］

【研究代表者】堀口正（大阪公立大学教授）

【期間】2021〜2024 年度

【概要】

本研究は科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））を受け、2021 年 12 月から 2025 年 3 月にかけて実施される国際共同研究のプロジェクトである。人民公社期（1950 年代〜70 年代）の中国農村における生活秩序の変化とジェンダーについて、資源配分のあり方に着目して、実証的に検討することを目的とする。

中国農村では、1949 年の「暫定憲法」や 50 年の「婚姻法」「土地改革法」の公布、また人民公社制度の展開により、封建的な慣習の廃絶が進められるとともに男女平等の制度的基盤が構築されていった。ところが、生産労働への参加の程度の男女差（労働点数に対する女性差別の存在も）、耕地や水利施設などの共有資源へのアクセスに女性と男性とでどの程度違いがあったのかなど、不明な点は多い。さらに公共食堂や託児所の現実的な利用状況、家事やケアなど再生産労働の性別分業についても、研究の空白部分になっている。

以上のことから、①各地農村における人民公社期の資源配分のあり方を解明すること、②世帯内外における生産・再生産労働の労働力配置の実態を考察し、「村」や「家」の権力関係や規範にどのような揺らぎがあったのかを解明すること、③さらに①②と関係する問題として、国家レベルの指針や計画生育が基層社会における生活秩序に与えた影響を解明する。

（Ⅲ）海外の助成金による研究プロジェクト

ノルウェーリサーチカウンシル（287699）

INTPART 「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」

【研究担当】
石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長：本学側代表）
戸谷陽子（IGS 所長／基幹研究院人文科学系教授）
小玉亮子（IGS 研究員／基幹研究院人間科学系教授）
吉原公美（リサーチ・アドミニストレーター：事務局）
松田デレク（国際教育センター講師／群馬大学講師）
仙波由加里（IGS 研究協力員）
佐野潤子（IGS 研究協力員／慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師）
【期間】2019～2022 年度
【概要】
ジェンダー平等とダイバーシティに関する、NTNU ジェンダー研究センターとの共同プロジェクト。ノルウェーと日本のジェンダー平等およびダイバーシティの現状状況について理解を深め、社会・文化・歴史・政治的背景を含めて分析・考察する国際比較研究し、類似と相違についての理解を深めることを通じて、新たな知見を得ることを目指す。担当研究者が、それぞれの専門領域に沿ってノルウェーの研究者と組んで研究を進める（本報告書 56 頁参照）。

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku（UTF-2020/10135）

UTFORSK 「ノルウェーと日本におけるジェンダー平等およびダイバーシティ教育」

【研究担当】
小林誠（グローバルリーダーシップ研究所長）［本学側代表］
戸谷陽子（IGS 所長）［本学側プロジェクト・コーディネーター］
石井クンツ昌子（理事・副学長）
松田デレク（国際教育センター講師／群馬大学講師）
岡村利恵（グローバルリーダーシップ研究所特任講師）
吉原公美（リサーチ・アドミニストレーター）
ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター研究者
【期間】2021～2025 年度
【概要】
ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクト。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。また、SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す（本報告書 56 頁参照）。

3. 国際シンポジウム・セミナー

2022 年度 国際シンポジウム・IGS セミナー・研究会詳細

▶ 2022 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

2022 年度は IGS 国際シンポジウム 1 件、IGS セミナー8 件、研究会 1 件を主催したほか、共催国際シンポジウム 2 件、後援イベント 1 件を開催した。詳細は次頁以降を参照いただきたい。

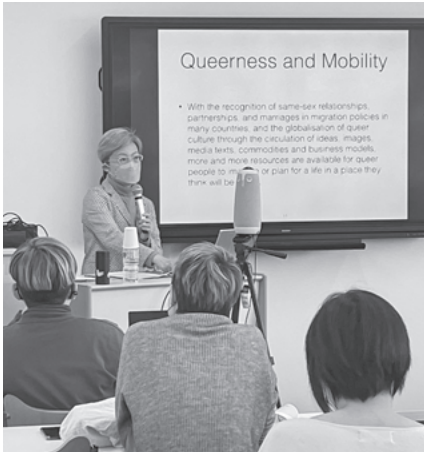
IGS 主催国際シンポジウム	
リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27 頁
IGS 主催セミナー	
The Marcos Return: What Does it Mean for the Philippines?	30 頁
フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか	31 頁
19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』（1851）を例に	33 頁
日本（と世界）における性的マイノリティの政治	35 頁
クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）	37 頁
「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』（1973）再考	39 頁
家電と暮らしのポリティクス	41 頁
クィアする現代日本文学―ケア・動物・語りとジェンダー	43 頁
IGS 主催研究会	
IGS 研究協力員研究報告会	45 頁
共催国際シンポジウム	
東アジアにおけるジェンダーと政治代表	47 頁
「ガラスの崖」をよじ登る：「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
IGS 後援イベント	
日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会 フェミニスト経済学からみた政治・権力――家父長的世帯主義批判	49 頁



国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」

IGS セミナー「家電と暮らしのポリティクス」





IGS セミナー「クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）」

▶ 2022 年度 主催国際シンポジウム詳細

IGS 国際シンポジウム

リプロダクティブ・ジャスティス

妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く



【日時】2022 年 12 月 20 日（火）16:00~19:15

【会場】
ハイブリッド開催（共通講義棟 2 号館 201 室、Zoom ウェビナー）

【パネリスト】
イケモト・リサ・C（カリフォルニア大学教授）
「ロー判決・ドブス判決後の米国におけるリプロダクティブ・ライツ／ジャスティス」

岩本美砂子（元三重大学教授）
「政治右派＋宗教右派と反リプロダクティブ・ライツ（日本）」

※登壇予定であったペク・ヨンギョン氏（済州大学校）は欠席

【コメンテーター】
高谷幸（東京大学准教授）
飯野由里子（東京大学大学院特任准教授）
大橋由香子（「SOSHIREN 女（わたし）のからだから」メンバー）
宝月理恵（お茶の水女子大学特任講師）

【総合司会・趣旨説明】申琪榮（IGS 教授）

【モデレーター】本山央子（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】 グローバルリーダーシップ研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】308 名

【趣旨】

本シンポジウムは「リプロダクティブ・ジャスティス」の概念を切り口として、妊娠・中絶・再生産の自己決定を可能／不可能にするのは何か、法・政治・社会運動はどのように関わってきたのかを米国及び日本の専門家らと議論することを目的に開催された。第一部のパネリスト報告では中絶を巡る米国最高裁の判決や日本におけるリプロダクティブ・ヘルス／ライツの課題について報告がなされた。第二部では 4 人のコメンテーターから「リプロダクティブ・ジャスティス」を捉える多様な視座や取り組む上での課題についてコメントがあり、ディスカッションが行われた。

【開催報告】

冒頭で、本シンポジウムの企画者である申琪榮氏が次のような開催趣旨を述べた。――妊娠・中絶・再生産をめぐる女性の決定やそれを保障する医療、公的サービスは基本的人権であるが、歴史の中で女性のからだや再生産能力は常に権力によって占有が争われてきた。2022 年にアメリカ最高裁は、人工妊娠中絶の権利の法的根拠となってきたロー対ウェイド判決を覆す決定を下した。また日本では刑法の堕胎罪が未だに存在している。特に近年は、ジェンダー、人種、セクシュアリティなどが交差する抑圧の中で女性は分断されており、個人の「リプロダクティブ・ヘルス（性・生殖・再生産をめぐる健康）」や「リプロダクティブ・ライツ（性・生殖・再生産をめぐる権利）」のみならず、それを阻む構造自体に目を向ける必要性がある。本シンポジウムでは上記の問題意識から「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」の概念を切り口として、妊娠・中絶・再生産の自己決定を可能／不可能にするのは何か、法・政治・社会運動はどのように関わってきたのかを米国及び日本の専門家らと議論したい。

第一部のイケモト・リサ・C 氏からの報告では、まずリプロダクティブに関する 3 つのフレームワークが提示された。本シンポジウムのテーマであるリプロダクティブ・ジャスティスは、女性の中絶権利に焦点を当てたリプロダクティブ・ライツの限界から登場し、学術概念であると同時に社会運動の概念として発展してきた。その中心には社会的不平等への注視、インターセクショナリティ概念の使用、コミュニティ団体の重視がある。次に報告ではアメリカの中絶権利を左右してきた最高裁判決についての説明があった。1973 年のロー対ウェイド判決は、中絶を「プライバシーの権利」として位置づけ「ジェンダー平等」の保護として認めたわけではない。しかしながら同判決は女性が自分の身体への自立や管理を確保する上で重要な意味を持ってきた。こうした状況は 2022 年のドブス対ジャクソン女性健康団体判決により中絶の禁止・規制が可能になったことで、大きく変化しつつある。イケモト氏は、ドブス判決は保守派判事が最高裁の過半数を占める政治情勢を反映したものであり、保守派の特徴としてキリスト教、新自由主義、連邦主義への支持があること、また判決によって現在アメリカは中絶をめぐる「内戦」状態になっていると指摘した。同判決により、中絶禁止州における希望しない妊娠継続の強制、妊娠全般の医療ケアの縮小、妊娠・中絶犯罪化の拡大が懸念されている。また、将来的には避妊方法や同性婚などプライバシー権利に係る他の判決にも影響をもたらす可能性がある。こうした不安な状況への希望として、最後にイケモト氏は中絶擁護州におけるサービス提供拡充の動きや、インターセクショナリティの視座に立脚した性と生殖と再生産をめぐる人権の尊重を要求するリプロダクティブ・ジャスティス運動も広まっている状況を挙げ、中絶のみならず多様な社会正義の問題に連携して取り組むことが喫緊の課題であると指摘した。

2 人目のパネリストである岩本美砂子氏からは、日本のリプロダクティブ・ヘルス／ライツの状況とそれに対する宗教右派・政治右派の攻撃について包括的な説明が提供された。まず岩本氏は、日本におけるリプロダクティブ・ジャスティスの重要な課題として日本軍戦時性奴隷制の問題が未解決なことを挙げ、政府の謝罪・賠償が不十分であると同時に、右派が事実や歴史認識を歪曲してきた実態を指摘した。また過去には、優生保護法に基づき強制不妊手術が行われてきた事実があり、法による障害者やトランスジェンダーの人々へのリプロダクティブ・ライツの侵害は現在も課題となっている。さらに、日本の妊娠・出産・避妊・中絶は医療保険によってカバーされず、医師会が中絶に関し絶大な影響力を持つとともに、使用できる避妊方法も限定されている状況がある。こうした状況において性教育の推進は重要だが、日本の性教育は世界的に遅れており、その背景に宗教右派・政治右派によって攻撃を受けて

きた経緯がある。性教育へのバッシングは 2000 年代に顕著であり、右派による性教育攻撃は結果として日本の性教育の委縮に繋がった。性教育批判の中核には女性の性的自己決定権への敵対視があり、地方政治と結びつきながら優生保護法「改正」運動、選択的夫婦別姓批判、LGBTQ 権利否定などの反リプロダクティブ工作が続けられている。特に個人より家族を優先する「家庭教育支援条例」は国政レベルでの憲法改正の布石になる恐れがあるため、幅広い連携によって阻止する必要がある。最後に日本におけるリプロダクティブ・ライツ及びジャスティスの推進に向けて、中絶要件や費用の緩和、避妊方法の拡大とともに、歴史的課題として日本軍性奴隷制と優性保護法が犯した不正義を政府に賠償するよう要求することが不可欠であるとして報告は締めくくられた。

第一部のパネリスト報告を踏まえ、第二部では 4 人の専門家から以下のコメントが寄せられた。まず、高谷幸氏からは両報告ともに国家レベルの宗教右派の政治的影響を懸念していたことを踏まえ、国家レベルの政治とリプロダクティブ・ジャスティスを考える際に「ネイション（国民）の再生産」も関与するのではないかと問題提起がなされた。そして、日本の代表的な移民女性である国際結婚女性と技能実習生の身体管理・自己決定が侵害されている状況について説明がなされた後、ネイションの再生産は経済的グローバル化の中でどのように変化しているのかという質問が報告者になされた。

次に、飯野由里子氏からはまず、リプロダクティブ・ジャスティスはリプロダクティブ・ヘルス／ライツに代わる「新しい言葉」ではなく、3 つは切り離しがたく結びついている点が強調された。そして実質的なリプロダクティブ・ヘルス／ライツの獲得のためには、リプロダクティブ・ジャスティスを踏まえた社会変革が重要であり、日本では入国管理制度や移民労働者の権利運動にも取り組むべきことが指摘された。さらに近年は保守主義と女性運動の接近も見られており、リプロダクティブ・ヘルス／ライツは障害者の自由や権利の問題でもあるとして、その射程を広げていく必要性が提起された。

3 人目の大橋由香子氏からは、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの定義が日本では分かりにくいものに留まっていること、また中絶を犯罪と見なす発想が日本社会に根強く、女性が罰せられる状況に繋がっていることが課題として指摘された。さらにリプロダクティブ・ヘルス／ライツと併せてジャスティスも日本では定着していないことが問題提起され、その理由として日本でジャスティスというと国家が押し付ける家父長的なイメージがあること、またマジョリティ女性の状況すら悪いことが挙げられた。今後は全体の底上げと格差の縮小に向け、排除の論理に陥らず幅広い運動がリプロダクティブ・ジャスティスを徹底させ、その実現に向けて連携が必要であると述べられた。

4 人目の宝月理恵氏からは、日本の近代以降の人口管理に係る政策は一方で人口の再生産を促進すると同時に、他方で不良な子孫や生産力のない国民を排除する二面性を有しており、これらの人口政策はバイオ・ポリティクスの表れと認識しうるという指摘がなされた。そして、プロライフかプロチョイスかという二項対立は、中絶を個人の意識と強固に結びつけて内面的な動機を形成するバイオ・ポリティクスの側面から捉えなおす必要性があるのではないか、また今後どのような教育・啓発を行うべきか、という問題提起がなされた。

質疑応答ではイケモト氏に対し、ドブス判決以前からアメリカの中絶をめぐる状況は悪化していたが、それでも同判決が重要であるのはなぜか、アジア系アメリカ女性の連携における課題や可能性、アメリカにおける配偶者要件について質問がなされた。またイケモト氏から日本における医師の役割について質問があった。日本とアメリカの対比の中で、リプロダクティブ・ジャスティスを考える様々な切り口が提供され、連携して取り組む必要性が再認識されシンポジウムは閉幕となった。

記録担当：高橋麻美（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

▶ 2022 年度 主催 IGS セミナー詳細

IGS セミナー

The Marcos Return

What Does it Mean for the Philippines?



【日時】2022 年 6 月 20 日（月）15:00〜16:00
【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）
【講演】
Jean Encinas-Franco（フィリピン大学教授）
【ディスカッサント】
Jan Robert Go（フィリピン大学准教授）
【モデレーター】
Ki-young Shin（IGS 教授）
Ella Syafputri Prihatini（ビナ・ヌサンタラ大学講師）
【主催】ジェンダー研究所
【言語】英語
【参加者数】16 名

【趣旨】
The Philippine presidential election drew the attention of many. The elected is the son of Marcos, the dictator who was overthrown by people’s power during the democratization in the 1980s, and the vice president is the daughter of an authoritarian president. Why did the Philippines choose them as national leaders? Prof. Jean Encinas-Franco talks about this puzzle and what the result of the presidential election means for the Philippines.
She reviews the current status of political economy in the Philippines and focuses on the generation gaps in perspectives on the past political history. Prof. Encinas-Franco emphasizes a new role of SNS in the political campaign of these newly elected leaders.



IGS セミナー（学内限定）

フェミニズム出版と運動
共感と啓蒙をどう繋げるのか



【日時】2022 年 7 月 28 日（木）15:30〜17:00

【会場】人間文化研究科棟 408 室（対面）

【ゲスト】

山田亜紀子（雑誌『シモーヌ』編集者）

【司会】

小嶋里菜（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

花岡奈央（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

【主催】ジェンダー研究所、「フェミニズム理論の争点」ゼミ

【言語】日本語

【参加者数】21 名

【開催報告】

2022 年 7 月 28 日（木）、IGS セミナー「フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか」が、所属教授申琪榮氏の担当する「フェミニズム理論の争点ゼミ」との共同で開催された。ゼミ受講者小嶋里菜氏、花岡奈央氏の司会により、雑誌『シモーヌ』編集者山田亜紀子氏の報告と事前アンケートをもとにしたトークセッションが行われた。

はじめに企画者である申氏から開催の経緯が説明された。申氏は IGS の刊行する学術雑誌『ジェンダー研究』の編集長としての経験などから、学術的な論文では広くリーチできるものが書きづらいと感じていた。そんな中「雑誌感覚で読めるフェミニズム入門ブック」として刊行されたことで注目していた『シモーヌ』への寄稿依頼を山田氏から受けた。そこで、フェミニズムの書き物を制作する思いや困難などについて知るべく山田氏に依頼をし、本セミナーが実現した。

続いて山田氏より、まず『シモーヌ』の概要が報告された。『シモーヌ』は 2019 年 11 月現代書館より創刊され、創刊号特集はシモーヌ・ド・ボーヴォワールであった。『シモーヌ』というタイトルは、運動と連帯していた時期があった 3 人のシモーヌ、ボーヴォワール（哲学者）、ヴェイユ（Weil、哲学者）、ヴェイユ（Veil、政治家）からとった。男女二元制から脱却し、多様な性を包括するフェミニズム媒体を目指し、ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」からもう一歩踏み出してジェンダーを考えていこうという気持ちではじめた。フランス寄りの雑誌を企画した理由として、自身がフェミニズムに触れるきっかけになったのは映画監督アニエス・ヴァルダであり、ヴァルダとの繋がりからボーヴォワールを知ったこと、日仏女性研究学会に所属などしていること、また韓国や欧米のフェミニズムはすでに多く翻訳されていたことをあげた。第 4 号までは人物特集を行なっていたが、時事問

題を取り扱うには限界があるように感じテーマ特集を試みたところ好評を博した。テーマ特集の方が入りやすいのではないかと考え、当面はテーマ特集にシフトする。

次に『シモーヌ』をつくりたかった背景として山田氏は、ボーヴォワール『第二の性』（1949）刊行から 70 年を迎えること、そして SNS 台頭による第 4 波フェミニズムの盛り上がりをあげた。特に Twitter は多様な声を可視化する重要なツールであり、自身も運動には使用している。しかし Twitter での議論には限界を感じており、自身が音楽や映画からフェミニズムに入りその後に本を読むことで深まった経験から、SNS でフェミニズムに興味を持った人に活字に触れてほしいと考える。だが大学に通っていない人にとって学術書などはどの本から手に取って良いかわからないため、理論書、古典、名著に触れるきっかけとなるような媒体を目指したいと考えた。さらに書店員として女性向けのフロアにてフェミニズム、ジェンダーの選書も行なっていた経験を『シモーヌ』の制作で活かすことができるとも考えた。書店員をしていた当時、フェミニズム関連の本でもタイトルにはフェミニズムと入れないほどにフェミニズム関連の本は売れなかった。さらに学術書、理論書は刷り部数も少ないため高額となり、扱う書店も限られていた。しかし近年、マララ・ユサフザイ氏のノーベル平和賞受賞や、SNS の台頭、海外のフェミニズムの盛り上がりにより、エッセイ、翻訳などのフェミニズム関連書の出版が増えた。また書店員の志が売り場に反映されるような独立型のセレクト書店でフェミニズムの棚が増え、多様なフェミニズムが歓迎される土壌ができたことが『シモーヌ』制作の意欲へと繋がった。創刊にあたっては雑誌が今時売れるのかという懸念が社内にあったが、文芸雑誌や翻訳における近年のフェミニズムの盛り上がりをアピールした。企画が通ったのは、比較的小さな出版社ゆえ編集者が自由にできるところがあったためではないかと考える。

報告の最後に山田氏は『シモーヌ』が目指していることを語った。山田氏は共感と啓蒙について次のことに着目する。山田氏によれば、1975 年に田中美津氏や米津知子氏らが参加していたミューズカル“おんなの解放”におけるスローガン「啓蒙より共感、怒りより笑い」にはリブ／運動の人たちが共感を大事にしていることが現れている。また天皇制反対の立場を明らかにし風刺も行うなど、今のフェミニズムとの志の違いが見られる。そして 1980 年代後半から 90 年代前後、運動側と研究側の関心にずれが出てきた。研究者中心で男女共同参画が進められるなど、市民啓蒙が重視され、女性学・ジェンダー学者の情報が力を持つようになった。山田氏はフェミニズムの広がりには共感（多様な生と性の可視化）が、またフェミニズムの差別への加担の気づきなど深めるには啓蒙（多様性を排除しないための知識）が共に必要であり、その両者を行き来する媒体を目指し『シモーヌ』を編集しているとした。

トークセッションでは、『シモーヌ』は学術書よりは手に取りやすいものの入門としてはハードルが高く感じられるなどの意見が寄せられた。山田氏によれば、共感と啓蒙両方の文章が入っていることで、難しく感じた部分も後に思い出してもらえることに意義がある。さらに同時に全ての人にわかってもらおうとする必要はなく、時間差でも連帯が広がっていくことが大事である。また昨今のトランス女性排除言説などにはフェミニズム媒体として抗議し続けていきたいし、何かしらのアクションが必要だと考えている。山田氏は、アカデミアにいる人には色々な情報にアクセスできる特権が、編集者には本をつくり頒布できる特権が、あるとする。そして例えば社会的弱者とされている人が声を上げると誹謗中傷に遭い孤立しやすい状況が続いているため、安全な環境で対話ができるイベントなどを開催する重要性を指摘した。他に今後の『シモーヌ』やフェミニズム運動の展開について様々な意見が交わされ、セミナーは終了した。

記録担当：伊奈留偉（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）

IGS セミナー

19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論

ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』(1851) を例に



【日時】2022 年 7 月 29 日（金）18:00〜19:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【講演】

マーシー・ディニウス（デポール大学准教授／フルブライト招聘教員）

【司会】戸谷陽子（IGS 所長）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】52 名

【趣旨】

アフリカ系アメリカ人の女性活動家ソジャーナ・トゥルースが 1851 年オハイオ州の女性会議で行った講演「わたしは女ではないのか？」は、非識字者による、録音技術無しの講演だったことから、臨席者それぞれの「記録」により複数のテクストを生み出すこととなった。現存する主な二つのテクストから、複数のアイデンティティとメディアを多次元的に「利用」し目的を推進したトゥルースの人物像を、インターセクショナル理論と、インターメディア理論を通じて検証する。

【開催報告】

2022 年 7 月 29 日、IGS セミナー「19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論―ソジャーナ・トゥルース女性会議講演「わたしは女ではないのか？」(1851)を例に」がオンライン開催され、マーシー・ディニウス Marcy Dinius 氏（デポール大学准教授／フルブライト招聘教員）が、アフリカ系アメリカ人女性活動家のソジャーナ・トゥルース Sojourner Truth (1797？-1883)が 1851 年のオハイオ州女性会議で行った演説「わたしは女ではないのか？」(“Ain’t I A Woman?”)を取り上げ、初期の白人主導フェミニズム批判として検証され、最近では詩の形態に翻訳・修正されて合衆国国内で広く読まれているこの演説を、インターセクショナリティ理論とインターメディア理論を通じ、複数のアイデンティティとメディアが交差する重要な例として考察した。

ディニウス氏はまず、インターセクショナリティの定義を、研究者／活動家のクレンショーKimberlé W. Crenshaw（1959〜）が提唱した、「政策と背景構造が交差する中で、複合的なアイデンティティが形成され、一連の困難と好機を生み出す状況のすべて」と紹介し、この観点から以下の議論を進めた。

女性、アフリカ系アメリカ人、活動家、作家など複数のアイデンティティを持ち、非識字者であったトゥルースの演説を復元する方法はなく、臨席した記者の「記録」や観客の記憶から成るテクストは、その後再形成されやすいものとなった。特に重要な文字テクストとして、二つのテクスト（ロビンソン Marius Robinson 編集稿・新聞 *Anti-Slavery Bugle*1851 年掲載、ゲージ Frances Dana Gage 編集稿・1862 年 *New York Independent* 紙および *National Anti-Slavery* 紙の両方に掲載）が挙げられる。

この二つのテクストには大きな違いが見られる。 “Ain‘t I A Woman?”の題で広く知られることとなった 1862 年ゲージ版は、当時の多くのアフリカ系アメリカ人が話すアフリカと米国南部のアクセントが混ざった方言で表記されている。トゥルースは、ニューヨーク州で当地入植者が使用したオランダ語を第一言語とする奴隷として、オランダ語のアクセントが強い英語を話したとの証言があり、ゲージ版編集に際し、政治的な意図が働いた事実を示すものである。一方、ロビンソン版は、トゥルースを元奴隷と紹介しているが、黒人であることを強調する表現はなく、有名な「Ain‘t I A Woman?」のリフレインも存在しない。

米文学の正典を納めた *The Norton Anthology of American Literature* の最新版は、非識字者人物としてトゥルースを紹介し、ロビンソンのテクストを掲載している。ロビンソンを著者の一人と言及することも、トゥルース自身はゲージ版を好んだという事実の言及もない。

1875 年に出版された *Narrative of Sojourner Truth, A Bondswoman of Olden Time*（トゥルース自伝の最終版）には、本人の意志によりゲージ版が収録されている。オーガスタ・ローバック Augusta Rohrbach は、これはトゥルースが「検証可能なアイデンティティとしてではなく、記憶の構築としての作家性を強調した」結果であり、彼女が「あらゆる素材を自由に利用し、それを証言として位置づけ」、「記憶の構築」を個人の行為ではなく「共同体の」営為として理解していたためとしている。

他者との協働で制作した本や画像を自作として販売することで、トゥルース自身もアイデンティティを更新しつつ生活と政治活動の信条両方を支えていたといえる。*The Norton Anthology* はトゥルースの演説を採用することで正典の対象を拡大したが、トゥルースが印刷物よりもオラリティを、単独著者よりも共同作業を戦略的に選んだという重要な事実を問題化することはなく、アフリカ系アメリカ人文学の歴史において、コラボレーション、コピー、その他の非オリジナル、非印刷の作家性がいかに重要な意味をもつかを示す機会を逸している。

最後にディニウス氏は、ウェブサイト https://www.crmvet.org/poetry/ftruth.htm 上で読者が複数の著者による演説テクストを比較検証できるように掲載したステッソン Erlene Stetson の試みに言及し、ステッソンによる加筆を含め、それを可能にする開かれたトゥルース演説テクストの柔軟性を評価した上で、現在このような形で論議されるトゥルース演説は、彼女が現代の有能なメディア論客と同様、技術的にも理論的にも複雑な思想家であり、アイデンティティ、メディア、権力がどのように交差し相互作用するかをしたたかに利用し、自身の目的を推進していたことを裏付けるものであると結論した。講演終了後、ディニウス氏へ多くの質問や感想がよせられ、リモート講演にもかかわらず、会場は講演参加者全体による、さらなる講演内容やテーマの深化と広がりを共有する活気ある場となった。

記録担当：書川美香（お茶の水女子大学大学院博士前期課程比較社会文化学専攻）

IGS セミナー（学内限定）

日本（と世界）における性的マイノリティの政治



【日時】2022 年 11 月 9 日（火）18:30〜20:00
【会場】ハイブリッド開催（人間文化創成科学研究科棟 408 室、Zoom ウェビナー）
【講師】
青山薫（神戸大学教授）
「Sexual Minority Politics in Japan (in the World)」
【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）
【主催】ジェンダー研究所
【言語】英語
【参加者数】18 名

【開催報告】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所（IGS）は、2022 年 11 月 9 日に IGS セミナー「日本（と世界）における性的マイノリティの政治」をハイブリッドで開催した。神戸大学教授の青山薫氏を報告者として招聘し、司会は IGS 特任講師の嶽本新奈が務めた。このセミナーは、IGS とタイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology: AIT）により毎年実施されている国際研究交流プログラム「AIT ワークショップ」（本報告書 62 頁）の一環として行われたもので、AIT から来日中であった交換留学生 2 名も参加した。

青山氏は、「性をめぐる問題は政治的である：フェミニストの遺産」、「国民国家：個人的なものに呼応する市民権と人権」、「市場とピンクウォッシング：親密さの商業化と性的なものの脱政治化」、「行為者としてのセクシュアル・マイノリティ：変化を為す者」、「研究・考察に求められる繊細な感性」という 5 つのトピックを通して、講演テーマであるセクシュアル・マイノリティのポリティクスについて次のような報告を行った。

1：性をめぐる問題は政治的である：フェミニストの遺産

青山氏はまず、17 世紀にキリスト教が罪人と定義した「同性愛者」の誕生について解説した。19 世紀、同性愛は犯罪化され、病理化された。20 世紀まで、産業社会の中核をなす中産階級の間では、同性愛は「間違い」であり、異性愛は「正しい」という考え方が一般的であった。資本主義社会においては、中産階級家庭の生殖機能は欠くことができない主要な構成要素であることから、ゲイ、レズビアン、トランスジェンダーの人たちへの偏見の一因となったと考えられる。生殖だけでなく、ケアも含めた家族の本当の機能についても詳しく説明された。この 2 つの役割は、女性（妻や母）が愛の労働として無報酬で行っていたのである。これらのことから第二波フェミニストの多くは、セクシュアリティを含む個人の選択はまさに人権であり、政治的な問題であると提起してきた。

2：国民国家：個人的なものに呼応する市民権と人権

次に青山氏は、LGBTQ の市民権や人権にかかわる「同性婚」に焦点をあてた。一部の国では同性婚は合法化されているが、日本では同性カップルのパートナーシップ証明書はあっても、同性婚は法律で禁じられている。同性婚を合法化すべきかどうか、同性婚の合法性を否定することが違憲であるかどうか、議論が続いている。“21 世紀の国家は、LGBTQ の権利を人権として捉えているのだろうか？”、青山氏はこう問いかけた。

3：市場とピンクウォッシング：親密さの商業化と性的なものの脱政治化

日本を含め、多くの国で LGBT がブームになっている。第 3 パートで、青山氏はこの現象を支持と懸念の 2 つの側面から捉えた。"LGBT "の権利は守られるべきだが、ピンク・ウォッシングや LGBT トピックの過剰な商業化も憂慮されるべきである。親密さの商業化は現在、世界中で起こっており、LGBT のトピックは簡単に大きな収益を上げることができる。しかし、多くの実質的な人権（ジェンダー不平等、貧困問題、レイシズムなど）を尊重する視点と問題意識が抜け落ちているのが現状である。

4：行為者としてのセクシュアル・マイノリティ：変化を為す者

第 4 パートで青山氏は、LGBT 当事者たちが社会の変革者として活動する際に、"LGBT "ブランドを活用することのメリットとデメリットを列挙した。メリットは、"生き残る"、"権利の前進"、"人生のチャンスを増やす"、"対等な市民や人間になる" などに集約される。デメリットは、"新自由主義の強化"、"マイノリティの忘却"、"権力の乱用"、"他者の搾取"であった。

5：研究・考察に求められる繊細な感性

最後に青山氏は、セクシャル・マイノリティの政治について研究・考察する際には、繊細な感性を働かせてほしいと提起した。例えば近年、（LGBT の中で）"G "（のみ）を主流化していく傾向に対して、他のマイノリティはどのように対応するべきか。私たちは、政治的、経済的、人口動態的、文化的、地理的、民族的、言語的、地域的、宗教的に異なる環境で何が起きているのかを注意深く繊細に考察すべきであると結ばれた。

講演の後は活発な質疑応答が交わされた。多くの参加者から質問が寄せられ、青山氏は回答を通じて今回のセミナーの内容をさらに深めた。

記録担当：江天瑶 Tianyao JIANG（お茶の水女子大学大学院博士課程）（訳：嶽本新奈）



IGS セミナー

クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか

中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）



【日時】2022 年 12 月 9 日（金）15:00〜16:30

【会場】国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室

【報告】

ルセッタ・カム（香港浸會大学文学院准教授／2022 年度 IGS 研究協力員）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】25 名

【開催報告】

2022 年 12 月 9 日、お茶の水女子大学内国際交流留学生プラザ 3 階 セミナー室にて、IGS セミナー「クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）」が開催された。香港浸會大学文学院准教授であるルセッタ・カム Lucetta Kam 氏がスピーカーとして参加した。

冒頭においてカム氏は、2005 年から 2011 年にかけて行っていた上海の拉拉（クィア女性を意味する）たちのエスノグラフィー研究の延長として、中国に出自を持つクィア女性の国境を越えたモビリティに関するプロジェクトに取り組んでいるということを説明した。このプロジェクトを通じ、カム氏は中国から他国に移動するクィア女性たちの人生、クィアとしての自我、願望をとらえるとともに、現時点で中国にいる新たな世代のクィア女性たちの国境を越えた移動の可能性を議論し、その出現のありかたをめぐって新たな知見を広げようとしているという。

カム氏は本調査の協力者を、「クィア」のアンブレラ・タームの下でとらえた。調査協力者のセクシュアリティは、レズビアン、バイセクシュアル、フルイド、パンセクシュアルなどが含まれた。またジェンダー・アイデンティティについては、女性、H（中国語文化圏において男性でも女性でもないジェンダー・アイデンティティを指す）、P（中国語文化圏におけるフェミニンなレズビアン女性）、T（中国語文化圏におけるマスキュリンなレズビアン女性）、クィアなどが含まれた。この把握の下でカム氏は「クィア・モビリティ」を、中国に出自を持つクィアな中国人女性が一時的または永続的に国境または大陸を越境し、他国・他地域に滞在することを指す概念として論じていった。

カム氏は調査において、ジェンダーとセクシュアリティ、そして地理的なモビリティをめぐるインターセクショナリティに着目し、「どのようにして移動可能性は解放的あるいは規制的な力学として働くのか、どのようにセクシュアリティは移動可能性に影響を及ぼすのか、クィアな人々の移動可能性に彼人らのジェンダーはどのように作用するのか」といったリサーチクエスチョンを立ててきた。中国では 2015 年から 2018 年にかけて調査を行い、2022 年からは香港でも同様の課題に取り組んでいる。香港

のケースについては継続的に調査を行っている途上であるという。

近年、同性間のパートナーシップや同性婚にもとづいて移民を受け入れる国が出てきたり、クィア・カルチャーのグローバルな広がりが進んだりしていることで、クィアな人々は越境によってより良い生活を獲得できる可能性を具体的にイメージしたり、実際に渡航を計画したりできるようになった。国境を越えた移動・移住の可能性は、母国かつ受け入れ国での人種、セクシュアリティ、階級、ジェンダーとポスト植民地主義、（クィア）グローバリゼーションなどをめぐる在り様によって形作られている。

クィア女性たちの海外への移動の実践は、ポスト社会主義中国におけるコスモポリタン的自己の追求という文脈において、あるいは社会的に望ましい行動規範という文脈において理解されてきた。これをふまえつつ、カム氏は、国境を越えた移動可能性は、コスモポリタンとして、またポスト社会主義国としての中国において、新たなホモノーマティヴィティ、すなわち善良なクィアである（になる）べきだという価値観の生産に寄与していると指摘した。

中国から国外に出ることを、中国語で「出國（チューグオ）」（chuguo）という。カム氏によれば、「出國（チューグオ）」には「明るい未来の追求」のような意味合いがある。若い都会のエリート層または中間層にとって「出國（チューグオ）」は望ましい生き方であり、階級と文化資本を上昇させるライフコースととらえられている。クィア女性たちにとって、一般的な「出國（チューグオ）」は人生におけるステップアップであるとともに、セクシュアリティやジェンダーをめぐる違和を感じることなく生活することを可能にする。それゆえに彼人（かのひと）らは「出國（チューグオ）」を一つの手段として選択するようになる。移動可能性は、彼人（かのひと）らのセクシュアリティとジェンダーにとって居心地の良さを獲得するための交渉において必要なのである。

トランスナショナルに移動するクィア女性たちは、セクシュアリティとジェンダーにおける自律性と社会的尊厳を手に入れようとする。新自由主義社会において国際的な教育、観光、グローバルな就労の機会が広がるというとき、クィアたちは自律性と尊厳を得るためのルートを新たに手にしている。

カム氏は 2013 年の論稿において、人びとがゲイやレズビアンである以前に「普通」である必要があるという認識の政治性をとらえ、 “Politics of public correctness” 「公共的正しさの政治」という概念を提起した（Kam 2013）。「公共的に正しい」人間であるということは、法的に立場を認められた市民となること、そして社会経済上「生産的」であり、従順な娘であり、「健康」で「明るい」という、ホモノーマティブな幻想に適合するホモセクシュアル的なモデルに近づくことを意味する。都市エリート層の若者たちが国境を越えたモビリティ、あるいは「出國（チューグオ）」を実現していくというとき、クィアな主体はそのような公共的正義の政治に組み込まれている。この意味において、トランスナショナルなモビリティは中国におけるホモノーマティヴィティの新たなモデルとなっているのである。

カム氏は最後に、実際に行った調査事例の内容をいくつか紹介した。調査協力者たちの年代やパートナーシップの状況、居住地域、就労状況などはさまざまで、データに富み、これまでカム氏が紹介した概念を補強するとともに、参加者にとっては非常に理解がしやすくなっただろう。

カム氏の発表の終了後には質疑応答が行われた。質疑応答では複数人から質問があり、盛り上がりを見せた。また現在まさしく進行中であるという香港における調査についてもカム氏から話していただくことができた。

本セミナーでは会場がほぼ満員となるほど、注目を集め、非常に充実した時間となった。

文献：Kam, Lucetta Yip Lo., 2013, Shanghai Lalas: Female Tongzhi Communities and Politics in Urban China (Queer Asia): Hong Kong University Press.

記録担当：駒村日向子（お茶の水女子大学博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

IGS セミナー

「棄民」を記録する
今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973)再考



【日時】2023 年 2 月 17 日（金）14：00〜16：00

【会場】ハイブリッド開催（国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室、Zoom ウェビナー）

【報告】
片岡佑介（一橋大学ほか非常勤講師／立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託員）
嶽本新奈（IGS 特任講師）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】63 名

【趣旨】

映画監督・今村昌平は、1971 年より一連のテレビ・ドキュメンタリーの制作に着手する。「棄民シリーズ」と題されたこの中編群で、未帰還兵の取材のために訪れた東南アジア各地にて、今村は元「からゆきさん」の日本人老女たちに出会う。そうして完成したのがドキュメンタリー『からゆきさん』(1973)である。この映像作品は、実際の元「からゆきさん」の女性たちを映像に記録している一方で、今村の劇映画の延長線上にあり、今村作品のジェンダー表象を再考するにあたっても重要な位置を占める。本セミナーでは、「正史」から捨象されてきた元「からゆきさん」の経験や記憶が今村による『からゆきさん』でどのように「記録」されているのかを、映画学と歴史研究双方の側面から読み解く。

【開催報告】

本セミナーは、映画監督・今村昌平によるドキュメンタリー映画『からゆきさん』（1973 年）を題材に、「からゆきさん」と呼ばれた明治・大正期に身一つで海外へ「出稼ぎ」に向かった日本女性たちの表象とその意味を、歴史研究と映画学から考察したものである。ドキュメンタリー映画『からゆきさん』冒頭 15 分程度を視聴した後、映画学・表象文化学から原爆映画の研究を専門とする片岡佑介氏と、ジェンダー史学から「からゆきさん」研究を専門とする嶽本新奈氏が講師として登壇し、ドキュメンタリー映画『からゆきさん』を紐解く考察や論点が報告された。

歴史学の視点から嶽本新奈氏は、「キクヨさん」の波乱に満ちた生涯を概観したうえで、「棄民」というキーワードに注目する。今村にとっての「棄民」とは日本の近代化から置き去りにされた人々であり、『からゆきさん』は女性たちの「怨嗟」の声を記録することを目的としたわけだが、実際、今村は自身が期待する「怨嗟」を女性たちから引き出すことに失敗している。その背景として、嶽本氏は、森崎和江

による「流民」という概念と比較し、今村は元「からゆきさん」の生そのものには関心を寄せていなかった点を指摘する。今村による「棄民」は国民国家的思想に基づいており、今村が期待する「怨嗟」は国家、資本、権力といったマクロな構造から「捨てられた」という認識を持たなければ発せられることはないものである。一方、元「からゆきさん」が語る「怨嗟」は、親や楼主、買春者などのミクロな人間関係に対して向けられており、今村の問題関心の範囲ではくみ取ることができない。嶽本氏はミクロレベルの女性たちの語りにマクロな構造が連関している点や、作り手である今村自身も家父長制的構造等、マクロな構造から自由であるわけではない点を指摘した。

次に、片岡佑介氏は映画学の視点から『からゆきさん』の映画としての側面に注目する。下層社会の人々に焦点を当ててきた今村作品にはふたつの特徴がある。一点目は、女性の性を通じて日本の近代・前近代を批判的に把握する点、二つ目はドキュメンタリーという方法論である。片岡氏によると、前者については、『からゆきさん』でも従来と同様の枠組みのもと、日本の海外膨張政策との関係の中で元「からゆきさん」の生涯が語られており、後者については、1960 年代から既存の映画を刷新する方法とされた「ドキュメンタリー」という手法を『からゆきさん』でも採用し、記録として残されてきた「社会的出来事」と、記録されることのなかった「女性の性的体験」という対比の中で映像が編集されたという。加えて、片岡氏は、今村が女性たちの性にのみ焦点を当てることで、被占領国の男性作家に特有の言説に陥っていると指摘する。『からゆきさん』では「キクヨさん」の生涯が図式的に編集され、映像の終盤になるにつれ、「キクヨさん」は「語る存在」から、元雇用主や地元の人間、そして今村によって「語られる存在」へと追いやられている。しかし、片岡氏は、無言で口ごもる「キクヨさん」の声こそがもつ記録としての可能性についても提示した。

報告後の質疑応答では、今村を含む戦後の前衛的な男性作家のポジショナリティの無自覚さや、作品における植民地の歴史やエスニシティの視点の欠落、カメラマンなど撮影者の視点の重要性など多岐にわたる議論が交わされた。

記録担当：大野聖良（日本学術振興会特別研究員（RPD）・神戸大学）



IGS セミナー
家電と暮らしのポリティクス



【日時】2023 年 3 月 13 日（月）15:00〜17:00

【会場】ハイブリッド開催（国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール B・C、Zoom ウェビナー）

【報告】

村瀬敬子（佛教大学社会学部教授）

「家庭電化と家事労働のポリティクス：高度成長期における宣伝・広告を中心に」

岩島史（京都大学大学院経済学研究科講師）

「戦後農村における家電の普及とジェンダー：高度経済成長期を中心に」

【ディスカッサント】大橋史恵（IGS 准教授）

【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】99 名

【趣旨】

私たちの日常においてどのような家電製品がどう普及するかという問題は「パーソナル」そして「ドメスティック」であると同時に非常に「ポリティカル」である。1983 年にルース・シュウォーツ・コーワンがその著書『お母さんは忙しくなるばかり』（法政大学出版局）において論じたように、19 世紀から今日に至るまで、電化製品の技術開発から商品流通までの過程は、国家による基礎的なインフラストラクチャ―の整備や産業政策の推進の歴史と強く結びついてきた。コーワンの研究はそのようなテクノロジー・システムの下で、家電の技術革新によって家内労働が多様化・複雑化したこと、「清潔さ」や「健康」をめぐる責任がジェンダー化されていったことを描き出した。

本セミナーでは、日本の政治経済秩序の変化の下での「ドメスティックな」労働関係の変容について、家電を基軸に、ジェンダーの視点から読み解いていく。日本社会では高度経済成長期に非農林業における雇用が急拡大し、その反面で女性の就業が減少し「主婦」が拡大していったことが知られる。こうした変化において家電がどのように普及したのかを、農村部と都市部の差異やその意味にも目を向けながら、あらためて議論していく。

コーワンの研究から 40 年経った今日でも、テクノロジーが暮らしを楽にするという言説は広く流布し、消費者の欲望を喚起し続けている。家電と暮らしの政治経済史を批判的にふりかえることで、私たちがどのような局面を生きてきたのかを確認することを目指したい。

【開催報告】

2023 年 3 月 13 日、IGS セミナー「家電と暮らしのポリティクス」が開催された。お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任講師の嶽本新奈氏による司会の下、佛教大学社会学部教授の村瀬敬子氏、京都大学大学院経済学研究科講師の岩島史氏が登壇し、お茶の水女子大学ジェンダー研究所准教授の大橋史恵氏がディスカッサントを務めた。

第一報告（村瀬）「家庭電化と家事労働のポリティクス：高度成長期における宣伝・広告を中心に」では、家庭電気器具が急速に普及した高度経済成長期の前半である、1955~1965 年を中心に、家庭電化と家事労働がどのように語られ、表象されてきたのかが論じられた。村瀬氏は〈家庭電化による女性解放、民主化〉という言説は、どのような論理により成立したのか、また家庭電化が家内において誰の意思決定によってなされたのかを、当時の宣伝活動・広告表現から検討した。

「家庭電化」という言葉は 1920~1930 年代にマスメディアに多く登場しており、戦前の「家庭電化」においても、主婦が電気器具を用いて主体的に家事をする様相が描かれてきた。戦前においても家庭電化の普及を目的とした博覧会等が複数回開催されたが、その背景には、昼間の電気需要開拓の必要性があった。博覧会の展示において、家庭電化を行った家庭は、「衛生的」で「能率的・合理的・科学的」な家事がなされ、主婦が修養し新知識を学べるため「文化的」であると表象された。

戦後の〈家庭電化による女性解放、民主化〉言説は、国の根幹にかかわるエネルギー政策に結びついて展開した。1949 年に設立された家庭電気文化会は、電力会社や家電メーカーからに加えて、女子大教授、農林省の行政官なども理事に加わり、いわば国を挙げて家庭電気器具の奨励をした。ここでは「婦人の民主化は家庭の電化から」と位置づける一方で、家庭電化の導入によりできた時間をどう使うべきかについて「主婦」に対する強い規範がみられた。また家庭電化の広告の分析では、洗濯機や炊飯器といった家電製品が夫や戸主から妻や嫁に「与えられるもの」として表象されていることが指摘された。

第二報告（岩島）「戦後農村における家電の普及とジェンダー：高度経済成長期を中心に」では、家電普及の社会的プロセスについて、広告は誰のどのような欲望を喚起したのか、また洗濯という労働過程の全体において、家電の導入は農家世帯の労働（関係）の何をどのように変化させたのか、という点が着目された。日本の農村では都市部と違い、1960 年代に農業（稲作）の機械化と並行して急速に家電が普及した。農村に最も普及していた雑誌である『家の光』は、戦中・戦後の紙不足もあり、従来広告に否定的な評価をしていたものの、1950 年代後半以降は協同組合の雑誌として家電の広告も掲載するようになった。洗濯機の広告に関しては「アメリカ式生活の担い手」的側面を強調するよりも、機能面が強調され、著名な大手電気企業だけでなく、農業機械の製作所が動力脱穀機や精穀機と同時に、電気洗濯機の広告を全国の農機具店で扱っているという文句で掲載していた。

第二次大戦後の農村民主化において政策的に推進された生活改善普及事業のなかでは、洗濯の頻度や量・時間等が調査され、洗濯が「しごと」として認められるようになると、共同洗濯機の導入が進んだ。同事業においては洗濯は洗濯機により省力化するが、その分炊事や掃除により手をかけたいという方向性があり、浮いた時間をそれらや会合などに回した場合には「忙しくなる」可能性はある。岩島氏は、洗濯の労働過程のみでなく、女性の労働全体を見る必要があると指摘した。この時期の日本農村では、洗濯機の共同利用だけでなく、洗濯という家事そのものが共同化された例もある。つまり近代的な科学技術の導入は新たな労働の共同性を一時的にせよ創り出した可能性があるとした。

二つの報告を受け、ディスカッサントの大橋氏は、私たちの日常において、どのような家電製品がどう普及するかという問題は「パーソナル」であり「ドメスティック」であると同時に非常に「ポリティカル」であること、また「ドメスティック（国内の）」に見えることが、「グローバル」な政治経済秩序につながっている可能性もあるのではないかとコメントした。大橋氏は事例として、戦後香港における日本製家電の普及と家事労働者の雇用の関係に言及しながら、グローバルな政治経済秩序においてテクノロジーが女性の「ドメスティックな」役割を強化したという可能性を示唆した。

記録担当：駒村日向子（お茶の水女子大学博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

IGS セミナー

クィアする現代日本文学

ケア・動物・語りとジェンダー



【日時】2023 年 3 月 20 日（月）14:00〜15:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【報告】

武内佳代（日本大学教授）

【司会】

戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】116 名

【開催報告】

本セミナーでは、2023 年 1 月に刊行された『クィアする現代日本文学―ケア・動物・語り』（青弓社）の著者である武内佳代氏をお招きし、各章ごとの成り立ちや趣旨など概要を語っていただいた。同書では、クィア・フェミニズム批評を中心に、動物やケアなどをめぐる批評理論を横断的に用い、金井美恵子、村上春樹、田辺聖子、松浦理英子、多和田葉子という 5 人の現代作家の作品が論じられている。これらの作品について批評を試みる際、著者が強く意識したのは「当事者」的な立場をとらないこと、また、作家に関する情報や理論的な枠組みではなく、あくまでも「小説を読む」ことに力点を置くことであると武内氏は述べる。セミナーは、武内氏による報告ののち質疑応答の時間が設けられ、聴衆との意見交換がなされた。

武内氏はまず、同書を書くことになったきっかけとして、「お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」（2003 年〜2008 年の文部科学省採択事業）との関わりが大きいことをあげる。同プログラムのプロジェクト D（理論構築と文化表象）の研究員をつとめたことで、学内外の研究者の思想的枠組みから大きな刺激を受けることとなり、その際の関心が同書の土台となっていることが改めて確認された。

それぞれの章は、「クィア批評を多様なかたちで試みる」という問題意識と、「小説を読むことの意味を問う」という問題意識とに貫かれていると武内氏は強調する。第一章では、金井美恵子の「兎」に登場する無性の語り手「私」の様態を、思弁的なクィアネスとして読み込んでいる。この論考を構想中、三島由紀夫文学のレズビアン表象に関する論を執筆するなかで、レズビアン女性についての社会学的調査を考察することと、小説表現としてのレズビアンについて読みとくことの差異を認識することとなったという。女性研究者であっても、小説を読むときには女性であるという当事者性や、父権的で権威的

な「男性作家」というバイアスをいったんわきに置き、作品を丹念に読むことの必要性に思い至ったことがあかされた。

また、社会的に「見えない」ものとしてある非規範的なジェンダー・アイデンティティが書き込まれている小説に関心を向ける武内氏は、一人の読者として「クィアする」という介入を行うことで、そうしたアイデンティティやセクシュアリティをめぐる問題が可視化される批評的読解作業に心惹かれるという。第二章から第四章まで村上春樹の小説作品が扱われるなかで、フェミニズム批評の観点から批判的に読まれてきた『ノルウェイの森』を扱った第二章では、女性たちの同性愛セクシュアリティが前景化されることとなった。第三章では、「レキシントンの幽霊」の登場人物がゲイであることに着目しエイズ文学として読みなおすことで、不可解だった登場人物の孤独の意味に気付くこととなる。「七番目の男」をトラウマ論と男性性研究の観点から読み直した第四章では、明確な描写がないにもかかわらず、性暴力被害を受けた男性の姿が立ち上がってくることになった。

かつて F-GENS が実施したシンポジウムをきっかけに、障害学やケアの倫理について学び、改めてフェミニズム批評の観点から小説分析に取り組んだことは、第五章の田辺聖子の「ジョゼと虎と魚たち」の分析につながっている。さらに松浦理英子の『犬身』が論じられた第六章では、登場人物らに相互依存するケアの倫理の関係をみたうえで、犬と人間との相互依存をクィアな関係として解釈できるとする。第七章では、多和田葉子の『献灯使』における曾祖父と曾孫のジェンダー化されないケアの倫理に基づく関係性を指摘し、障害者的でクィアな曾孫らの身体は、再生産を前提とした異性愛主義的な資本主義の価値観のオルタナティヴを表象するものであるとした。

武内氏による報告に区切りがつけられたのち、司会の戸谷陽子 IGS 所長が、1980 年代から 90 年代、エイズ危機渦中のニューヨークでクィアを生きようと試みたアーティストらの状況に言及しつつコメントを述べた。本セミナーには、学生や日本文学研究者のみならず、広く学内外から、ジェンダー問題に関心のある 116 名以上もの聴衆が参加したことから、報告終了後には、小説と虚構性との関連、動物の観点からの扱いの他、読者同士の読みの営為などに至るまで数多くのコメントや質問が寄せられた。小説テクストを「クィアする」読み解きによって改めてさまざまな可能性が浮かび上がることとなり、なおかつ登壇者である武内氏のクィア／フェミニズム／ジェンダー批評研究者としての立場性に触れる貴重な機会となったと考える。自分なりに小説を読み直してみたいと思う方々には、ぜひ同書を紐解いていただきたい。

記録担当：洲崎圭子（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所研究協力員）



▶ 2022 年度 主催 IGS 研究会詳細

IGS 研究会

IGS 研究協力員研究報告会



【日時】2023 年 3 月 17 日（月）10：00〜12：30

【会場】オンライン開催（Zoom ミーティング）

【報告】

板井広明（専修大学准教授）

「ミソジニーとフェミニズム」

仙波由加里（ドナーリンク・ジャパン）

「生殖補助医療に関する法律の欠如がドナーリンクに及ぼす影響と課題」

平野恵子（横浜国立大学准教授）

「ギグ・エコノミーと再生産労働に関する研究動向」

佐野潤子（慶応義塾大学ﾌｧｲﾅﾝｼｬﾙ・ｼﾞｪﾛﾝﾄﾛｼﾞｰｾﾝﾀｰ特任講師）

「既婚女性の資産形成：日本とノルウェーの比較から」

【挨拶・コメント】

戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

【司会】

嶽本新奈（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日本語

【参加者数】15 名

【趣旨】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所では研究所に在籍している研究協力員に自身の研究紹介も兼ね、研究報告することを義務付けている。2022 年度は板井広明氏、仙波由加里氏、平野恵子氏、佐野潤子氏の 4 名が当研究所の研究協力員として研究活動を行い、その研究成果報告として 2023 年 3 月 17 日に IGS のメンバーや学内研究者に向けてそれぞれの研究について報告した。

【開催報告】

2023 年 3 月 17 日、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員研究報告会を開催し、2022 年度の IGS 研究協力員であった板井広明氏（専修大学）、仙波由加里氏（ドナーリンク・ジャパン）、平野恵子氏（横浜国立大学）、佐野潤子氏（慶應義塾大学）の 4 名が報告した。

板井氏は「ミソジニーとフェミニズム」というタイトルで報告した。今回の報告は 2022 年に出版されたシーラ・ジェフリーズ『美とミソジニー：美容行為の政治学』（慶應義塾大学出版会）を取り上げ、こ

の著書に通底するトランス差別的な立場の来歴とその論理の再確認を行うという趣旨であった。まずはトランスジェンダーをめぐるリベラル・フェミニズムとラディカル・フェミニズムの思想を紹介し、次いで現在の日本社会におけるトランス差別とそれに抗する言説を紹介した。トランス差別的な言説は一部のフェミニスト達からも発せられており、それにどのように応答するべきなのか、参考になるだろうと思われる複数の著書を示しつつ、インターセクショナリティ概念の重要性を強調された。

仙波氏は「生殖補助医療に関する法律の欠如がドナーリンクに及ぼす影響と課題」というテーマで、自身も立ち上げに関わった一般社団法人ドナーリンク・ジャパンの活動を通して見えてきた課題について報告した。ドナーリンクとは、生殖補助医療で生まれた人と過去に精子や卵子を提供したドナー、または同一のドナーから生まれた人同士を結び付ける（リンクする）ことを指すが、その際にはドナーの提供時の情報や出生者の親が提供を受けた際の情報、さらに出生者の情報やその情報開示が必要となる。近年では「出自を知る権利」を法律で保障している国も増えてきているが、日本ではまだドナーの法的立場を明示する法律が存在しない。仙波氏は、法律の欠如による諸問題を紹介し、日本における法律の整備とドナーリンクへの社会的理解の深まりの必要性を提起した。

平野氏は「ギグ・エコノミーと再生産労働に関する研究動向」というテーマでインドネシアのギグ・エコノミー領域における家事労働者について報告した。ギグ・エコノミーとはプラットフォームを介して行われる労働であり、「ギグ」とは狭義には臨時・随時の雇用形態を指すことばである。平野氏は、ギグ・エコノミーをめぐる先行研究の論点を整理し、かつては二重労働論における第二次労働市場として「女性化（feminized）」されていたギグ・ワークが社会的備給プロセスの中で主流に移行してきたことを紹介した。こうした流れを踏まえた上で、インドネシアのギグ・エコノミー型家事労働者の状況とインタビューを参照しつつ、ギグ・エコノミー型家事労働者と一般的な家事労働者の比較をし、社会保障の有無や意識の差異を通して序列化・切断化される家事労働者たちの現状を提示した。

佐野氏は「既婚女性の資産形成：日本とノルウェーの比較から」というテーマで報告した。超高齢化社会を迎えて老後の人生に備えるための資産形成の重要性が高まる中、夫婦それぞれの名義資産の格差が存在している。佐野氏はこうした夫婦それぞれの資産格差の要因にジェンダー意識が関係するのではないかと日本とノルウェーの比較調査を行った。夫婦間の資産格差には年齢や学歴、収入などの影響に加えて家計の意思決定を妻が担っていることも重要な要因であるというドイツの先行研究を紹介し、日本の調査ではこれに準ずるという結果だったが、ノルウェーは全くそうした変数が格差につながっていないことを実証的に示した。家計の意思決定を妻がもつと資産格差が低くなるという日本の場合、それは収入の多寡ではなく性別役割分業に根付いており、性別役割分業を担うことが夫婦間の金融資産額の格差是正につながっていることが指摘された。

4 人からの非常に興味深いテーマとそれに関連する問題提起に、参加者の間からも様々な質問やコメントがあがり、非常に意義のある討論を展開することができた。最後にジェンダー研究所所長である戸谷陽子教授より報告会についての総括の言葉が述べられた。

記録担当：嶽本新奈（IGS 特任講師）

▶ 2022 年度 IGS 共催国際シンポジウム詳細

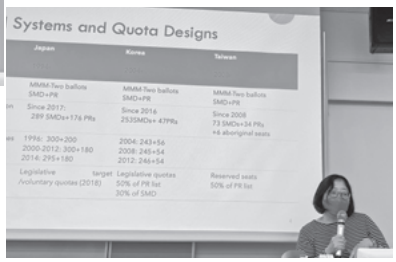
「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクト

東アジアにおけるジェンダーと政治代表



【日時】2023 年 1 月 13 日（金）17:30〜20:00
【会場】上智大学 2 号館 414 号室
【報告】
Ki-young Shin, Ochanomizu University
Chang-ling Huang, National Taiwan University
Jackie Steele, enjoy Japan K.K.
Wan-ying Yang, National Chengchi University
Soo Hyun Kwon, Korea Women's Political Solidarity
Mari Miura, Sophia University
Kenneth Mori McElwain, University of Tokyo
Tomoki Kaneko, University of Tohoku
【ディスカッサント】
Sara Childs, University of Edinburgh
Gregory Noble, University of Tohoku
【主催】WONDER Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation
【共催】ジェンダー研究所
【協力】
科研費基盤研究 B（18H00817）女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査（代表：三浦まり、分担者：申琪榮）
科研費基盤研究 C（19K12604）ジェンダークオータの政治学:制度化と抵抗（代表：申琪榮）
【言語】英語
【趣旨】
An international research group organized by scholars and activists in Japan, South Korea, and Taiwan, WONDER (Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation), has conducted elite surveys in the past years to explore commonalities and differences of elites' perceptions on barriers into politics, policy preferences, and gender quotas among three Asian democracies. The International Symposium presents the major findings of the research and proposes further research agendas.







ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同

「ガラスの崖」をよじ登る
「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁



【日時】2022 年 12 月 23 日（金）16:40〜19:00

【会場】ハイブリッド開催（お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 201 室、Zoom ウェビナー）

【開会挨拶】
戸谷陽子（お茶の水女子大学教授・ジェンダー研究所長）

【登壇者紹介】
小林誠（お茶の水女子大学教授・グローバルリーダーシップ研究所長）

【発表】
ミッシェル・ライアン（オーストラリア国立大学教授）
「『ガラスの崖』とは？―高リスクにおける女性リーダーの役割」

小久保みどり（立命館大学教授）
「危機の時のリーダーの選択―『ガラスの崖』と作動性リーダー」

ヘレン・ピーターソン（エレブルー大学（スウェーデン） 教授）
「『ガラスの崖』は越えられる？ スウェーデンの高等教育における女性リーダー」

【コメント】岡村利恵（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【閉会の挨拶】石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）

【司会】大橋史恵（お茶の水女子大学ジェンダー研究所准教授）

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構　グローバルリーダーシップ研究所　ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】121 名

開催報告書はグローバルリーダーシップ研究所より以下のリンク先にて、2023 年 11 月に公開される予定である。

https://www.cf.ocha.ac.jp/igl/j/menu/publication/d009813.html

▶ 2022 年度 後援イベント

日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会

フェミニスト経済学からみた政治・権力

家父長的世帯主義批判



【日時】2022 年 7 月 9 日（土）10:00〜18:00

【会場】早稲田大学早稲田キャンパス 14 号館 4 階 401 教室

【座長】大橋史恵（お茶の水女子大学）・板井広明（専修大学）

【報告】

藤原千沙（法政大学）
「プロヴィジョニングの経済学と個人・世帯・社会政策」

申琪榮（お茶の水女子大学）
「政治権力はどのように再生産されるのか：政治資本としての家父長的イエ」

キム・イルジュ（早稲田大学）
「「母親国民」と「非国民」：フィリピン人結婚移住女性の市民権と政治参加に関する日韓比較研究」

清水奈名子（宇都宮大学）
「東電福島原発事故とジェンダー：被害を増幅させる要因としての格差と差別」

【討論】

足立眞理子（お茶の水女子大学）

金井郁（埼玉大学）

小ヶ谷千穂（フェリス女学院大学）

落合絵美（岐阜大学）

【主催】日本フェミニスト経済学会

【共催】早稲田大学平和学研究所

【後援】お茶の水女子大学ジェンダー研究所、早稲田大学ジェンダー研究所

4. 国際研究ネットワーク

1）国際的な共同研究・研究交流

2）INTPART プロジェクト

3）国内外招聘研究者一覧

1）国際的な共同研究・研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2022 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

海外研究者氏名	所属機関（職位）
黄長玲	国立台湾大学（教授）
楊婉瑩	台湾国立政治大学（教授）
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所（研究委員）
Jiso Yoon	韓国女性政策研究院国際協力センター（センター長）
Devin K. Joshi	Singapore Management University（准教授）
日下部京子	アジア工科大学院大学（AIT）（教授）
Jean Encinas-Franco	フィリピン大学（教授）
Jan Robert Go	フィリピン大学（准教授）
Ella Syafputri Prihatini	ビナ・ヌサンタラ大学（講師）
Ummu Atiyah Ahmad Zakuan	ウタラ マレーシア大学（講師）
Sara Niner	モナシュ大学（講師）
Therese Thi Phuong Tam Nguyen	東ティモール国立大学（教授）
Syeda Lasna Kabir	ダッカ大学（教授）
Aashiyana Adhikari	Center for South Asian Studies（Research Officer）
Ruwanthi Jayasekara	Institute of National Security Studies（Associate Research Fellow）
Lucetta Y. L. Kam	香港浸會大学（准教授）
鐘仁耀	華東師範大学（教授）
李晶	華東師範大学（副教授）
張継元	華東師範大学（講師）
王橋	中国社会科学院（研究員）

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 教授）、嶽本新奈（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム「AIT ワークショップ」は、新型コロナ感染症拡大のため 2020、2021 年度実施できなかったが、今年度は派遣、受入れ共に再開できた。（本報告書 62 頁参照）。

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

【担当】石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）、戸谷陽子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、仙波由加里（IGS 研究協力員）、吉原公美（お茶の水女子大学リエゾン・URA センターリサーチ・アドミニストレーター）、佐野潤子（IGS 研究協力員）ほか

【共同研究・研究交流の概要】

ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクト（2019 年 4 月～2023 年 9 月）により、共同研究、研究者および大学院生の相互派遣、国際シンポジウム・セミナー・ワークショップ開催などの事業を展開。ノルウェー高等教育・技能局（HK-dir）の UTFORSK 助成金プロジェクト（2021 年 8 月～2025 年 7 月）とバーチャル・エクスチェンジ／COIL パートナーシップ・イニシアチブ（2023 年 3 月～12 月）の活動も並行して実施している。2022 年度は、6 月に学生フォーラムを開催、11 月に日本学術振興会ノルウェーAlumni 主催ウェビナーにて共同プロジェクト成果について発表したほか、2 月には院生派遣を再開し、博士後期課程院生 1 名がノルウェーに渡航した（本報告書 56 頁参照）。

韓国女性政策研究院

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 9 月 1 日～30 日まで Visiting Scholar として招聘を受ける。同院開催の国際フォーラムにキーノートスピーカーとして登壇したほか、研究プロジェクトに関する諮問など、各種の研究プロジェクトに参与した。

韓国ジェンダー政治研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年～2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。2022 年度も当該研究所の共催イベントに登壇した。

ソウル大学日本研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員を務める。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

コンラート・アデナウアー財団シンガポールオフィス

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

コンラート・アデナウアー財団のシンガポールオフィスが支援する共同研究プロジェクト「Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study」に共同研究者として参与した。研究成果は書籍 Substantive Representation of Women in Asian Parliaments として 2022 年 8 月に Routledge 社から出版された。2022 年 11 月には財団主催の Caucus に参加し共同研究の内容を女性議員らと共有した。

西江大学社会科学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

『社会科学研究』編集委員

釜山大学女性学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

『女性学研究』編集委員

イギリス政治学会学術雑誌 *Politics*

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Politics 編集委員

華東師範大学

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」の分担者として現地研究者との協力において調査を実施している。

中国社会科学院

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」の分担者として現地研究者との協力において調査を実施している。

【国内外関連研究会】

○政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Women and Diversity in East asian political Representation（WondeR））（申）

○日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）

○日本政治学会　年報政治学「コロナとジェンダー特集」研究会（申）

○国際移動とジェンダー研究会（大橋）

○経済理論学会分野別分科会・ジェンダー（大橋）

○国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク

ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加　ほか

2）INTPART プロジェクト

国際比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

■概要

ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation（INTPART）による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）プロジェクト。ノルウェー科学技術大学（NTNU）のジェンダー研究センターと IGS とで、2019 年 4 月～2023 年 9 月の期間、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等についての比較研究、セミナーやワークショップの開催などを進め、共同研究の成果を書籍として刊行。

■プロジェクト構成（相互に連携する 6 つのワークパッケージ（WP））

WP1 プロジェクト管理：NTNU とお茶大の代表が高水準の生産性と創造性を担保。

WP2 在外研修：両大学の院生、教員、研究者がパートナー大学に滞在して教育交流や在外研究を行う。

WP3 院生共同指導：両大学の教員が、大学院生の研究プロジェクトの共同指導を行う。

WP4 合同カリキュラム開発と交換教育：質の高い研究に基づく国際的な教育プログラムを開発。

WP5 共同出版と年次ワークショップの開催：アンソロジー刊行プロジェクト

WP6 広報・成果普及とセミナー開催：公開イベントの開催などプロジェクト成果の発信

■2022 年度プロジェクトメンバー

《NTNU》

グロ・コースニス・クリステンセン（学際的文化研究学部長・教授：プロジェクトマネージャー）

ジェニファー・ブロンラ（准教授：プロジェクトコーディネーター）

プリシラ・リングローズ（教授）

シリ・エイスレボ・ソレンセン（ジェンダー研究センター長・教授）

《IGS》

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長：本学側代表）

戸谷陽子（IGS 所長／基幹研究院人文科学系教授）

小玉亮子（IGS 研究員／基幹研究院人間科学系教授）

吉原公美（リサーチ・アドミニストレーター：事務局）

松田デレク（国際教育センター講師／群馬大学講師）

仙波由加里（IGS 研究協力員）

佐野潤子（IGS 研究協力員／慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師）

■INTPART プロジェクト 2022 年度事業成果

新型コロナウィルス感染症の影響により停滞していた研究者および大学院生の相互派遣を 2 月から再開することができた。オンラインのイベントも実施したほか、今後の教育プログラムのためのカリキュラム開発を目的として、ノルウェー高等教育・技能局（HK-dir）によるバーチャル・エクスチェンジ／COIL パートナーシップ・イニシアチブに応募し採択された。また、プロジェクト期間の再延長を申請し、2023 年 9 月までの変更が承認された。オンラインによる UTFORSK 学生フォーラムやウェビナーの開催もあり、パンデミックが継続する期間も、事業活動を充実させることができた。2023 年 4 月に本学で開催するワークショップの準備が進められている。

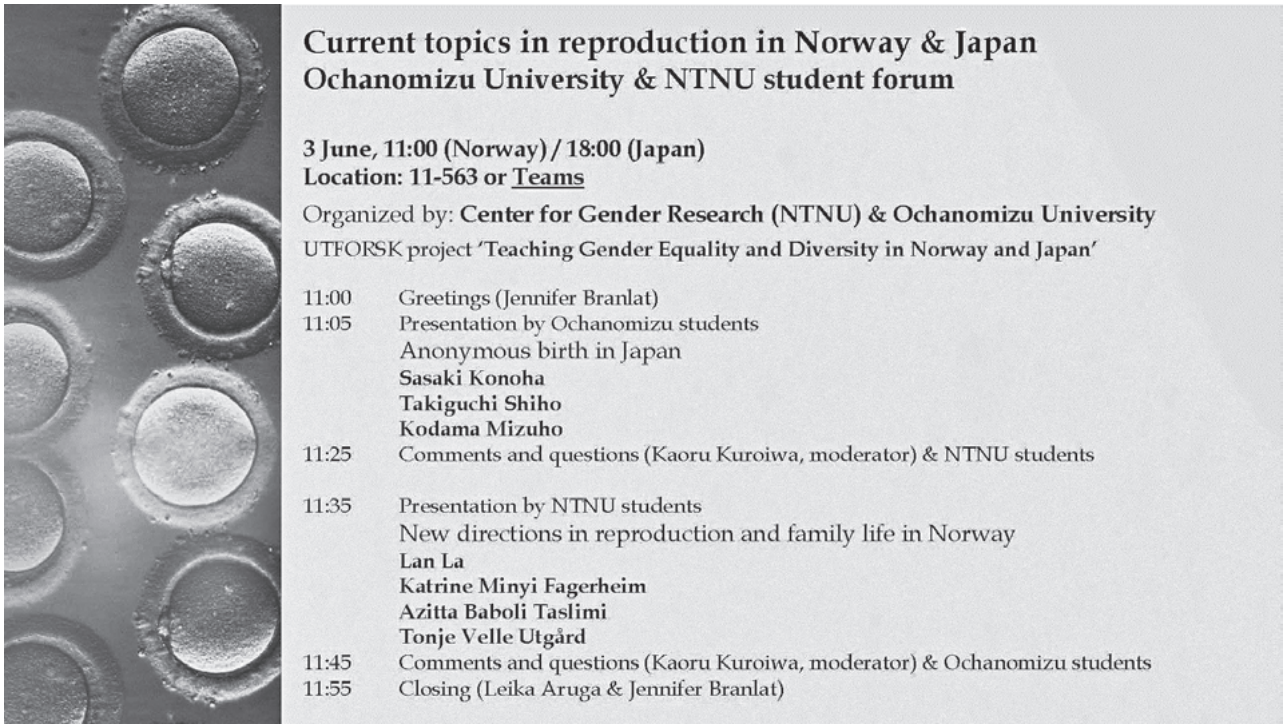
① UTFORSK オンライン学生フォーラム「Current topics in reproduction in Norway & Japan」

【日時】6 月 3 日　18:00〜19:00（日本）、11:00〜12:00（ノルウェー）

【発表者】本学学部生 3 名、NTNU 学部生 4 名

【モデレーター】黒岩薫（本学博士前期課程ジェンダー社会科学専攻院生）

【コーディネーター】ジェニファー・ブロンラ（NTNU 准教授）、松田デレク（本学講師）



② The JSPS Alumni Club in Norway Webinar

'Gender equality in Japan: creating opportunities for business and education cooperation'

【日時】11 月 29 日　17:00〜18:00（日本）、9:00〜10:00（ノルウェー）

【発表者】グロ・クリステンセン（NTNU 教授）、石井クンツ昌子（本学理事・副学長）他

【コーディネーター／司会】ジェニファー・ブロンラ（NTNU 准教授）

【対象】研究者、リサーチ・アドミニストレーター、高等教育機関、
日本の組織との連携に関心のある方・団体

③ ノルウェー高等教育・技能局（HK-dir）による国際共同プロジェクト調査対応

【日時】12 月 5 日　15:00〜16:00

【場所】お茶の水女子大学

【来訪者】Unni Mjelde Birkeland（HK-dir シニア・アドバイザー）
Herdis Kolle（HK-dir シニア・アドバイザー）
Marianne S. Berg（ノルウェー大使館科学技術・高等教育参事官）

【趣旨】INTPART と UTFORKS プロジェクトの内容、活動形態、期待される成果についての日本側の視点についてのインタビュー調査と、将来的なノルウェー・日本間の高等教育における研究教育分野での連携機会の情報提供。

④ バーチャル・エクスチェンジ／COIL パートナーシップ・イニシアチブ（2023 年 3〜12 月）

【プログラム内容】

・オンライン研修とノルウェーでのワークショップ：3 月〜6 月
・メンターによる指導の提供：3 月〜12 月
・主催組織によるキャンパス訪問（指導と支援）：9 月〜12 月
・COIL（Collaborative Online International Learning）授業の実施：秋以降

【本学メンバー】

1）カリキュラム担当教員：小林誠 基幹研究院人間科学系 教授
2）COIL 技術担当教員：伊藤貴之 基幹研究院自然科学系 教授
3）国際教育担当教員：萩原章子 国際教育センター 講師
4）プログラム実施支援者：吉原公美 リエゾン・URA センター リサーチ・アドミニストレーター

⑤ 本学の大学院生の在外研修

期間	氏名	学年	研究テーマ
2/3〜2/17	小河映育花	D2	Are“Cohabitation”and“*Douse*”the same?: Values and Images for Unmarried Cohabitation among Young Females in Japan and Norway

⑥ NTNU 院生の来日研修

期間	氏名	学年	研究テーマ
3/22〜6/16	Emilie Helen Vik	M2	Narratives of school experiences of LGBTQ+ students in Japan
	Kai Vårin Jektvik Rønning	M1	X-gender in Japan / people who identify outside of gender binary
	Marianne Hegge Sørensen	M1	Queerness and representation of gender in Japanese manga (boys love genre)

⑦ ノルウェーの研究者の日本学術振興会外国人特別研究員受入

期間	氏名	受入研究者	研究テーマ
3/31〜3/30	france rose hartline	戸谷陽子	Trans experiences of belonging in Japan

3）国内外招聘研究者一覧

■ 2022 年度　海外からの招聘研究者

イケモト・リサ・C（カリフォルニア大学・米）
IGS 国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」（27 頁参照）

Jean Encinas-Franco（フィリピン大学・フィリピン）
IGS セミナー「The Marcos Return : What Does it Mean for the Philippines?」（30 頁参照）

Jan Robert Go（フィリピン大学・フィリピン）
IGS セミナー「The Marcos Return : What Does it Mean for the Philippines?」（30 頁参照）

Ella Syafputri Prihatini（ビナ・ヌサンタラ大学・インドネシア）
IGS セミナー「The Marcos Return : What Does it Mean for the Philippines?」（30 頁参照）

ルセッタ Y・L・カム（香港浸會大学・香港）
2022 年度 IGS 研究協力員（93 頁参照）
IGS セミナー「クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）」（37 頁参照）

マーシー・ディニウス（デポール大学准教授／フルブライト招聘教員・米）
IGS セミナー「19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』（1851）を例に」（33 頁参照）

■ 2022 年度　国内招聘研究者

岩本美砂子（元三重大学）IGS 国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」（27 頁参照）

高谷幸（東京大学）IGS 国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」（27 頁参照）

飯野由里子（東京大学）IGS 国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」（27 頁参照）

青山薫（神戸大学）IGS セミナー「日本（と世界）における性的マイノリティの政治」（35 頁参照）

片岡佑介（一橋大学／立教大学ほか）IGS セミナー「「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』（1973）再考」（39 頁参照）

村瀬敬子（佛教大学）IGS セミナー「家電と暮らしのポリティクス」（41 頁参照）

岩島史（京都大学）IGS セミナー「家電と暮らしのポリティクス」（41 頁参照）

武内佳代（日本大学）IGS セミナー「クィアする現代日本文学：ケア・動物・語りとジェンダー」（43 頁参照）

5. 若手研究者の育成

1）AIT ワークショップ

2）大学院における次世代研究者育成

3）専任・特任教員担当講義

1）AIT ワークショップ

ジェンダー研究所が運営主体を務める国際研究交流プロジェクト

タイのアジア工科大学院大学（AIT）とジェンダー研究所による若手研究者国際交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology（AIT））とにより実施されている、国際研究交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、日本ではジェンダー研究所が、タイでは AIT・環境資源開発研究科が運営主体となり、AIT で実施されるワークショップへの本学院生派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、国際研究交流事業をほぼ毎年実施している。お茶大ではもっとも歴史が長い国際研究交流プログラムである。

2009 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れた。

AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development
2002	Gender, Work and Globalization
2003	Women, Globalization and Home-based Work
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan
2011	Gender and Disaster〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality
2013	Global Justice, Women’s Health and Prostitution
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment
2015	Labor, Sexuality and Empowerment
2016	Labor and Association from Gender Perspective
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives
2019	Gender and Empowerment in Urban Space
2020、2021	〔院生派遣は見送り〕
2022	Education from intersectional Perspective

大学院講義「国際社会ジェンダー論」での学習とグローバルなフィールドでの実践・交流

本ワークショップの日本からの参加者は、春学期に大学院科目「フィールドワーク方法論」を履修し、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査方法を学ぶ。その後にアジア諸国の将来を担う多彩な人材が集う AIT での研修に参加し、フィールドワークに基づく研究の基礎を実践的に学習する。また各国の院生たちとワークショップで研究交流することで、彼らの熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから研究者としての刺激を得る。帰国してからはジェンダー研究所所属教員が担当する「国際社会ジェンダー論」（本報告書 66 頁参照）にて、タイで得た知見を共有し、国際社会におけるジェンダーの問題の理論的検討を通じて、さらに理解を深める。また参加者は毎年、報告書をまとめている。

ジェンダー研究所は、このような大学院生の国際研究交流プログラムを提供し、大学院生の教育キャリキュラムを補強することで、次世代のジェンダー研究者、あるいは、NGO や国際機関で国際協力の仕事につく人材の養成に持続的に取り組んでいる。

■2022 年度 AIT ワークショップについて

新型コロナ感染症拡大のために 2020 年度、2021 年度の院生相互派遣の実施は見送られたが、2022 年度は関係者の尽力によって再開でき、参加した院生に有意義なプログラムを提供できた。2019 年度と同様に、参加者はまず国内事前研修に相当する「フィールドワーク方法論」の授業をとり、AIT ワークショップ派遣に備えて学ぶこととなる。今年度は日本への入国緩和の時期が 7 月だったこともあり、例年、AIT の院生を受け入れてからお茶大院生が派遣されるところを順序が逆となり、お茶大院生の AIT への派遣が先となった。

帰国後に参加者は「国際社会ジェンダー論」で、タイでのフィールドワークや AIT での学びを言語化し、報告会と報告書作成に向けて共同作業で準備を進めていった。これは派遣されたという経験のみで終わらせることなく、その経験を咀嚼し、グローバルな社会状況の中に位置づけ直し、自身の見聞きした情報を体系づけていく作業を通してより理解と思索を深める機会を得るためである。

タイからの来日研修では、本学歴史資料館や IGS 所属教員の協力を得て、また学外の関連団体や研究者からも多くの協力も得て、日本におけるセクシュアル・マイノリティの政策や実態、またそれと交差する形での移民や受刑者たちの状況を具体的に学ぶプログラムを組み、インタビューやフィールドワークを実践する機会を設けた。日本からの参加者はすべての日程でサポートに入り、臨機応変に通訳や説明の補足を適宜行なったが、これもまたこのプログラムならではの実践の一つである。日本とタイからの参加者によるそれぞれの報告会では、充実したフィールドワークの成果が報告され、質疑応答も活発に行われた。

「ジェンダーと開発（Gender and Development: GAD)」にかかわる課題群の分析方法や視座、また海外におけるフィールドワークの基礎を学ぶことが目的の本プログラムによって、参加者は国際協力や開発援助、市民運動に直に触れ、フェミニスト視点から議論する機会を得ることができたといえるだろう。



「AIT ワークショップ」で来日したタイのアジア工科大学院大学（AIT）の院生による研究報告会

2）大学院（人間文化創成科学研究科）における次世代研究者育成

ジェンダー研究所はジェンダーの視点から学際的・国際的な研究を推進する次世代の研究者育成も行っている。IGS 所属教員の指導のもと、2022 年度は以下の院生が博士前期課程を修了した。

博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻）修了者

【氏名】伊奈　留偉
【指導教員】申　琪榮（IGS 教授）
【修論タイトル】候補者男女均等法の推進理論としての代表制におけるパリテ概念の批判的検討
【要旨】
2018 年「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」（以下候補者男女均等法）が成立したが、候補者擁立に際し男女の数を均等にすることは“努力義務”とされたため、改正が目指されている。本稿の目的は、候補者男女均等法の改正を念頭に，その理論的方向性を検討することである。日本において「候補者を男女均等にする」とはどのような包摂と排除を意味するのかという観点から、「男女」という枠組みを批判的に考察する。男性のみで構成された政治的共同体に女性が参入し、「男女が平等となった」という市民権の物語の続編としての候補者男女均等法の物語において忘却されるものの存在を、既存の権力が再生産される構造から明らかにする。

【氏名】花岡　奈央
【指導教員】申　琪榮（IGS 教授）
【副査】大橋　史恵（IGS 准教授）
【修論タイトル】日本のフェミニズム文脈で語られる Twitter 上でのトランスジェンダー差別・排除の言説分析――ハッシュタグ「#ファイヤーデモ」に着目して――
【要旨】
本論文は日本におけるインターネット上の「生物学的な女性の権利を守るため」の活動の中の「トランス差別的・排除的な枠組み」を明らかにし、その「枠組み」が維持できる背景について考察を試みる。「トランス差別的・排除的」であると指摘される「生物学的な女性の権利を守るため」の活動に焦点を当てることで、現在のフェミニズムが取りこぼしている課題や周縁化されている問題を再確認し、今後のフェミニズムの戦略を考える上で重要な手がかりとしたい。「生物学的な女性の権利を守るため」の活動の中で使用されるハッシュタグ「＃ファイヤーデモ」とともに投稿されているツイートとアカウント情報の統計的な整理、計量分析ソフト KH corder を用いた量的調査及びツイートの言説分析を行った。

【氏名】河原　恵美
【指導教員】大橋　史恵（IGS 准教授）
【修論タイトル】『はたらく細胞』に見る医療マンガ表象とジェンダー――擬人化と戦いのメタファに着目して――
【要旨】
本研究では、マンガ 『はたらく細胞』 が擬人化や戦いのメタファを使用した表象を取り入れていることの意味を探る。特に戦いのメタファに重点を置いて分析を行う。戦いのメタファはマンガに限らず、Covid-19 についての比喩や医療書における医学的な説明の比喩にも使われる。それはそのようなメタファが、大衆に受け入れられやすい性質をもっているために他ならないが、そこにさまざまな問題がともなっていることについては批判的に考えることが必要である。本研究は 『はたらく細胞』 の分析を通じてそうした問題を明らかにしていくことによって、「分かりやすさ」と「面白さ」のために戦いのメタファを安易に使うことの危険性を示唆する。

【氏名】YU　LE
【指導教員】大橋　史恵（IGS 准教授）
【修論タイトル】中国内陸部農村出身の大学進学者のライフコースとジェンダー――「民工潮」子ども世代の学業達成と進路選択をめぐって――
【要旨】
本研究は、1990 年代以降の中国内陸部農村に生まれた女性と男性の大学進学とその後の進路選択の経験に着目し、農村―都市間の格差やそれに関わるさまざまな政策が、農村の若者たちのライフコースにどのような影響を及ぼしたのかを、ジェンダーの視点から明らかにするものである。この世代の農村の若者たちは、1990 年代以降の「民工潮」（出稼ぎブーム）において都市に出稼ぎに行った世代の子どもたちであり、「流動児童」（親の出稼ぎに帯同される子ども）や「留守児童」（親の出稼ぎで農村に残される子ども）として過ごした者が多いということに留意しながら若者たちへのライフヒストリーインタビューを行い、彼女ら・彼らの高校、大学への進学とその後のライフコースを分析した。

【氏名】LI　XIAOXUE
【指導教員】大橋　史恵（IGS 准教授）
【副査】申　琪榮（IGS 教授）
【修論タイトル】中国における地方国家公務員人事のジェンダー・ポリティクス――内モンゴル自治区における公務員の採用と昇進を事例に――
【要旨】
本研究は、近年の中国の地方国家公務員の人事についてジェンダーの視点から実証的分析をおこない、導き出される問題点について批判的に考察するものである。中国における公務員の採用についてのこれまでの研究調査は、各地域の文化・政治・経済的要因への考慮が欠如している。特に少数民族自治区の状況については、少数民族優遇措置が女性公務員の採用および昇進割合の推移に影響をおよぼす可能性など、ジェンダーの問題とエスニシティの問題が重なるところに発生しうる問題について検討する必要があると思われる。本研究では少数民族自治区である内モンゴル自治区を対象に、地方国家公務員の採用と昇進にどのようなポリティクスがはたらいているのかを、ジェンダーとエスニシティの交差にも目を向けながら論じていく。

● IGS 所属教員が副査を務めた 2022 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻）修了者

【氏名】小嶋　里菜
【副査】大橋　史恵（IGS 准教授）
【修論タイトル】女性雑誌にみる PMS をめぐる実践の要請とその女性性規範化に関する検討

● IGS 所属教員が副査を務めた 2022 年度博士後期課程修了者と論文タイトル

博士後期課程（ジェンダー学際研究専攻）学位取得者

【氏名】Baraniak-Hirata Zuzanna Maria
【副査】申　琪榮（IGS 教授）、大橋　史恵（IGS 准教授）
【博論タイトル】Exploring the Takarazuka world: An ethnographic study of Takarazuka Revue's marketing strategies, urban space, and fan culture development

3）2022 年度 IGS 専任・特任教員担当講義

《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

申琪榮（教授）
比較政治論（前期）
比較政治論演習（後期）
ジェンダー学際研究報告（基礎）（前期不定期）
ジェンダー学際研究報告（発展）（後期不定期）
ジェンダー学際研究論文指導（通年不定期）

大橋史恵（准教授）
ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）
ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）
ジェンダー政治経済学（前期）
ジェンダー政治経済学演習（後期）

《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

申琪榮（教授）
フェミニズム理論の争点（前期）
フェミニズム理論の争点・演習（後期）
国際社会ジェンダー論（後期不定期）
国際社会ジェンダー論演習（後期）

大橋史恵（准教授）
ジェンダー社会経済学（前期）
ジェンダー社会経済学演習（後期）

嶽本新奈（特任講師）
国際社会ジェンダー論（後期不定期）
※（本報告書 62〜63 頁「AIT ワークショップ」参照）

《学部》

戸谷陽子（教授）
ジェンダー３　文化メディアとジェンダー（後期）

申琪榮（教授）
比較ジェンダー論（後期）

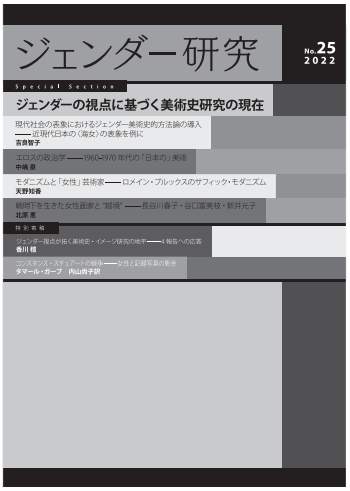
大橋史恵（准教授）
アジア社会とジェンダーⅠ（後期）
グローバル文化学実習Ⅱ（通年不定期）
グローバル文化学総論（前期）
ジェンダー２　グローバル経済とジェンダー（前期）
文化変動論Ⅰ（後期）
文化変動論Ⅱ（前期）

6. 学術成果の発信

1）学術雑誌『ジェンダー研究』

2）プロジェクト報告書
IGS Project Series

1）『ジェンダー研究』



『ジェンダー研究』は本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌で、特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第 1 級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものである。

『ジェンダー研究』25 号（2022 年 7 月刊行）概要

特集「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」

『ジェンダー研究』25 号は、「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」を特集した。本特集は、日本でジェンダーの視点から美術史研究を牽引している 4 名の研究者による研究論文 4 本に加え、特別寄稿としてこの特集の元となった同名の IGS シンポジウムのコメンテーターであった香川檀氏のコメント原稿と、美術史学研究をリードするロンドン大学のタマール・ガーブ教授の翻訳論文の 2 本で構成されており、ジェンダー視点に基づいた美術史研究の現在地が示された。

研究論文 1 本目の吉良論文は、「現代社会の表象におけるジェンダー美術史的方法論の導入――近現代日本の〈海女〉の表象を例に」と題され、あえて美術作品ではなく身近にある海女についての表象を対象とし、その表象のあり方にジェンダー美術史的方法論を応用し、歴史的な変遷とあわせて読み解いた論考である。現代の海女のイメージは社会が欲望するエロスとエキゾティシズムを兼ね備えた他者としての想像／創造上の海女であることが検証されている。2 本目の中嶋論文は、「エロスの政治学――1960-70 年代の『日本の』美術」と題され、60-70 年代に世界各地で人間解放の思想として流行した「エロス」の日本および日本出身のアーティストの表現を比較考察し、具体的な作品やパフォーマンスを通して男女で「エロス」に関する解釈や表現が異なっていたことを説得的に考察した論考である。3 本目の天野論文は、「モダニズムと『女性』芸術家――ロメイン・ブルックスのサフィック・モダニズム」と題され、20 世紀前半にフランスで活躍したアメリカ人女性画家であるロメイン・ブルックスの自画像を分析する。既存の表象体系を慎重に組み替えながら、彼女が試みたサフィック・モダニズムの可視化について論じられている。4 本目の北原論文は、「戦時下を生きた女性画家と“越境” ――長谷川春子・谷口富美枝・新井光子」と題し、戦時下で活躍した女性画家 3 人を取り上げている。3 人はそれぞれ活動拠点も戦争に対する考え方も異なっていたが、女であると同時に画家であることへの矛盾を抱えていた点で共通していた。彼女たちの活動や視覚表象を分析し、ジェンダーの視点から問い直した論考である。

特別寄稿の 2 本の論考のうち香川論文は、本特集の元となった IGS シンポジウム時の 4 人の報告に

対する応答コメントである。各論文の補足にもなっており、既存の美術史学のナラティヴを覆す問題提起と、この方法論に立脚することでどのような地平が拓かれるのかという展望が語られている。タマール論文は、2019 年 5 月にお茶の水女子大学で開催された美術史学会主催の講演会時の報告原稿の全訳である。南アフリカ出身で、現在ロンドン大学 UCL の美術史学の教授であるタマール・ガーブ氏はこの分野を代表する研究者である。南ア出身の女性カメラマン、コンスタンス・スチュアートによる第二次世界大戦後のフランスで撮られた対独協力者の女性の写真を精緻に考察し、鋭い表象分析がなされている。今号の特集の特徴は、すべての論文で図版や写真がキャプションとともに挿入されている点である。実際の図版や写真をじっくりと眺めながら、各論考で展開されるスリリングなフェミニズム的読解やジェンダー視点による解釈に触れることができる素晴らしい特集になったと自負している。

続く一般投稿論文のセクションでは、5 本を掲載することができた。いずれも厳正な審査を経て掲載可となったもので、後掲の目次から明らかなように、セクシュアリティ、表象、法、クィア的読解といった幅広い分野からの掲載となった。

また書評は、小ヶ谷千穂、村上彩佳、G. G. Rowley、Setsu Shigematsu、金美恵、李素軒、古久保さくら、関根里奈子、鈴木楓太、福永玄弥、伊田久美子、Yuko Onozaka、飯野由里子、菅野摂子、梁・永山聡子、河野真太郎、片山亜紀の諸氏によって評された 17 本の書評を収録した。いずれも人文科学・社会科学の幅広いフェミニズム、ジェンダー研究の先端をいく文献を厳選し、寄稿いただいた。

今号も多彩な執筆陣によって最先端のジェンダー研究の知見が提供される 1 冊となった。

■『ジェンダー研究』25 号（2022 年 7 月刊行）編集委員会

編集委員長

申　琪榮　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所

編集委員

天野　知香　　お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系
水野　勲　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
森　義仁　　お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系
石丸　径一郎　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
大橋　史恵　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所
倉光　ミナ子　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
脇田　彩　　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

学外編集委員

三浦　まり　　上智大学法学部
金井　郁　　埼玉大学経済学部
北原　恵　　大阪大学文学研究科
板井　広明　　専修大学経済学部
Jan Bardsley　　ノースカロライナ大学
Karen Ann Shire　　デュースブルグ・エッセン大学

編集事務局

平野　恵子　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2022 年 3 月まで）
仙波　由加里　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2022 年 3 月まで）
嶽本　新奈　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2022 年 5 月から）
黒岩　漠　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2022 年 5 月から）
和田　容子　　お茶の水女子大学ジェンダー研究所

『ジェンダー研究』25 号（2022 年 7 月刊行）目次

編集のことば……申琪榮
巻頭言……天野知香
特集：ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在
研究論文
現代社会の表象におけるジェンダー美術史的方法論の導入――近現代日本の〈海女〉の表象を例に……吉良智子
エロスの政治学――1960-70 年代の「日本の」美術……中嶋泉
モダニズムと「女性」芸術家――ロメイン・ブルックスのサフィック・モダニズム……天野知香
戦時下を生きた女性画家と“越境”――長谷川春子・谷口富美枝・新井光子……北原恵
特別寄稿
ジェンダー視点が拓く美術史・イメージ研究の地平――4 報告への応答……香川檀
コンスタンス・スチュアートの戦争――女性と記録写真の剰余
／Constance Stuart's War: Women and Documentary's Excess……タマール・ガーブ（内山尚子訳）
投稿論文
公共政策における「交差性」概念の有効性と課題――理論的枠組みと批判的実践という観点から……高橋麻美
アニメーション的な誤配としての多重見当識
――非対人性愛的な「二次元」へのセクシュアリティに関する理論的考察……松浦優
「法のまえ」に現れる身体――コーネルとバトラーの基本概念の批判的統合をもとに……長野慎一
語ることと語り出すこと――性暴力とトラウマケアをめぐるアイデンティティに関する考察……井上瞳
中国本土におけるインディペンデント・クィア映画史の再構築――新しい分類法を用いて……于寧
書評
シンシア・エンロー著, 望戸愛果訳, 人文書院
『バナナ・ビーチ・軍事基地――国際政治をジェンダーで読み解く』……小ヶ谷千穂
Mikiko Eto 著, Routledge
Women and Political Inequality in Japan: Gender-Imbalanced Democracy……村上彩佳
Jan Bardsley 著, University of California Press
Maiko Masquerade: Crafting Geisha Girlhood in Japan……G.G. Rowley
Chelsea Szendi Schieder 著, Duke University Press
Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left……Setsu Shigematsu
謝花直美著, 有志舎
『戦後沖縄と復興の「異音」――米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』……金美恵
小島庸平著, 中央公論新社
『サラ金の歴史――消費者金融と日本社会』……李素軒
元橋利恵著, 晃洋書房
『母性の抑圧と抵抗――ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』……古久保さくら
田中東子編, 北樹出版
『ガールズ・メディア・スタディーズ』……関根里奈子
井谷聡子著, 関西大学出版部
『〈体育会系女子〉のポリティクス――身体・ジェンダー・セクシュアリティ』……鈴木楓太
日下渉／伊賀司／青山薫／田村慶子編, 明石書店
『東南アジアと「LGBT」の政治――性的少数者をめぐって何が争われているのか』……福永玄弥
鄭喜鎭編　権金炫怜／鄭喜鎭／**棡**砦昀／ルイン著, 申琪榮監修・金李イスル訳, 大月書店
『＃MeToo の政治学――コリア・フェミニズムの最前線』……伊田久美子
Masako Ishii-Kuntz, Guro Korsnes Kristensen and Priscilla Ringrose 編, Routledge
Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?……Yuko Onozaka
パトリシア・ヒル・コリンズ／スルマ・ビルゲ著, 小原理乃訳／下地ローレンス吉孝監訳, 人文書院
『インターセクショナリティ』……飯野由里子
竹家一美著, 晃洋書房
『日本の男性不妊――当事者夫婦の語りから』……菅野摂子
キム・ジヘ著, 尹怡景訳, 大月書店
『差別はたいてい悪意のない人がする――見えない排除に気づくための 10 章』……梁・永山聡子
斎藤美奈子著, 河出書房新社
『挑発する少女小説』……河野真太郎
小川公代著, 講談社
『ケアの倫理とエンパワメント』……片山亜紀
編集後記
編集方針・投稿規定

2）プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

ジェンダー研究所では、開催したシンポジウムやセミナーでの講演・報告内容の記録や、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書として、IGS Project Series を刊行している。2022 年度は、『「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1（IGS Project Series 20）台湾におけるジェンダークオータ』の増刷をした。



IGS Project Series 20
「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1

台湾におけるジェンダークオータ

7. 文献収集と公開･史料電子化･ウェブ発信

1）文献・資料の収集と公開

2）IGS 史料電子化プロジェクト

3）ウェブサイト等での情報発信

1）文献・資料の収集と公開

ジェンダー研究の知の基盤の一層の充実を図る

ジェンダー研究所は、1975 年創立の「女性文化資料館」時代から今日に至るまで 40 年以上にわたり、女性学・ジェンダー研究の文献・資料の収集を絶え間なく続けてきた。女性に関する膨大な知の集積ともいえる蔵書は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外から OPAC（Online Public Access Catalog）で検索でき、手続きを経れば学外の者も利用可能である。

2022 年度も、寄贈・購入の多数の文献・資料を収集することができた。一方で、学内で重複所蔵している雑誌については、重複先の欠号分を相手機関に提供したうえで処分し、配架場所の確保を進めた。また、古い貴重資料を保管しているキャビネットの入替や、既存資料のファイリングなどの再整備を進め、利用者の利便性の向上につとめた。

■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧

ジェンダー研究所収蔵文献（書籍約 25,000 冊、雑誌約 340 種）は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外の学生や研究者に利用されている。





《図書館利用案内》

○開館日

・月～金　8:45～21:00　（授業のない日は 17:00 まで）
・土　9:00～17:00　（夏・冬・春期休業期間中は閉館）
・日　12:00～17:00

○閉館日

・日曜日、国民の祝日、年末年始、大学夏季一斉休業日
・夏・冬・春期休業期間中の土曜日
・蔵書点検
・徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式

※最新情報は付属図書館ウェブサイト（https://www.lib.ocha.ac.jp/）を参照。

■蔵書・研究者に関する情報提供

附属図書館収蔵文献・資料のほかに、ジェンダー研究所内にて、購入雑誌・寄贈雑誌の最新号、研究所の過去の成果刊行物、事業の記録、所属研究者執筆の書籍のほか、全国のジェンダー研究施設や男女共同参画団体の定期刊行物を閲覧することができる。

資料閲覧対応のほか、研究者及びジェンダーに関心を持つ方々に、これらの文献や資料、研究所に蓄積された知識を広く活用してもらうため、メールや電話による外部からの問い合わせ、訪問依頼にも随時対応している。

■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開

http://archives.cf.ocha.ac.jp/



お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の 1981 年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における 2 つのプロジェクト、「III 婦人研究者の活動状況に関する調査研究―自然科学分野を中心に―」「IV 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間を掛けて目録化したものである。

目録化は本研究所の前身機関のプロジェクト成果であるが、これを大学の歴史資産として広く公開するよう、2007～2009 年にデジタルアーカイブズ化された。現在、資料現物は理学部内に設置された「女性科学者資料室」で保管され、本学図書・情報課 大学資料担当（shiryo@cc.ocha.ac.jp）が窓口となって資料閲覧や貸出等の依頼に応じている。

2）IGS 史料電子化プロジェクト

ジェンダー研究所は 2017 年度に、「IGS 史料電子化プロジェクト」を始動した。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター（1996 年設立）、女性文化研究センター（1986 年設立）、女性文化資料館（1975 年設立）において、所属の研究者たちが企画開催してきた研究会やセミナー、国際シンポジウム等のイベントの記録・資料を電子化し、「IGS デジタルアーカイブ」として後世に残すことで、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与することを目的とするプロジェクトである。

5 年目を迎えた 2021 年度は、デジタルアーカイブを実際にデータベースとして活用できるものにするために、メタデータ（電子化した個別のデータについてのデータ）の構築に着手した。

■ 電子化済イベント件数

女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代に開催されたイベントの記録は、主にカセットテープに録音された音声である。そのほかに、写真（ネガフィルムと紙焼き）と、印刷物や手書きの資料・記録等の紙媒体の史料が残されている。2017 年度以来これらアナログデータの調査を進め、バラバラに保管されていた史料を過去の彙報などを参考に整理していく作業と、それと並行して個別のアナログデータをデジタルデータへと変換する電子化作業を進めてきた。2022 年 12 月現在の電子化済イベント件数は【表 1】の通りである。

【表 1】電子化済イベント件数（※1,2）

時期（年度）	組織名	イベント件数	電子化済イベント件数			
			ドキュメント（PDF）	画像（JPEG）	音声（mp3）	動画（mp4）
1975-1985	女性文化資料館	75			54	
1986-1995	女性文化研究センター	137	1	23	85	
1996-2014	ジェンダー研究センター	211	4	91	101	37
2015-2021	ジェンダー研究所	130	130	130	100	30
合計		553	135	244	340	67

※1）現在も調査中のため、イベント件数は今後増える見込

※2）女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代のイベント一覧は本報告書 105〜109 頁参照

■ メタデータの構築

「IGS デジタルアーカイブ」をデータベースとして活用できるように、メタデータの構築に着手した。電子化した個別のイベントが、どのようなテーマで企画開催されたものであるのかを端的に明らかにするために、メタデータのカテゴリーのひとつとして「テーマ領域」を設定することとした。将来、ジェンダーの研究者がデータベースを検索する際の利便性を考慮し、電子化済イベントのテーマ領域を順次分類していく予定である。

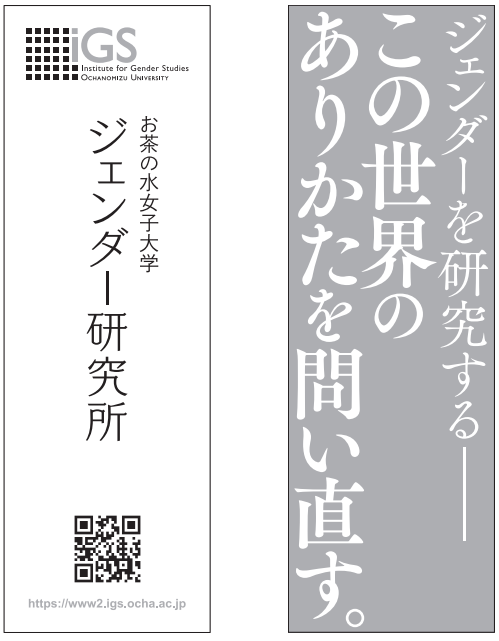
3）ウェブサイト等での情報発信

ウェブサイト全体の情報整理に加え、栞を制作

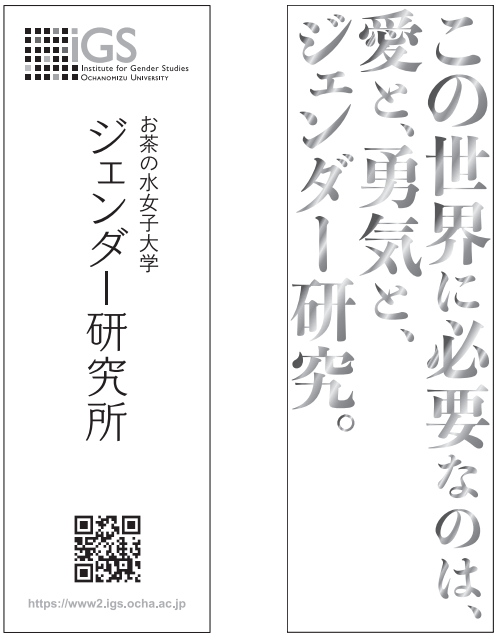
昨年度に引き続き 2022 年度は、ウェブサイト全体の情報整理と英語発信の強化を進めた。日本語ページは、『AIT 国際交流ワークショップ 20 周年記念報告書』の発行に伴い、「AIT 国際交流ワークショップ・プログラム」の特設ページを作成した。トップページにバナーを用意し、国際交流事業の情報・成果へ辿り着きやすいよう整備を進めた。英語ページでは、不足していたイベント情報や開催報告の掲載作業を行なった。さらに、イベント情報の配信に特化したメーリングリストの作成や、Twitter によるイベント告知・リマインド、YouTube によるシンポジウムのオンデマンド配信等、ソーシャルメディアを利用した情報発信に注力した。

今後は研究プロジェクトページの整備を進め、所属研究者が進める研究プロジェクトと、国際研究ネットワーク、開催イベントなどの事業、IGS Project Series 等の成果物とが相互リンクの形で閲覧できるよう工夫を重ねる所存である。

このほか 2022 年度は、初の試みとして栞を 2 種（A・B）制作した。栞 A・B それぞれの表面にはウェブサイトの QR コードを記載し、裏面にはジェンダー研究所のキャッチコピーを記載した。ジェンダー研究所の広報メディアと位置づけ、ジェンダー研究所の存在と事業内容を知ってもらうとともに、ジェンダーの研究そのものにも興味関心を持ってもらうきっかけとなることを目指し、国際シンポジウムなど IGS 主催のイベントの参加者や、本学大学院新入生や学部生、IGS を訪れる研究者やメディア関係者らに広く配布する。



栞 A（表・裏）



栞 B（表・裏）

栞デザイン：塩飽 晴海

栞カラー写真は本報告書 13 頁参照

8. 社会貢献

▶社会貢献概要

ジェンダー研究所所属研究者は、行政機関が開催する男女共同参画関連講座の講師を担当したり、メディアの専門家取材に応じるなど、研究成果の社会還元に取り組んでいる。2022 年度もオンラインならびに対面の講演会での講演や各種メディアの取材対応など、ジェンダー研究の成果を積極的に発信した。

■海外機関招聘講演等

申琪榮（教授）

- コンラードアデナウアー財団　Asian Women Parliamentarian Caucus Meeting,　Substantive Representation of Women by Parliamentarians in Asia—A Comparative Study 出版記念ワークショップ、報告及びパネルモデレーター
- 韓国慰安婦問題研究所　2022 年専門家フォーラム「日本軍慰安婦問題の問題化――共存への模索」第 2 部ラウンドテーブル「日本軍慰安婦「問題」は民主主義」パネリスト、2022 年 8 月 29 日
- アメリカ政治学会主催　Asia and Pacific Political Science Research and Publication Conference メンター及びコメンテーター、バンコク、2022 年 7 月 21～24 日
- 韓国ジェンダー法学会・ジェンダー政治研究所主催、第 29 回ジェンダー法ブランチ「ヨイド MeToo――政治領域の構造的特徴とヒエラルキを超える」パネリスト、2022 年 5 月 27 日

■ 他大学や研究機関での講演等

申琪榮（教授）

- 岩手大学　文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアチブ（女性リーダー育成型）事業「I.W.A.T.E. 1 in 3 女性リーダー職倍増プラン」キックオフシンポジウム基調講演「グローバルな視座から見た日本のダイバーシティ推進と女性リーダー育成の課題」、2023 年 3 月 13 日
- 上智大学　プロフェショナル・スタディーズ　講座、2022 年 11 月 28 日
- 慶應大学　国際ワークショップ「Gender and Political Representation in Asia and Beyond」、コメンテーター、2022 年 11 月 25～26 日
- 池田緑　基盤研究 B『経験的概念としての「ポジショナリティ」の発展的研究』研究会　招聘報告 2022 年 6 月 11 日
- 立教大学　Modern Japanese History ゲスト講義（英語）「Women in Japanese Politics: A Comparative Perspective」、2022 年 6 月 10 日

大橋史恵（准教授）

- 東京女子大学大学院 人間科学研究科 人間社会科学専攻 グローバル共生社会分野主催　東京女子大学大学院セミナー「ジェンダー視点による現代中国研究の動向」、2022 年 10 月 21 日

■ 男女共同参画センターや NPO 法人等での講演

申琪榮（教授）

- 島根県立男女共同参画センターあすてらす、あすてらす国際女性ウィーク基調講演「女性議員はなぜ増えない？どう増やす？～諸外国の取り組みから学ぶ政治分野における男女共同参画～」、2023 年 3 月 3 日
- 福岡市男女共同参画推進センター・アミカス「政治分野における男女共同参画について～多様な声を政治に届けて暮らしを豊かに～」、2022 年 12 月 17 日
- After MeToo 上映会　ゲストトーク、福島市、2022 年 11 月 12 日

・ 唐津市男女共同参画ネットワーク“レゾナ“　第 28 回唐津市男女共同参画推進フォーム、２回フォーラム「生活者目線で考えよう　政治と地域の課題」、2022 年 10 月 8 日

・ 働く女性の人権センターいこ☆る　夏の講座　「オジサン政治を終わらせるために〜パリテ実現に向けて、今、私たちにできること」、2022 年 7 月 31 日

・ 台東区立男女平等推進プラザ「はばたき２１」主催　男女平等参画推進講座「もっと知ろう政治のこと〜女性が参加するとこう変わる〜」、2022 年 7 月 30 日

・ もりおか女性センター「男女共同参画週間もりおか展 2022」基調講演「“私”の Voice から“私”の Life へ〜なぜ女性の政治参画が必要なのか〜」、2022 年 6 月 18 日

本山央子（特任リサーチフェロー）

・ NPO 法人ピースデポ「第 8 回脱軍備・平和基礎講座」講演「フェミニスト平和研究が問うてきたもの」2022 年 12 月 17 日

■ 地方公共団体男女共同参画事業への参与

申琪榮（教授）

・ 兵庫県明石市「ジェンダー平等の実現に関する検討会」委員（2021 年 12 月〜2022 年 6 月）

■ NPO 事業への参与

申琪榮（教授）

・ 女性政治リーダーを養成する一般社団法人「パリテ・アカデミー」（Academy for Gender Parity）共同代表。一般向けオンライン講座や講演会を企画・開催。

■ 新聞等記事へのコメント提供ほか

申琪榮（教授）

・『NEWS PICKS』2022 年 4 月 18 日「【新図解】日本が韓国に抜かれたこと、抜かれてないこと」

・『毎日新聞』2022 年 4 月 29 日「論点 フェミニズムの現在地「韓国、若年女性が政治に」」

・『東京新聞』『中日新聞』2022 年 4 月 29 日「特報部　候補者は外見で選ばれている？」

・『ふぇみん』No.3320（2022 年 5 月 25 日）「●申琪榮さんに聞く　韓国大統領選挙と日本の次の参議院選挙　もう女性たちの声は無視できない」

・『朝日新聞』2022 年 6 月 1 日「政治の世界 知ることから」

・ TBS ラジオ『荻上チキ・Session』2022 年 6 月 22 日「荻上チキ・Session_特集「参議院選挙がきょう公示。女性と若者の政治参加のためにいま、何が必要か」能條桃子×申琪榮×荻上チキ」
https://www.tbsradio.jp/articles/56005/

・『西日本新聞』2022 年 7 月 12 日「「議場に女性を」道半ば」

・『東京新聞』2022 年 7 月 12 日（1 面）「女性当選 35 人 過去最多　全体で 4 分の 1 止まり」

・『東京新聞』2022 年 7 月 12 日（3 面）「候補者内の女性割合≒当選者内の女性割合　各党で傾向　女性議員像へのヒント」

・ TBS ラジオ『荻上チキ・Session』2022 年 7 月 14 日「【音声配信】特集「参院選をきっかけに改めて考える女性の政治参画」三浦まり×申きよん×永田夏来×荻上チキ×南部広美」
https://www.tbsradio.jp/articles/56865/

・『日本経済新聞』2022 年 7 月 18 日「参院選、女性当選者数が過去最多」

・『f visions』no.5（2022 年 7 月号）2022 年 7 月 20 日「政治にうんざりしている場合じゃない私たち〜日本と韓国の選挙から考える」

・『PRESIDENT Online』2022 年 7 月 28 日「韓国に大差をつけられ 116 位…日本のジェンダーギャップが「12 年前のレベルに"後退"した」ワケ：「外国が頑張っているから遅れて見えるだけ」はウソだった」 https://president.jp/articles/-/59839

・『PRESIDENT WOMEN Online』2022 年 7 月 28 日「韓国に大差をつけられ 116 位…日本のジェンダーギャップが「12 年前のレベルに"後退"した」ワケ：「外国が頑張っているから遅れて見えるだけ」はウソだった」 https://president.jp/articles/-/59983

・テレビ朝日『テレメンタリー2022（Youtube）』2022 年 7 月 30 日「「女性議員が増えない国で」オトコ社会の選挙に挑んだ記録〜「ママでもできる」つらぬいた」（インタビュー） https://www.youtube.com/watch?v=Aneney6B6Sk

・『Christian Sciencs Monitor』2022 年 8 月 23 日「Female candidates_ Japanese women push to change political landscape」

・『日本経済新聞 電子版』2022 年 8 月 29 日「欧米政権で女性要職相次ぐ」 https://www.nikkei.com/article/DGKKZO63773680W2A820C2TY5000/

・『中日新聞』2022 年 9 月 4 日「増えない女性議員 クオータ制 議論進むか」 https://www.chunichi.co.jp/article/539008

・『東京新聞』2022 年 10 月 17 日「子育てしながら地方議員目指す母親、応援します　統一地方選の立候補者募集、ボランティアも」https://www.tokyo-np.co.jp/article/208677

・『The Japan Times』2022 年 10 月 17 日「Project aims to help mothers run in Japan's local elections next year」 https://www.japantimes.co.jp/news/2022/10/17/national/politics-diplomacy/mothers-local-elections-support-project/

・『働く女性の情報誌　いこ★る』vol.66（2022 年 10 月号）「いこ☆る夏の講座「オジサン政治を終わらせるために」〜パリテ実現に向けて、今、私たちにできること（講義録）」

・『共同通信 東京五輪評論集 識者・記者の視点』2022 年 10 月「視標「森会長辞任」男性政治家自らが変革を　急がれるクオータ制導入」

・『AfterMeToo 上映会@福島パンフ』2022 年 11 月 11 日「映画「AfterMeToo」との出会い」

・『日本経済新聞　電子版』2023 年 1 月 9 日「Z 世代の女性、政治参画広がる「私も誰かの希望に」」 https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD091RU0Z01C22A2000000/

・『信濃毎日新聞』2023 年 1 月 22 日「女性議員増へ どう「壁」解消」 https://www.shinmai.co.jp/news/article/CNTS2023012100816

・『共同通信』『愛媛新聞』『静岡新聞』『信濃毎日新聞』『福島民友』『福井新聞』『山梨日日新聞』『茨城新聞』『山口新聞』ほか 2023 年 3 月 4 日「都道府県議会調査 ハラスメント独自対策 3 割」

・『中国新聞 SELECT』2023 年 3 月 7 日「女性の政治進出　冷淡？地方議会」

・『The Japan Times』2023 年 3 月 8 日「Would gender quotas for lawmakers work in Japan」 https://www.japantimes.co.jp/news/2023/03/08/national/social-issues/gender-equality-politics-quotas/

・『東京新聞』2023 年 3 月 31 日「子育て選挙　託児の壁」https://www.tokyo-np.co.jp/article/241182

資料

① 構成メンバー
② 研究プロジェクト一覧
③ 協力研究者一覧
④ シンポジウム・セミナー一覧
⑤ 寄贈図書一覧
⑥ 電子化イベント一覧
⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則
⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定
⑨ ジェンダー研究所ウェブサイトプライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

［所長］	**《任期》**
戸谷陽子（基幹研究院人文科学系・文教育学部教授）	2021（R3）年4月1日～2023（R5）年3月31日
［専任教員］	
申琪榮（ジェンダー研究所教授）	2015（H27）年4月1日～
大橋史恵（ジェンダー研究所准教授）	2018（H30）年9月1日～
［学内研究員］	
棚橋訓（基幹研究院人間科学系・文教育学部教授）	2021（R3）年4月1日～2023（R5）年3月31日
小玉亮子（基幹研究院人間科学系・文教育学部教授）	2021（R3）年4月1日～2023（R5）年3月31日
斎藤悦子（基幹研究院人間科学系・生活科学部教授）	2021（R3）年4月1日～2023（R5）年3月31日
石丸径一郎（基幹研究院人間科学系・生活科学部准教授）	2021（R3）年4月1日～2023（R5）年3月31日
［特任講師］	
嶽本新奈	2022（R4）年5月1日～2023（R5）年3月31日
［特任リサーチフェロー］	
本山央子	2022（R4）年8月1日～2023（R5）年3月31日
［特任アソシエイトフェロー］	
黒岩漠	2022（R4）年5月1日～2023（R5）年3月31日
［アカデミック・アシスタント］	
稲垣明子	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
梅田由紀子	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
関根里奈子	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
滝美香	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
和田容子	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
［客員研究員］	
足立眞理子（お茶の水女子大学名誉教授）	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
［研究協力員］	
板井広明（専修大学経済学部准教授）	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
佐野潤子（慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師）	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
平野恵子（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授）	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
仙波由加里	2022（R4）年4月1日～2023（R5）年3月31日
ルセッタ・カム（香港浸會大学文学院准教授）	2022（R4）年10月11日～2023（R5）年1月7日



所長 戸谷 陽子

基幹研究院人文科学系・教授
文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース
博士前期課程比較社会文化学専攻英語圏・仏語圏文化学コース
博士後期課程比較社会文化学専攻言語文化論領域

専門分野: 舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、文化政策、比較演劇論

所属学会等

日本英文学会（編集委員）
日本アメリカ文学会（東京支部評議員・編集委員）
日本アメリカ演劇学会（評議員）
日本アメリカ学会
独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（学位審査会専門委員）

主な業績

《書評》

大島一芳著『ヘンリー・ジェイムズとその時代―アイルランド、アメリカ、そしてイギリスへ』、『アメリカ文学研究』第 59 号（日文号）所収 p.79

《競争的資金》

- 科学研究費基盤研究 C（課題番号：20K00385）「米国舞台・表象空間における日本人ストックキャラクターの系譜と展開」、2020 年度～2023 年度、研究代表者
- 科学研究費基盤研究 C（課題番号：16K02483）「米国舞台芸術の理論と実践におけるサブジャンルの成立と発展―人形・仮面・演じる物体」、2016 年度～2022 年度、研究代表者



専任教員（教授）申　琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻（専攻長）ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻
生活科学部生活社会科学講座

専門分野：ジェンダーと政治、比較政治学（東アジア）、フェミニズム理論、＃MeToo、クオータ制、男女共同参画政策

所属学会等 International Political Science Association, American Political Science Association
European Conference on Gender and Politics, International Association for Feminist Economics
日本政治学会、日本比較政治学会、日本社会政策学会、日本フェミニスト経済学会、
「女性・戦争・人権」学会（運営委員）
ソウル大学日本研究所『日本批評』、西江大学社会科学研究所『社会科学研究』、
釜山大学女性学研究所『女性学研究』、イギリス政治学会『Politics』編集委員
『ジェンダー研究』編集長
韓国女性政策研究院　Visiting Scholar (2022 年 9 月)

主な業績

《論文、書評等》

申琪榮、2023.「半分の成功――韓国のクオータ制からの示唆」、『学術の動向』28(2)、48-52.

Shin, Ki-young and Soo Hyun Kwon. 2023. “It’s Money that Matters in the End: The Impact of Gender-targeted Public Funding on Political Parties and Women Candidates in South Korea.” *International Political Science Review* 44 (1): 91-106 (doi.org/10.1177/01925121221078232 First published May 10, 2022).

申琪榮・濱田真里、2023.「子育て中の女性候補者が直面する選挙運動の壁」、『都市問題』Vol. 114 January. 12-21.

申琪榮、2022.「社会的再生産理論（SRT）を手かがりに読み解くコロナ禍」、年報政治学 2022-I 号: 35-52.

申きよん、2022.「オジサン政治を終わらせるために〜パリテ実現に向けて、今、私たちにできること〜」、働く女性の情報誌『いこ☆る』Vol .66（10 月号）. 2-11.

申きよん、2022.「女性候補者の「育ち」を支援する試み」、月刊『地方議会人』12 月号（53(7)）. 12-13.

申きよん、2022.「前進するフェミニズム：韓国と日本におけるソーシャルメディアとアクティヴィズム」」、『シモーヌ』Vol. 6. 63-67.

申琪榮、2022. 書評「私は男でフェミニストです」、『MOVING』Vol. 97: 10

《共著書》

Substantive Representation of Women in Asian Parliaments. 2022. “Ch. 3 Substantive Representation of Women in Korean Legislature,” 50-69. Routledge.

《Online 記事寄稿》

「제 20 회통일지방선거를 맞아」『IJS Japan Review』제 7 호. (2023.02.08) 서울대학교　일본연구소
https://ijs.snu.ac.kr/social_contributions/IJS_Japan_Review?mode=view&reviewidx=10

『PRESIDENTOnline』2022 年 7 月 28 日「韓国に大差をつけられ 116 位…日本のジェンダーギャップが「12 年前のレベルに"後退"した」ワケ：「外国が頑張っているから遅れて見えるだけ」はウソだった」
https://president.jp/articles/-/59839

『PRESIDENT WOMEN Online』2022 年 7 月 28 日「韓国に大差をつけられ 116 位…日本のジェンダーギャップが「12 年前のレベルに"後退"した」ワケ:「外国が頑張っているから遅れて見えるだけ」はウソだった」https://president.jp/articles/-/59983

《学会報告》

申琪榮、「若手女性政治リーダー養成の試みーパリテ・アカデミーの5年間の実績から見えてきたもの」日本地方政治学会・日本地域政治学会 2022 年 12 月 4 日(長野県立大学)

申琪榮、日本フェミニスト経済学会 共通論題報告、「政治権力はどのように再生産されるのか――政治資本としてのイエ」、2022 年7月 9 日(早稲田大学)

《海外招待講演等》

- 岩手大学 文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアチブ(女性リーダー育成型)事業「I.W.A.T.E. 1in 3 女性リーダー職倍増プラン」キックオフシンポジウム基調講演「グローバルな視座から見た日本のダイバーシティ推進と女性リーダー育成の課題」、2023 年 3 月 13 日
- コンラードアデナウアー財団 Asian Women Parliamentarian Caucus Meeting, Substantive Representation of Women by Parliamentarians in Asia—A Comparative Study 出版記念ワークショップ、報告及びパネルモデレーター
- 韓国慰安婦問題研究所 2022 年専門家フォーラム「日本軍慰安婦問題の問題化――共存への模索」第2部ラウンドテーブル「日本軍慰安婦「問題」は民主主義」パネリスト、2022 年 8 月 29 日
- アメリカ政治学会主催 Asia and Pacific Political Science Research and Publication Conference メンター及びコメンテーター、バンコク、2022 年 7 月 21～24 日
- 韓国ジェンダー法学会・ジェンダー政治研究所主催、第 29 回ジェンダー法ブランチ「ヨイド MeToo――政治領域の構造的特徴とヒエラルキを超える」パネリスト、2022 年 5 月 27 日

《他大学、研究会講演》

- 上智大学 プロフェショナル・スタディーズ 講座、2022 年 11 月 28 日
- 慶應大学 国際ワークショップ「Gender and Political Representation in Asia and Beyond」、コメンテーター、2022 年 25～26 日
- 池田緑 基盤研究 B『経験的概念としての「ポジショナリティ」の発展的研究』研究会 招聘報告 2022 年 6 月 11 日
- 立教大学 Modern Japanese History ゲスト講義(英語)「Women in Japanese Politics: A Comparative Perspective」、2022 年 6 月 10 日

《競争的資金》

- 科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K12604)「ジェンダークオータの政治学―制度化と抵抗」、2019～2022 年度、研究代表者
- 科学研究費基盤研究 B(課題番号:18H00817)「女性の政治参画の障壁:国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査」、2018～2022 年度(研究代表者:三浦まり・上智大学)、研究分担者

《企画運営国際シンポジウム》

- 国際シンポジウム『リプロダクティブ・ジャスティス――妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く』、2022 年 12 月 20 日(本報告書 27 頁)
- 国際シンポジウム『東アジアにおけるジェンダーと政治代表:Gender and Political Representation in East Asia』、上智大学 2023 年 1 月 13 日(本報告書 47 頁)



専任教員（准教授）大橋　史恵

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻　ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻　開発・ジェンダー論コース
文教育学部グローバル文化学環

専門分野：ジェンダー研究、国際社会学、中国地域研究

所属学会等　International Association for Feminist Economics
日本社会学会
関東社会学会
日本フェミニスト経済学会（幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集長）
ジェンダー史学会
現代中国学会
中国女性史研究会
経済理論学会分野別ジェンダー分科会

主な業績

《著書・論文》

2022 “Social reproduction process in colonial Hong Kong: The shifting gender relations of the intra-east Asian economy” The Japanese Political Economy, 2022, vol. 48, issue 2-4, 129-148.

2022「『個人的なことはグローバルなこと』──国境を越える分業の再編とジェンダー」、千田有紀・菊池英明編著『グローバリゼーションと変わりゆく社会』、北樹出版、2022 年, pp.94-108。

《学会報告》

2022「香港社会の家事労働者と使用者──住み込みの「外籍傭工」と通いの「家務助理」の差異をめぐって──」、国際ジェンダー学会大会シンポジウム「家事・ケアサービス、使う側の責任を考える　市場経済化に抗する運動の可能性」、2022 年 9 月 2 日

《競争的資金》

- 科学研究費基盤研究 B（課題番号：20H01468）「新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー」、2020～2022 年度（研究代表者：堀芳枝・早稲田大学）、研究分担者
- 科学研究費基盤研究 B（課題番号：19H01578）「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」、2019 年度～2022 年度（研究代表者：定松文・恵泉女学園大学）、研究分担者
- 科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603）「香港における移住女性の再生産労働力配置──「グローバル・シティ」のジェンダー分析」、2019 年度～2022 年度、研究代表者
- 科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033）「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」、2021～2024 年度、研究分担者



特任講師 嶽本 新奈

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース

専門分野:歴史学、歴史社会学、ジェンダー研究

所属学会等 ジェンダー史学会
総合女性史学会
歴史科学協議会
女性・戦争・人権学会
社会学研究会
日本フェミニスト経済学会

【担当業務】

- 研究プロジェクト「性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析」(19 頁参照)／「『からゆきさん』にみる移動・性・権力の諸相」(22 頁参照)
- IGS セミナー 「日本(と世界)における性的マイノリティの政治」企画・コーディネーター・司会(35 頁参照)／「『棄民』を記録する:今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973)再考」企画・コーディネーター・司会(39 頁参照)／「家電と暮らしのポリティクス」司会(41 頁参照)
- IGS 国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」運営担当(27 頁参照)
- IGS-AIT 交流事業:「AIT ワークショップ報告会」企画・コーディネーター・司会(63 頁参照)／IGS-AIT 交流事業:『2022 年度 AIT ワークショップ実施報告書』編集担当(63 頁参照)
- 担当セミナーのウェブサイト用報告書(各日本語・英語)の翻訳・監修
- 『ジェンダー研究』編集スタッフ(68 頁参照)。主に特集、一般投稿論文担当。ほか『ジェンダー研究』編集刊行業務全般の統括。
- IGS 研究協力員研究報告会、企画・コーディネーター・司会(45 頁参照)ならびにウェブサイト用報告原稿作成。

主な業績

《著書・論文》

2022 「シベリア地域の『からゆきさん』と現地の人的繋がり――尼港事件「殉難碑」再考」『研究叢書』釜慶大学人文韓国プラス(HK+)事業団(招待有)
2022 「『からゆきさん』再読――『生まない女』に着目して」『現代思想 臨時増刊号 総特集 森崎和江』青土社, 50(13): 332-341.(招待有)
2022 「優生思想と『純潔／純血』イデオロギー――海外日本人娼婦をめぐる廃娼運動の言説」『シモーヌ 生と性共存するフェミニズム』現代書館, 7: 50-57.(招待有)

《学会報告・講演》

2022 国内研究会:「『恐るべきエネルギー公害 石炭火電の環境問題 天草環境会議報告集』から読み解く住民運動の葛藤と職業的研究者の距離」、反公害／環境運動研究会、第 1 回例会、2022 年 5 月 14 日(オンライン)
2022 国内研究会:「森崎和江にとっての『エロス』」、森崎和江研究会、第 5 回・「森崎和江と『闘いとエロス』を読み継ぐ」シンポジウム、2022 年 7 月 30 日(大阪大学)
2022 国際研究会講演:「北東アジア地域の『からゆきさん』とその交流」、東亜大学ジェンダー・アフェクト研究所講演、2022 年 11 月 17 日(オンライン)
2022 国内学会:「ある『からゆきさん』の語りからみる女性の経験」、ジェンダー史学会、第 19 回ジェンダー史学会年次大会「グローバル・ヒストリーとジェンダー」大会シンポジウム、2022 年 12 月 11 日(立教大学)

《他大学講演》

2022 明治学院大学 「現代平和研究 2」 ゲスト講義 10 月 18 日
2023 福岡女子大学「国際社会とジェンダー」ゲスト講義 1 月 6 日

《競争的資金》

- 科学研究費若手研究 B(課題番号:17K13298)「『からゆきさん』にみる移動・性・権力の諸相」、2017 年～2022 年度、研究代表者



特任リサーチフェロー 本山 央子

専門分野：ジェンダー研究、フェミニスト国際関係・国際政治経済学

所属学会等 日本平和学会
日本政治学会
国際政治学会
国際ジェンダー学会
日本フェミニスト経済学会

【担当業務】

・研究プロジェクト「グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー」（19 頁参照）

・『ジェンダー研究』26 号特集国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」開催コーディネーション・司会（27 頁参照）

・『ジェンダー研究』25・26 号編集（68 頁参照）

・海外からの問合対応

主な業績

《著書・論文》

2022 “Has Japanese Foreign Policy Become Feminist Too? An Analysis of the ‘Women Shine’ Foreign Policy of the 2nd Abe Administration’”, Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University, Vol.4: 1-17. Ritsumeikan University（査読有）

2022 「社会的再生産とジェンダー」『ジェンダー史学』18 号、pp.69-73、

2022 ジェンダー史学会「有償家事労働の位相から「家政」を考える」『現代思想』青土社, 50(2): 79-88.（招待有）

《他大学講演》

2022 明治学院大学国際平和研究所赤十字講座 講師 12 月 9 日

●学内研究員



学内研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授
文教育学部人間社会科学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程 比較社会文化学専攻
人間文化創成科学研究科 博士前期課程 ジェンダー社会科学専攻

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、セクシュアリティ研究

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー



学内研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系・教授
文教育学部人間社会科学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程 人間発達科学専攻
人間文化創成科学研究科 博士前期課程 人間発達科学専攻

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー
国際共同プロジェクト INTPART



学内研究員 斎藤 悦子

基幹研究院人間科学系・教授
生活科学部人間生活学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程 ジェンダー学際研究専攻
人間文化創成科学研究科 博士前期課程 ジェンダー社会科学専攻

専門分野: 生活経済学、生活経営学、企業文化論

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー



学内研究員 石丸 径一郎

基幹研究院人間科学系・准教授
生活科学部心理学科
人間文化創成科学研究科 博士後期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学領域
人間文化創成科学研究科 博士前期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学コース

専門分野: ジェンダー心理学、認知行動療法

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー
『ジェンダー研究』編集委員

●客員研究員



客員研究員 足立 眞理子

（本学名誉教授）

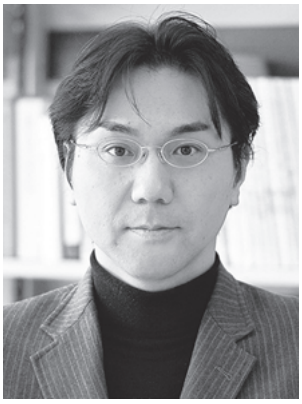
委嘱期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー（科学研究費基盤研究 B　課題番号：20H01468）

資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々

●研究協力員



研究協力員 板井 広明

（専修大学経済学部准教授）

委嘱期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

資本と身体のジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々



研究協力員 平野　恵子

（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院　准教授）

委嘱期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯（科学研究費基盤研究 B　課題番号：19H01578）



研究協力員 佐野 潤子

（慶応義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師）

委嘱期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

ノルウェーリサーチカウンシル INTPART「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」

●研究協力員



研究協力員 仙波　由加里

（一般社団法人ドナーリンク・ジャパン）

委嘱期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究プロジェクトタイトル

ノルウェーリサーチカウンシル INTPART「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」



研究協力員 ルセッタ・カム

（香港浸會大学文学院准教授）

委嘱期間：2022 年 10 月 11 日～2023 年 1 月 7 日

研究プロジェクトタイトル

Queer mobility and migration; queer popular culture in East Asia

●特任アソシエイトフェロー



特任アソシエイトフェロー 黒岩　漠

主担当業務：ジェンダー研究所事務局統括

- ジェンダー研究所全体予算管理
- 『ジェンダー研究』編集員
- 国際シンポジウム等運営
- 各種報告書・データ作成　ほか



アカデミック・アシスタント 稲垣 明子

主担当業務:シンポジウム等運営関連

- AIT ワークショップ事務
- 研究所事業事務(大学本部各種調査対応含む)
- 会計事務
- IGS 史料電子化作業
- 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主担当業務:文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理関連

- IGS 史料電子化プロジェクト電子化作業管理
- 研究所事業事務
- シンポジウム等運営事務
- 会計事務
- 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 関根 里奈子

主担当業務:広報・情報機器管理

- ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成
- オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- 情報機器・ネットワーク管理 IGS ウェブサイト運営技術担当、情報更新作業 ほか



アカデミック・アシスタント 滝 美香

主担当業務:会計事務関連

- 研究所事業事務
- シンポジウム等運営事務
- IGS 史料電子化作業
- 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 和田 容子

主担当業務:成果発信関連

- 年次事業報告書編集
- 『ジェンダー研究』編集員
- 成果発信日本語原稿校閲
- 栞・リーフレット企画制作
- 会計事務
- 研究所事業事務補佐 ほか

【資料】② 2022 年度研究プロジェクト一覧

1）IGS 研究プロジェクト

プロジェクト名	担当
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
「東アジアの越境的女性運動」研究	大橋
資本と身体のジェンダー分析	大橋・足立・板井
性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山

2）外部資金による研究プロジェクト

プロジェクト名称	期間（年度）	担当
科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817） 女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査	2018～2022	申 （分担者）
科学研究費基盤研究 B（課題番号：20H01468） 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー	2020～2022	大橋 足立 （分担者）
科学研究費基盤研究 B（課題番号：19H01578） 再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯	2019～2022	大橋 平野 （分担者）
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12604） ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗	2019～2022	申
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603） 香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析	2019～2023	大橋
科学研究費若手研究 B（課題番号：17K13298） 「からゆきさん」にみる移動・性・権力の諸相	2017～2022	嶽本
科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033） 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー	2021～2024	大橋 （分担者）

3）海外の助成金によるプロジェクト

①ノルウェーリサーチカウンシル INTPART（戸谷・小玉・仙波・佐野）2019～2022 年度

②ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK（戸谷）2021 年 8 月～2025 年 7 月

【資料】③ 協力研究者一覧

氏名・所属	協力事業*	参照
【海外】		
ジャン・バーズレイ （Jan Bardsley） ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
ジェニファー・ブロンラ （Jennifer Branlat） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）	23 頁
	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	（連）INTPART プロジェクト	56 頁
マーシー・ディニウス （Marcy J. Dinius） デポール大学・米	（セ）19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』（1851）を例に	33 頁
ジーン・エンシーナス・フランコ （Jean Encinas-Franco） フィリピン大学・フィリピン	（セ）The Marcos Return : What Does it Mean for the Philippines?	30 頁
ジャン・ロバート・ゴー （Jan Robert Go） フィリピン大学・フィリピン	（セ）The Marcos Return : What Does it Mean for the Philippines?	30 頁
リサ・C・イケモト （Lisa C. Ikemoto） カリフォルニア大学・米	（シ）リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27 頁
ルセッタ・Y・L・カム （Lucetta Y. L. Kam） 香港浸會大学・中国	2022 年度 IGS 研究協力員	93 頁
	（セ）クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ）	37 頁
グロ・コースニス・クリステンセン （Guro Korsenes Kristensen） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）	23 頁
	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	（連）INTPART プロジェクト	56 頁
日下部京子 （Kyoko Kusakabe） アジア工科大学院大学・タイ	（連）AIT ワークショップ	62 頁
エラー・スヤフパトリー・プリハティニー （Ella Syafputri Prihatini） ビナ・ヌサンタラ大学・インドネシア	（セ）The Marcos Return : What Does it Mean for the Philippines?	30 頁
ヘレン・ピーターソン （Helen Peterson） エレブルー大学・スウェーデン	（シ）『ガラスの崖』をよじ登る：『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
プリシラ・リングローズ （Priscilla Ringrose） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）	23 頁
	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	（連）INTPART プロジェクト	56 頁
ミッシェル・ライアン （Michelle Ryan） オーストラリア国立大学	（シ）『ガラスの崖』をよじ登る：『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
カレン・アン・シャイア （Karen Ann Shire） デュースブルグ・エッセン大学・独	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
【海外】		
シリ・エイスレボ・ソレンセン （Siri Øyslebø Sørensen） ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	（国）Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity（NJ_BREGED）	23 頁
	（国）Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	（連）INTPART プロジェクト	56 頁
【国内】		
青山薫 （Kaoru　Aoyama） 神戸大学	（セ）日本（と世界）における性的マイノリティの政治	35 頁
岩本美砂子 （Misako Iwamoto） 元三重大学	（シ）リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27 頁
飯野由里子 （Yuriko Iino） 東京大学	（シ）リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27 頁
岩島史 （Fumi Iwashima） 京都大学	（セ）家電と暮らしのポリティクス	41 頁
片岡佑介 （Yusuke Kataoka） 一橋大学／立教大学ほか	（セ）「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』（1973）再考	39 頁
金井　郁 （Kaoru Kanai） 埼玉大学	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
北原恵 （Megumi Kitahara　） 大阪大学	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
小久保みどり （Midori Kokubo） 立命館大学	（シ）『ガラスの崖』をよじ登る：『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
高谷幸 （Sachi Takaya） 東京大学	（シ）リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27 頁
武内佳代 （Kayo Takeuchi） 日本大学	（セ）クィアする現代日本文学：ケア・動物・語りとジェンダー	43 頁
三浦まり （Mari Miura） 上智大学	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
村瀬敬子 （Keiko Murase） 佛教大学	（セ）家電と暮らしのポリティクス	41 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
【学内】		
石井クンツ昌子 (Masako Ishii-Kuntz) 理事・副学長・グローバル女性リーダー育成研究機構	(シ)『ガラスの崖』をよじ登る:『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	23 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	(連) INTPART プロジェクト	56 頁
小林誠 (Makoto Kobayashi) 基幹研究院人間科学系・グローバルリーダーシップ研究所	(シ)『ガラスの崖』をよじ登る:『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	(連) INTPART プロジェクト	56 頁
天野知香 (Chika Amano) 基幹研究院人文科学系	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
水野勲 (Isao Mizuno) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
森義仁 (Yoshihito Mori) 基幹研究院自然・応用科学系	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
倉光ミナ子 (Minako Kuramitsu) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
石丸径一郎 (Keiichiro Ishimaru) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
松田デレク (Derek Matsuda) 国際教育センター／群馬大学	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	23 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁
	(連) INTPART プロジェクト	56 頁
脇田彩 (Aya Wakita) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	68 頁
宝月理恵 (Rie Hogetsu) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)リプロダクティブ・ジャスティス:妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く	27 頁
岡村利恵 (Rie Okamura) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)『ガラスの崖』をよじ登る:『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁	48 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	23 頁

*（シ）シンポジウム、（セ）セミナー・国際フォーラム、（国）国際共同研究プロジェクト、（連）国際ネットワーク

【資料】④ シンポジウム・セミナーー覧

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催国際シンポジウム		
12/20	国際シンポジウム リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く 【総合司会・趣旨説明】申琪榮（IGS 教授） 【モデレーター】本山央子（IGS 特任リサーチフェロー） 【パネリスト】イケモト・リサ・C（カリフォルニア大学教授） 岩本美砂子（元三重大学教授）） 【コメンテーター】高谷幸（東京大学准教授） 飯野由里子（東京大学大学院特任准教授） 大橋由香子（「SOSHIREN 女（わたし）のからだから」メンバー） 宝月理恵（お茶の水女子大学特任講師） 【主催】ジェンダー研究所 【共催】グローバルリーダーシップ研究所（IGL） 【言語】日英（同時通訳有） 【参加者数】308 名	27 頁
IGS 主催 IGS セミナー		
6/20	The Marcos Return：What Does it Mean for the Philippines? 【講演】Jean Encinas-Franco（フィリピン大学教授） 【ディスカッサント】Jan Robert Go（フィリピン大学准教授） 【モデレーター】Ki-young Shin（IGS 教授） Ella Syafputri Prihatini（ビナ・ヌサンタラ大学講師） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】16 名	30 頁
7/28	フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか 【司会】小嶋里菜（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻） 花岡奈央（お茶の水女子大学大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）） 【ゲスト】山田亜紀子（雑誌『シモーヌ』編集者） 【主催】ジェンダー研究所、「フェミニズム理論の争点」ゼミ 【言語】日本語 【参加者数】21 名	31 頁
7/29	19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論：ソジャーナ・トゥルース女性会議講演『わたしは女ではないのか？』（1851）を例に 【司会】戸谷陽子（IGS 所長） 【講演】マーシー・ディニウス（デポール大学准教授／フルブライト招聘教員） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日英（同時通訳有） 【参加者数】52 名	33 頁
11/9	日本（と世界）における性的マイノリティの政治 【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師） 【講師】青山薫（神戸大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】18 名	35 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
12/9	クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性（モビリティ） A Queer Exit or a New Queer/Homo-normativity?: Transnational Mobility of Queer Chinese Women from China and Hong Kong 【司会】大橋史恵（IGS 准教授） 【報告】ルセッタ・カム（香港浸會大学文学院准教授／2022 年度 IGS 研究協力員） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】25 名	37 頁
2/17	「棄民」を記録する：今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』（1973）再考 【司会】大橋史恵（IGS 准教授） 【報告】片岡佑介（一橋大学ほか非常勤講師／立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託員） 嶽本新奈（IGS 特任講師） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】63 名	39 頁
3/13	家電と暮らしのポリティクス 【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師） 【報告】村瀬敬子（佛教大学社会学部教授） 岩島史（京都大学大学院経済学研究科講師） 【ディスカッサント】大橋史恵（IGS 准教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】99 名	41 頁
3/20	クィアする現代日本文学：ケア・動物・語りとジェンダー 【司会】戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授） 【報告】武内佳代（日本大学教授） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】116 名	43 頁
IGS 主催 IGS 研究会		
3/17	IGS 研究協力員研究報告会 【司会】嶽本新奈（IGS 特任講師） 【挨拶・コメント】戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授） 【報告】板井広明（専修大学准教授／IGS 研究協力員） 仙波由加里（ドナーリンク・ジャパン／IGS 研究協力員） 平野恵子（横浜国立大学准教授／IGS 研究協力員） 佐野潤子（慶応義塾大学特任講師／IGS 研究協力員） 【主催】ジェンダー研究所 【言語】日本語 【参加者数】15 名	45 頁

IGS 共催国際シンポジウム

1/13 国際シンポジウム〔「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクト〕 47 頁

東アジアにおけるジェンダーと政治代表

【報告】Ki-young Shin, Ochanomizu University
Chang-ling Huang, National Taiwan University
Jackie Steele, enjoy Japan K.K.
Wan-ying Yang, National Chengchi University
Soo Hyun Kwon, Korea Women's Political Solidarity
Mari Miura, Sophia University
Kenneth Mori McElwain, University of Tokyo
Tomoki Kaneko, University of Tohoku

【ディスカッサント】Sara Childs, University of Edinburgh
Gregory Noble, University of Tohoku

【主催】WONDER Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation

【共催】ジェンダー研究所

【協力】科研費基盤研究 B（18H00817）女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査（代表：三浦まり、分担者：申琪榮）
科研費基盤研究 C（19K12604）ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗（代表：申琪榮）

【言語】英語

グローバル女性リーダー育成研究機構主催 国際シンポジウム

12/23 国際シンポジウム〔ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同〕 48 頁

『ガラスの崖』をよじ登る：『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない障壁

【開会挨拶】戸谷陽子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）

【登壇者紹介】小林誠（お茶の水女子大学教授・グローバルリーダーシップ研究所長）

【発表】ミッシェル・ライアン（オーストラリア国立大学教授）
小久保みどり（立命館大学教授）
ヘレン・ピーターソン（エレブルー大学（スウェーデン） 教授）

【コメント】岡村利恵（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所 特任講師）

【閉会の挨拶】石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）

【司会】大橋史恵（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）

【主催】お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
〔ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同〕

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】121 名

IGS 後援

7/9 日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会 49 頁

共通論題

フェミニスト経済学からみた政治・権力：家父長的世帯主義批判

【座長】大橋史恵（お茶の水女子大学）／板井広明（専修大学）

【報告】藤原千沙（法政大学）／申琪榮（お茶の水女子大学）／
キム・イルジュ（早稲田大学）／清水奈名子（宇都宮大学）

【討論】足立眞理子（お茶の水女子大学）／金井郁（埼玉大学／
小ヶ谷千穂（フェリス女学院大学）／落合絵美（岐阜大学）

【主催】日本フェミニスト経済学会

【共催】早稲田大学平和学研究所

【後援】お茶の水女子大学ジェンダー研究所、早稲田大学ジェンダー研究所

【資料】⑤ 2022 年度新規収蔵図書・資料（2023 年 3 月現在）

・2022 年度、寄贈により以下の書籍が新規収蔵された。［寄贈者名『書名』（著者名）］（敬称略）

愛知淑徳大学 ジェンダー研究所『ジェンダー・ダイバーシティと教育』（愛知淑徳大学 ジェンダー研究所[編]）／人文書院『バナナ・ビーチ・軍事基地 : 国際政治をジェンダーで読み解く』（シンシア・エンロー[著] ,望戸愛果[訳]）

・2022 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の書籍が新規収蔵された。［『書名』（著者名）］

『Assisted Reproduction Across Borders: Feminist Perspectives on Normalizations, Disruptions and Transmissions 』（Merete Lie and Nina Lykke[編] ）／『Au Pairs' Lives in Global Context: Sisters or Servants?』（Rosie Cox[編]）／『Bad Girls of Japan』（Laura Miller, Jan Bardsley[編]／『Bioethics: Ancient Themes in Contemporary Issues』Mark G. Kuczewski, Ronald Polansky[編]／『Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left』Chelsea Szendi Schieder[著]／『Excursions in Identity: Travel and the Intersection of Place, Gender, and Status in Edo Japan』（Laura Nenzi[著]）／『Family Life in Japan and Germany: Challenges for a Gender-Sensitive Family Policy』（Uta Meier-Gräwe,Miyoko Motozawa, Annette Schad-Seifert[編]） ／『Feminist Methodologies For Critical Researchers: Bridging Differences』（Joey Sprague[著]）／『Gender Equality and Welfare Politics in Scandinavia: The Limits of Political Ambition? 』（Kari Melby , Anna-birte Ravn and Christina Carlsson Wetterberg[編]）／『Going Solo: The Extraordinary Rise and Surprising Appeal of Living Alone』（Eric Klinenberg [著]）／『Henrik Ibsen And the Birth of Modernism: Art, Theatre, Philosophy』（Toril Moi [著]）／『Living Alone: Globalization, Identity and Belonging』（Lynn Jamieson,Roona Simpson[著]）／『Making It in Corporate America』（Diane Smallen-Grob）／『Maiko Masquerade: Crafting Geisha Girlhood in Japan』（Jan Bardsley[著]）／『Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan』（Jan Bardsley, Laura Miller[編]／『Multiculturalism without Culture』（Anne Phillips[著]）／『Paid Migrant Domestic Labour in a Changing Europe: Questions of Gender Equality and Citizenship』（Berit Gullikstad , Guro Korsnes Kristensen and Priscilla Ringrose [編]）／『Politiques de coalition / Politics of Coalition: Penser et se mobiliser avec Judith Butle』（Thinking Collective Action with Judith Butler/Delphine Gardey,Cynthia Kraus(dir./eds.)）／『Racing Romance: Love, Power, and Desire among Asian American/White Couples』（Kumiko Nemoto [著]）／『Sayonara: A Novel』（James A. Michener [著],Steve Berry[序論]／『Substantive Representation of Women in Asian Parliaments』Devin K. Joshi , Christian Echle [編]／『The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko: One Woman's Transit from Tokugawa to Meiji Japan』（Laura Nenzi[著]）／『The Demographic Challenge: A Handbook About Japan』（Florian Coulmas, Harald Conrad,Annette Schad-seifert,Gabriele Vogt [編]）／『Threshold Concepts in Women's and Gender Studies: Ways of Seeing, Thinking, and Knowing』（Christie Launius[著]、Holly Hassel [著]）／『Too Few Women at the Top: The Persistence of Inequality in Japan』（Kumiko Nemoto[著]／『Translation in Modern Japan』（Indra Levy[編]）／『Women and Democracy in Cold War Japan』（Jan Bardsley[著]）／『WOMEN AND POLITICAL INEQUALITY IN JAPAN』（Mikiko Eto）／『Women's Role in Twentieth-Century America』（Martha May）／『Youth Sexualities: Public Feelings and Contemporary Cultural Politics』 volume one/（Susan Talburt [編]）／『Youth Sexualities: Public Feelings and Contemporary Cultural Politics』volume two（Susan Talburt[編]）／『アナーキー・国家・ユートピア : 国家の正当性とその限界』（ロバート・ノージック[著], 嶋津格[訳]）／『アメリカの愛国心とアイデンティティ』（金井光太朗）／『いのちと向き合う看護と倫理 : ケーススタディ : 受精から終末期まで』（エルシー・L. バンドマン,バートラム バンドマン[著]）『失われた賃金を求めて』（イ・ミンギョン[著],小

山内園子, すんみ[訳])／『男らしさの創出 : 古代から啓蒙時代まで(男らしさの歴史;1)』(A・コルバン, J-J・クルティーヌ, G・ヴィガレロ[監修])／『男らしさの勝利 : 19 世紀(男らしさの歴史;2)』(A・コルバン, J-J・クルティーヌ, G・ヴィガレロ[監修])／『男らしさの危機? : 20-21 世紀(男らしさの歴史;3)』(A・コルバン, J-J・クルティーヌ, G・ヴィガレロ[監修])／『オンライン国際フォーラム記録集 出自を知ることがなぜ重要なのか(IGS Project Series;26)』(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『ガールズ・メディア・スタディーズ』(田中東子[編])／『ガラスの天井に挑む女たち』(幸田シャーミン)／『ガンディー「知足の精神」』(モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー[著],森本達雄[編訳])／『ケアの倫理とエンパワメント』(小川公代)／『コロナ禍とジェンダー(年報政治学;20222-1)』／日本政治学会[編]／『差別はたいてい悪意のない人がする―見えない排除に気づくための 10 章』(キム・ジへ(尹怡景)[訳])／『サラ金の歴史―消費者金融と日本社会』(小島庸平)／『三色のキャラメル : 不妊と向き合ったからこそわかったこと』(永森咲希)／『ジェンダーから見た世界史 : 歴史を読み替える 』(三成美保, 姫岡とし子, 小浜正子[編])／『ジェンダー研究(ジェンダー研究;25)』(ジェンダー研究所)／『ジェンダー学の最前線』(R.コンネル[著])／『女性参政 70 周年記念 女性と政治資料集』(財団法人 市川房江記念会女性と政治センター)／『女性参政資料集 1987 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会)／『女性参政資料集 1999 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会)／『女性参政資料集 2003 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会)／『女性参政資料集 2007 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会)／『女性参政資料集 2011 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会女性と政治センター)／『女性参政資料集 2015 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会女性と政治センター)／『女性参政資料集 2019 年版 全地方議会女性議員の現状』(財団法人 市川房江記念会女性と政治センター)／『西洋思想の日本的展開』(小泉仰[監修],西洋思想受容研究会[編])／『専業主婦でなぜ悪い!?』(L・バートン, J・ディットマー, C・ラブレス[著],遠藤公美恵[訳])／『戦後沖縄と復興の「異音」―米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』(謝花直美)／『先端医療分野における欧米の生命倫理政策に関する原理・法・文献の批判的研究(生命倫理・生命法研究資料集, VI)』(芝浦工業大学工学部応用倫理学研究室)／『特別招聘教授プロジェクト特集 アネッテ・シャート＝ザイフェルト(IGS Project Series;16)』(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『特別招聘教授プロジェクト特集 ラウラ・ネンツィ(IGS Project Series;15)』(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『〈体育会系女子〉のポリティクス―身体・ジェンダー・セクシュアリティ』(井谷聡子)／『挑発する少女小説』(斎藤美奈子)／『手洗いの疫学とゼンメルワイスの闘い』(玉城英彦)／『「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて』(山田礼子)『東南アジアと「LGBT」の政治―性的少数者をめぐって何が争われているのか』(日下渉.伊賀司,青山薫,田村慶子[編])／『日本の男性不妊―当事者夫婦の語りから』(竹家一美)／『妊活ヒプノセラピー : プレママのあなたを支える!』(リンジ・イーストバーン[著],タイタノ中村若葉[訳])／『墓をめぐる家族論 : 誰と入るか、誰が守るか』(井上治代)／『ふたりのママから、きみたちへ』(東小雪+増原裕子)／『北欧福祉国家は持続可能か』(クラウス・ペーターセン,スタイン・クーンレ,パウリ・ケットネン[編著],大塚陽子,上子秋生[監訳])／『母性の抑圧と抵抗―ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』(元橋利恵)／『＃MeToo の政治学―コリア・フェミニズムの最前線』(鄭喜鎭編;権金炫怜[著],金李イスル[訳])／『ロック母』(角田光代』

・2022 年度、購入によりジェンダー研究所から以下の DVD が新規収蔵された。[『DVD』(発行者名)]

『難病と闘って気づいたこと (命と死の授業シリーズ;1)』／『日常の行方(終わりのない生命の物語シリーズ;2)』／『いじめ・自殺を防ぐために(命と死の授業シリーズ;3)』／『男らしさ／女らしさ―社会を覆うジェンダー・ステレオタイプ―(映像で学ぶジェンダー入門:1)／『多様な「性」(映像で学ぶジェンダー入門:2)／『結婚・家庭にお

けるジェンダー（映像で学ぶジェンダー入門：3）／『労働とジェンダー（映像で学ぶジェンダー入門：4）／『性暴力と性の商品化（映像で学ぶジェンダー入門：5）／『就任後 100 日間 ＝100 days（オバマ政権 8 年の軌跡：1）』（BBC）／『オバマケア" : 医療保険制度改革 ＝Obamacare（オバマ政権 8 年の軌跡：2）』（BBC）／『対中東政策 ＝Don't screw it up（オバマ政権 8 年の軌跡：3）』（BBC）／『歴史は正義へと"弧"を描く ＝The arc of history（オバマ政権 8 年の軌跡：4）』（BBC）／『21 世紀の子どもたちの未来 ： 国連ミレニアム宣言から 15 年後（世界の諸問題と子どもたち：1）』（BBC）／『ガザの紛争下の子どもたち．丸善出版（世界の諸問題と子どもたち：2）』（BBC）／『ボコ・ハラムに拉致された少女たち．丸善出版（世界の諸問題と子どもたち：3）』（BBC）／『マララ〜教育を求めて闘う少女〜』（BBC 制作、北村友人[監訳]）／『怒りを力に ACT UP の歴史』（ジム・ハバード）／『おとこたち』(岩井秀人[作・演出])／『オレの心は負けてない』（在日の慰安婦裁判を支える会）／『外泊』（キム・ミレ）／『家庭の中の人権』（越坂康史）／『ここにおるんじゃけぇ』（下之坊修子[監督],岡崎まゆみ[編集]）／『三重苦を乗り越えて』（BBC）／『て』(岩井秀人[作・演出])／『投げられやすい石』(岩井秀人[作・演出])
『ナディアの誓い』（アレキサンドリア・ホンバッハ[監督]）／『何を怖れる』（松井久子[監督]）／『HAFU』（西倉めぐみ，高木ララ[監督・撮影]）／『夫婦』(岩井秀人[作・演出])／『身近な人権問題』（八頭司享）／『忘れてほしゅうない ： 隠されてきた強制不妊手術』（優生思想を問うネットワーク）

【資料】⑥ 史料電子化プロジェクト：電子化イベント一覧

女性文化資料館（1975-1985）/女性文化研究センター（1986-1995）イベント一覧				
年度	活動区分	開催日	イベントタイトル	登壇者
1977	講演会	1977/9/22	湯浅年子先生講演会	湯浅年子
(S52)	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1978/1/14	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
	研究会	1978/2/8	山川菊栄と女性解放思想(木下　研究会)	
	研究会	1978/3/6	社会学における家族	
	研究会	1978/3/22	山川菊栄研究	
1978	研究会	1978/6/6	女性史研究会　欧米の女性論	
(S53)	研究会	1978/7/27	女性史研究会　欧米の女性論	
1979	研究会	1979/5/24	女性の教育と女性問題	
(S54)	研究会	1979/10/4	アメリカ婦人労働の法的諸問題	
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1980/1/26	総合科目「婦人問題」に関するｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	
	研究会	1980/2/12	中山みきの思想と歩み―陽気づくめの世界をめざして 50 年―	吉原敬子
		1980/3/1	杉田和子、小島栄子、岩本のり子　於: 中村屋	
1980	研究会	1980/4/1	平安時代の相続制と女子相続権―『平安遺文』文書を中心として―	服藤早苗
(S55)	研究会	1980/4/23	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅰ〕	村松弘子ほか
	研究会	1980/5/29	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅱ〕	田中和子ほか
	研究会	1980/7/3	インドにおける女性の政治的役割	Chandra Mudaliar
	研究会	1980/10/18	〔コペンハーゲン婦人会議及び婦人差別撤廃条約について〕【婦人問題懇話会 講演会】	船橋邦子ほか
	研究会	1980/10/20	性役割とセクシズム	小林啓子
	研究会	1980/11/5	Feminist Literary Criticism からみた『砂の女』	Chigusa Kimura-Steven
	研究会	1980/12/25	目黒依子『女役割』について	田中和子ほか
	研究会	1981/2/12	アメリカの女性史	金子幸子ほか
	研究会	1981/3/27	フランス社会史の動向と女性史	小島智恵
1981	研究会	1981/5/27	人類学者のみた個人的アメリカ女性史	Frederica de Laguna
(S56)	研究会	1981/5/29	Role's of Women's College	Frederica de Laguna
	研究会	1981/6/12	『性の署名』について(1)	内藤和美ほか
	研究会	1981/7/4	『性の署名』について(2)	平川和子
	研究会	1981/7/12	高群逸枝の婚姻・家族形態研究の意義について	関口裕子
	研究会	1981/9/9	カナダの女性学について	Patricia Morley ほか
	研究会	1981/10/16	家族・親族理論研究動向	田中真砂子
	研究会	1981/11/25	兼業農家女性の就労形態の変容―長野県諏訪地方の場合―	久保桂子
	研究会	1981/12/15	オーストラリアと日本の婦人運動／ニュージーランドの女性の地位について	Romanovsky Ulrike ほか
	研究会	1982/1/27	千葉県における廃娼運動―国防婦人会との関連において―	船橋邦子
	研究会	1982/3/24	近現代日本の社会教育と婦人団体	木下　ユキエ
1982	研究会	1982/4/23	女子大学の存在意義を考える―アメリカ・フランス・インド等の各国を見て―	広中和歌子

(S57)	研究会	1982/5/22	女性学研究会　井上輝子、目黒依子	
	研究会	1982/6/4	近世における女性と家族	林玲子ほか
	研究会	1982/10/22	平安時代の養子制度について―日本家族の特質をテーマに―	William Mccullough ほか
	研究会	1982/11/24	バングラディシュの女性について	武藤敦子
	研究会	1982/12/13	Consort, mother, beloved, "Vamp"; the symbolic depiction of womanhood in Indian calendar art	Patricia Uberoi ほか
	研究会	1983/1/24	出産の社会史―家族の近代化に関連して―	落合恵美子
	研究会	1983/2/15	韓国の女性について	鄭金子ほか
	研究会	1983/3/22	『巫女の文化』について―古代女性史の見直しのために―	倉塚曄子ほか
1983	研究会	1983/5/30	ガブリエラ・ミストラルと『女性読本』について	田村さと子
(S58)	研究会	1983/6/30	Japanese-German Marriage in Japan: a fentative approach	Irene Hardach-Pinke
	研究会	1983/7/29	『性の深層』をめぐって―現代西ドイツの女性運動との関連で―	大沢三枝子
	研究会	1983/9/26	『妻と夫の社会史』について	山本郁子ほか
	研究会	1983/11/1	女性の側からジェンダーを考える	若井文恵ほか
	研究会	1983/11/21	Intellectual Differnces between Woman and Man "Inherited or Acquired?"	Virginia Mann ほか
	研究会	1983/12/15	機械女工たちの近代	古庄正
	研究会	1984/2/22	『婦女新聞』の出発	石崎昇子ほか
	研究会	1983/3/13	フィリップ・アリエス研究―子ども・教育・女性―	波多野完治ほか
1984	研究会	1984/4/24	日本の離婚調停に関する研究	Taimie Bryant
(S59)	研究会	1984/5/15	『更級日記』作者の宗教的コンプレックス	高木きよ子
	講演会	1984/5/31	お茶の水女子大学百年史刊行記念講演会	林太郎ほか
	研究会	1984/6/20	キリスト教文化と女性	杉田弘子
	研究会	1984/7/6	The Function of Libraries,Women' Centers,and "Women's Studies" in doing Feminist Research	Helen Wheeler ほか
	研究会	1984/10/23	『私生子』概念の発生と消長―明治期を中心とする法制・歴史と実際の扱い―	田中弘子
	研究会	1984/11/20	Woman and Nature	Susan Griffin ほか
	研究会	1984/12/11	中国女性史研究―小野和子『中国女性史』を読んで―	加藤直子
	研究会	1985/2/25	樋口一葉の文学―『十三夜』と『人形の家』の比較を中心に―	フランチスカ・フンチカ
	研究会	1985/3/14	近世関東農村における女性労働者の存在形態―年季・日雇奉公人の分析から―	青木道子
1985	研究会	1985/4/26	ユートピアと性	倉塚平
(S60)	研究会	1985/5/29	西欧近代の結婚観―キルケゴールをめぐって―	野村明代
	研究会	1985/6/12	清代において模範とされている女性について	Susan Mann
	研究会	1985/6/13	食事が子供の身体と心に与えるもの	
	研究会	1985/7/4	韓国女性の政治的、社会的地位	白京男
		1985/10/5	第三世界の女性たちと私たち―ナイロビ報告（日本婦人問題懇話会）	
	研究会	1985/10/28	『源氏物語』にみる婚姻と居住形態と相続―光源氏と紫の上と明石君をめぐる―視角―	木下ユキエ
	研究会	1985/11/15	主婦とテレビ	香取淳子
	シンポジウム	1985/11/27	産むことを考える	加藤シヅエほか
	研究会	1985/12/18	イタリア女性解放思想の歴史と今日的な段階―19 世紀末から現在に至る主要な事項―	Argnani Fausta

	研究会	1986/1/16	スイスにおける女性史研究―論文集『女性』と『イティネラ』にみる女性史家の研究動向―	佐藤るみ子
	研究会	1986/3/3	「円地文子論―"自然な女"の周辺―」	宮内淳子
1986	研究会	1986/4/25	フランス現代女性思想の流れ―ボーヴォワール・クリスティヴァ・イリガライ	棚沢直子
(S61)	研究会	1986/6/24	日本文化における『悪女』	Valerie・L・Durham
	研究会	1986/10/3	航空史における女性の役割―ドイツ女性スポーツ史の視角から	Gertrud Pfister
	研究会	1986/11/20	韓国の家族について	徐炳淑
	研究会	1986/12/8	バングラディシュの女性―女性政策の視点から―	Jowshan Ara Rahman ほか
	研究会	1987/1/14	中東世界の女性―イスラームの原理と実像	黒田美代子
	研究会	1987/3/3	マレーシアの女性	Goh Beng Lan
1987	研究会	1987/4/23	公民の妻/青年団における女子活動の設立	渡辺洋子ほか
(S62)	研究会	1987/5/15	Impact of Economics & Technological Change on Women	Tamara・Hareven
	研究会	1987/6/24	円地文子の描いた女性像	アイリーン・マイカルス・アダチ
	研究会	1987/7/14	家計構造の長期的変容	田窪純子
	研究会	1987/8/25	舞踊と語り……祖母の語りとその姿	江川まゆみ
	研究会	1987/10/26	ラテン・アメリカの女性像	三田千代子
	研究会	1987/11/25	和泉式部と仏教	小野美智子
	研究会	1987/12/16	タイ社会における女性の役割	小野沢・ニッタヤー
	研究会	1988/2/10	日本における転勤の問題とデュアル・キャリア・ファミリーについて	青木由紀
	研究会	1988/3/10	新しい家庭科をめざして	西谷洋子
	研究会	1988/3/10	家庭科における消費者教育	小関禮子
1988	研究会	1988/4/11	Income Generation of Women in Rural Bangladesh	Kohinoor Begum
(S63)	研究会	1988/5/26	South Asian Women: Challenges & Prospects	Urmila Phadnis
	研究会	1988/6/22	Some Implications of Women's Status in China	Beverly Y. B. Hong
	研究会	1988/7/8	性役割意識に関連する韓国人の価値観	金炳端
	研究会	1988/9/7	こどもの虐待と放置―小児科の全国調査から―	内藤和美
	研究会	1988/11/25	フェミニスト研究の軌跡―Stanley & Wise の『フェミニズム社会科学に向かって』が提起するもの―	矢野和江
	研究会	1989/2/21	アジアにおける女性と仕事	Noeleen Heyzer
	研究会	1989/3/7	日本のフェミニストの意識と alternative な生活スタイル	ゴー・ベン＝ラン
1989	研究会	1989/4/5	男女平等教育の実践に向けて	Peggy McIntosh
(H1)	研究会	1989/4/14	Education of Scientist who Happen to Be Women	Emily L. Wic
	研究会	1989/6/1	鎌倉期の乳父について―その存在形態と乳母との関連	秋山貴代子
	研究会	1989/6/12	Modernisation en Iran et Le Changement Socio-cultural de Role de la Femme	Nasrin F. Hakami
	研究会	1989/7/17	Problems of Homeless Children in India	Rajani Paranjipe
	合評会	1989/9/11	原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』について	田中真砂子
	研究会	1989/10/4	スペイン内戦下の女性たち	秋山充子
	研究会	1989/11/17	Women and / in Media	Ann Simonton
	シンポジウム	1989/12/13	お茶の水女子大学留学生懇談会	

	シンポジウム	1989/11/29,12/20,1990/3/19	特定研究「女性のライフコースの多様化と女子大学の役割」	Peggy McIntosh
1990 (H2)	シンポジウム	1990/4/23,24	『母性』をめぐる日独シンポジウム	舘かおるほか
	研究会	1990/5/18	Systematic Planning for Women's in Development and Activities	Barbara Knudson
	研究会	1990/6/14	マレー農村社会における性役割―東南アジアの伝統とイスラム規範のはざまにて	花見槙子
	研究会	1990/6/26	Women's Mothering and Working Roles in Japan and the United States	Brenda Bankart
	研究会	1990/9/25	中央ユーラシア遊牧民の歴史にみる女性像	宮脇淳子
	研究会	1990/10/23	福沢諭吉の女性論	杉原名穂子
	研究会	1990/11/22	日本近代女性の自伝を読む	Ronald P. Loftus
	研究会	1990/12/5	精神的母性	Elisabeth Gössmann
	研究会	1991/3/13	女性の自然科学研究者の進路決定要因の研究について	ビヴァリー・ゲッツイ
1991 (H3)	研究会	1991/5/29	大正時代の『令女会』の歌曲―女学生の歌唱と女学生向け創作歌曲の一考察	坂本麻実子
	研究会	1991/6/10	An Anthropological Study of Gender Science in Japan & U.S.	Sharon Traweek
	研究会	1991/6/18	To a Safer Place	Dane Raphael
	研究会	1991/10/4	Woman's Movement in Comparative Perspective	Ilse Lenz
	研究会	1991/10/9	Women of the Tlingit Society in Historical Perspective	Frederica de Laguna
	研究会	1991/10/31	Confusionism and Modern Chinese Women's Family Life	黄育馥
	研究会	1991/11/15	フェミニズムの方法としてのメモリーワーク	Frigga Haug ほか
	研究会	1991/11/19	クリスティヴァ『女の時間』を読む	棚沢直子
	研究会	1991/12/19	The Situation of the Swedish Women Today	Malin Ronnblom
	研究会	1992/1/30	自治体における女性学	粟国千恵子
	研究会	1992/2/12	中国の少数民族における女性	劉耀荃
	研究会	1992/2/20	アメリカ女性学の現段階: 女性学の理論家と県空者養成システム	三宅義子
	研究会	1992/3/13	『女性と労働』日独シンポジウム	
1992 (H4)	研究会	1992/4/15	Women's Studies in Canada	Naomi Black
	研究会	1992/4/20	Sexuality and Reproduction in Women's Utopian Dystopian Literature	Blaine Martin
	研究会	1992/6/19	湯浅年子博士資料的研究の歩み	松田久子
	研究会	1992/6/22	ジェーン・アダムスの思想と行動	米澤正雄
	研究会	1992/7/20	女性と開発をめぐる諸問題	村松安子
	研究会	1992/10/26	沖縄における女性の就労と性役割分業観	国吉和子
	講座	1992/11/21,28,12/5	次世代育成力を考える	原ひろ子ほか
	研究会	1993/1/28	南インド・ナガラッタールにおける親族・婚姻及び女性	西村祐子
1993 (H5)	研究会	1993/5/18	中国における職業分化に伴う女性の価値観と行為方式の変化について	沙蓮香
	研究会	1993/6/24	女性と表彰―"模範嫁"表彰の聞き取り調査をめぐってー	熊澤知子
	研究会	1993/7/16	ベルリンの老人ホームとケア付き集合住宅	大澤真理
	研究会	1993/9/22	女性の自己表現と文学―野上彌生子におけるフェミニズムと形式―	藤田和美
	研究会	1993/10/15	―政治学者のみたジェンダー研究―オリエンタリズムとの関連―	石田雄

	特定研究懇談会	1993/11/13	Women in Higher Education－A case of the University of California USA－	Dr.Maresi Nerad
	研究会	1993/11/14	変容する男性社会―労働、ジェンダーの日独比較	高島道枝ほか
	研究会	1993/12/3	Gender,Justice and Therapy: Can One Be a Feminist and Practise Family Therapy?	Jan McDowell
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1993/12/14,15	女性とメディア	
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1994/1/20	特定研究「ライフコースの多様化の時代における大学教育と女性」	
1994 (H6)	研究会/ｼﾝﾎﾟ	1994/4/7	エコロジーとフェミニズムを考える	Maria Mies ほか
	研究会	1994/6/1	オーストラリア女性史研究―女性史からフェミニスト史へ	Vera Mackie
	研究会	1994/7/27	いけ花と日本女性:知の発達・地から・ジェンダー	飛田尚弥
	研究会	1994/8/29	Feminist Studies and Qualitative Empirical Methods: the Case of Sex Tourism and Traffic in Women	Ilse Lenz
	研究会	1994/9/27	Internationalization and Gender Relations: Theoretical Approaches	Ilse Lenz
	研究会	1994/10/31	家族法改正をめぐる文献とその論点	海妻径子
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1994/11/2	学内共同教育研究プロジェクト・大学における女性学及び女性学研究センターの役割について	
	研究会	1995/1/27	How to combine Parenthood and Work?―Policies on Gender in Sweden―	Rita Liljestrum
	研究会	1995/2/21	Current Trends in Women's Studies in India: Gender,Development and Empowerment/	Malavika Karlekar ほか
	研究会	1995/3/1	Women, Education, and Development in Bangladesh	Saleha Begum
1995 (H7)	研究会	1995/4/13	日本の女性国会議員―その形成と構造	大海篤子
	研究会	1995/5/12	姉さん女房の社会学	Ursula Richter
	研究会	1995/6/16	女性と政治	Elic Plutzer
	研究会	1995/7/3	遺伝子とジェンダー	Joan Hideko Fujimura
	研究会	1995/9/18	アメリカのフェミニスト法理論の現在	Frances Olsen
	研究会	1995/10/13	社会主義フェミニズムの観点から見る『雁』	玉枝 Prindle
	研究会	1995/11/24	エコロジーとフェミニズム	山本良一
	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	1995/12/2	湯浅年子メモリアルカンファレンスーエレーヌ・ランジュヴァン・ジョリオをむかえて	Hélène Langevin-Joliot
	研究会	1995/12/19	The place of women in Egyptian Society	Samia Khedr Saleh
	研究会	1996/2/14	ネパールにおける Management と WID の視点	福士恵理香
	研究会/ｼﾝﾎﾟ	1996/3/19	日本の学問研究とジェンダー	舘かおる

【資料】⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

（平成 27 年 3 月 25 日制定）

(趣旨)

第 1 条　この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第 4 条第 2 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

(目的)

第 2 条　研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第 3 条　研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

(1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査

(2) ジェンダー研究に関する教育研修

(3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理

(4) ジェンダー研究に関する情報の提供

(5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第 4 条　研究所は、次に掲げる者をもって組織する。

(1) 研究所長

(2) 教員

(3) 研究員

(4) その他学長が必要と認めた職員

2　研究所に、次に掲げる者を加えることができる。

(1) 副研究所長

(2) 特別招聘教授

(3) 特任職員

(4) 客員研究員

(5) 研究協力員

(研究所長)

第 5 条　研究所長は、男女共同参画を担当する副学長並びに基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員(以下「系会議構成員」という。)である教授のうちから学長が任命する。

2　研究所長は、研究所の業務を掌理する。

3　研究所長の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

4　研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(副研究所長)

第 6 条　副研究所長は、系会議構成員のうちから、研究所長が指名する。

2　副研究所長は、研究所長から指定された業務を掌理する。

3　副研究所長の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

4　副研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)
第 7 条　研究員は、第 3 条に掲げる研究及び業務に従事する。
2　研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。
3　研究員の任期は 2 年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。
(客員研究員)
第 8 条　客員研究員は、第 3 条に掲げる研究及び業務に参画する。
2　客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。
3　客員研究員の任期は 1 年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。
(研究協力員)
第 9 条　研究協力員は、第 3 条に掲げる研究及び業務に協力する。
2　研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。
3　研究協力員の任期は 1 年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。
(運営会議)
第 10 条　研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議(以下「運営会議」という。)を置く。
2　運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。
(1)　研究所長
(2)　副研究所長
(3)　第 4 条第 1 項第 2 号に掲げる教員
(4)　第 4 条第 1 項第 3 号に掲げる研究員のうちからグローバル女性リーダー育成研究機構長(以下「研究機構長」という。)が指名する者
(5)　その他研究機構長が必要と認めた者
3　運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。
4　運営会議の構成員は、第 2 条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。
5　研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
6　本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。
(事務)
第 11 条　研究所の事務は、企画戦略課が行う。
(雑則)
第 12 条　この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附　則
1　この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。
2　国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。
附　則
この規則は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。
附　則
この規則は、令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

【資料】⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規定

《編集方針》

1.『ジェンダー研究』(以下、本誌)は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。

2. 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。

3. 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。

4. 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。

5. 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。

6. 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

《投稿規定》

1 投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。

2 投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する、原則として修士号取得相当以上とする。

3 投稿する論文は、未発表の論文に限る。なお、この規程に違反した場合、新たな投稿を受け付けないなど、しかるべき措置をとる。

4 論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。

5 投稿論文は、

・日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 20000 字以内

・英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 8500 ワード以内

・なお、1 図表 500 字相当、1 ページを要する場合は 1000 字相当とする

・挿図の場合は、1 ページあたり 1000 字、刷り上がり 20 頁内に入ることを原則に、およそ 20 点までとして全体を構成する

・挿図に用いる図版の掲載許可については、投稿者が自らの責任において然るべき手続きをとる。なお許可に要する費用は、投稿者負担とする。

＊定められた字数などの制限を超えた場合、形式において甚だしく不備がある場合には、受理できない。

6 論文の提出時には、本文・図表・参考文献のほかに、以下についても提出すること。

6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を、日本語と英語とで記す。

(タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。)

6-2 日本語要旨。400 字以内。

6-3 英語要旨。200 ワード以内。ネイティブチェック済のもの。

6-4 キーワード。日本語・英語ともに 5 語以内で、それぞれの要旨の後に記載する。

なお、執筆者を特定するようないかなる情報(謝辞、科研番号)も記載してはいけない。

7 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、必要事項を入力したうえで、メール添付にて送付すること。

日本語投稿フォーム
https://form.jotform.me/72482244933459

英語投稿フォーム
https://form.jotform.me/72488720633461

8 本文と要旨などのテキストのデータは Word と PDF のファイルにし、図、表のデータは Word または Excel と PDF にし、写真は JPEG と PDF のファイルにして提出すること。

9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。

10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める＜『ジェンダー研究』執筆要項＞に従う。英語の投稿論文は Style Sheet for *Journal of Gender Studies* とする。

11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。ただし、本投稿規定・執筆要項や本誌の趣旨に合致しない原稿、また学術的論文としての水準を著しく達していないと判断された場合、審査の対象外とする場合もある。

12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、修正対応表をつけて、メールにて提出しなければならない。

13 投稿者による校正は原則 2 回までとする。

14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。

15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。

16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

改訂
1. 2017 年 10 月 27 日制定
2. 2021 年 5 月 14 日改訂

『ジェンダー研究』執筆要綱
http://www2.igs.ocha.ac.jp/wp-content/uploads/2019/11/yoko2019.pdf

【資料】⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト　プライバシー・ポリシー

1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所（以下、本研究所）ウェブサイトでは本研究所のイベント開催に際して、イベント参加申込者の個人情報（氏名等により特定の個人を識別できるもの）を、本ウェブページ上にて収集することがあります。

2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。

3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。

4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附　則
このプライバシー・ポリシーは、2015 年 7 月 1 日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
ジェンダー研究所（IGS）
2022（令和 4）年度事業報告書

編集担当：申琪榮・和田容子

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel: 03-5978-5846
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
http://www2.igs.ocha.ac.jp

2023 年 7 月作成

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846　FAX: 03-5978-5845
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
http://www2.igs.ocha.ac.jp

iGS
Institute for Gender Studies
Ochanomizu University